

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第361集

西長岡長谷田遺跡・沼田遺跡 発掘調査報告書

ほ場整備事業長岡地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

にし なが おか は せ だ い せき ぬま た い せき
西長岡長谷田遺跡・沼田遺跡

発掘調査報告書

——ほ場整備事業長岡地区関連遺跡発掘調査——

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成11年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,656箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因になりましたほ場整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業との調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は紫波町のほ場整備事業に関連して平成11年度に発掘調査を実施した西長岡長谷田・沼田遺跡の発掘成果をまとめたものであります。遺跡は奈良～平安時代を主体とすることが明らかになり、特に奈良～平安時代の遺構が多く見つかったことで、該期の貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所、紫波町教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に心より感謝申し上げます。

平成12年12月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 千葉浩一

例 言

1. 本報告書は、岩手県紫波町に所在する西長岡長谷田遺跡と沼田遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。各遺跡の所在地は下記の通りである。
西長岡長谷田遺跡----紫波町西長岡長谷田39-1ほか 沼田遺跡----紫波町犬吠森字沼田24ほか
2. 本遺跡の調査はほ場整備事業長岡地区に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。
西長岡長谷田遺跡 (LE57-1360 NNH-99) 沼田遺跡 (LE57-2272 NT-99)
4. 野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次の通りである。
西長岡長谷田遺跡：平成11年7月16日から8月31日 1,400m²
沼田遺跡：平成11年9月1日から10月25日 900m²
調査・整理担当者：中村直美 丸山浩治
5. 室内整理の期間は次の通りである。
西長岡長谷田遺跡：平成11年11月1日から1月31日
沼田遺跡：平成12年2月1日から3月31日
6. 出土品の鑑定および分析は次の個人・機関に委託した。
石材鑑定-----花崗岩研究所（代表 矢内桂三）
鉄製品の保存処理-----新日鉄釜石文化財処理センター
炭化材樹種同定-----日本木炭協会
7. 発掘調査において、次の機関に協力を得た。
紫波町教育委員会 盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所
8. 野外調査では紫波町の地元の方々に協力をいただいた。
9. 本書の執筆は、I. 調査に至る経過を佐々木清文が、その他を中村直美と丸山浩治が分担した。
10. 本遺跡で出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

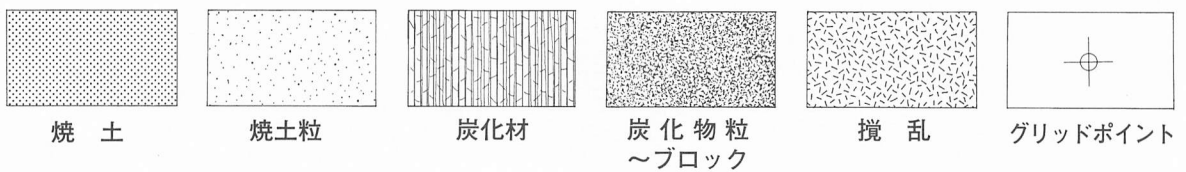
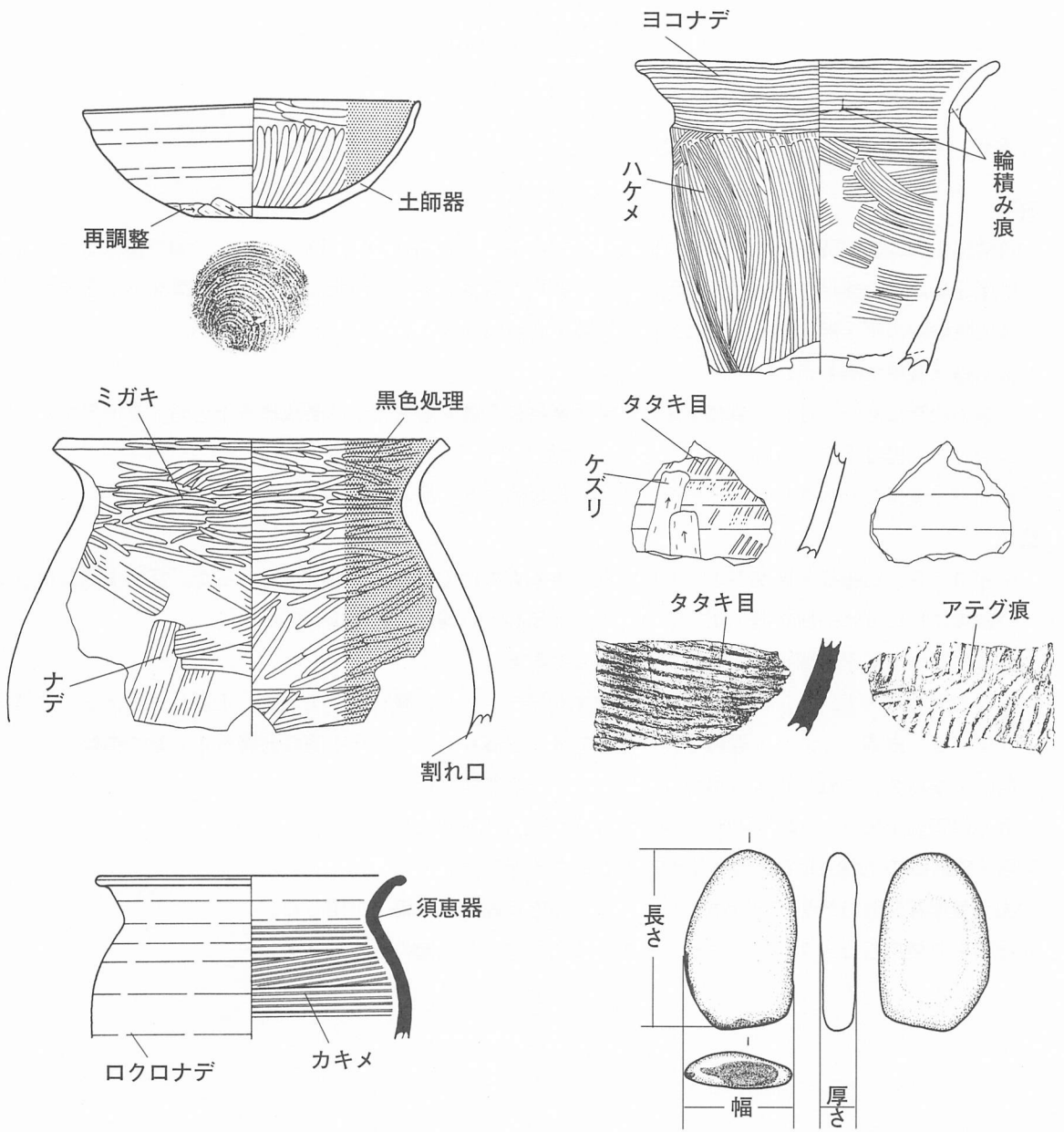
1. 遺構・遺物図の用例は下記の通りである。

遺構

- ①遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基本に1/400の縮尺図を作成して1/800で掲載した。各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部に縮尺の変更もあり、図版にはそれぞれスケールを付した。
 竪穴住居跡の平・断面図－1/50、土坑の平・断面図－1/40。
- ②推定線は破線で表した。
- ③土層の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- ④図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。
- ⑤挿図中で使用したスクリーントーンの表示は次頁の通りである。

遺物

- ①土器のうち、口縁部・底部が1/6以上残存するものに付いては反転実測を行った。反転実測に適さない破片に付いては平面実測・拓本をとった。鉄製品・石器はすべて掲載した。
- ②掲載遺物の縮尺率・個々の凡例は以下の通りである。
 土器の実測図－1/3、拓本－1/3、剥片石器－1/2、礫石器－1/3、土製品－1/2、鉄製品－1/2、鉄滓－1/2。遺物写真に付いては、土器≒1/3、その他の遺物≒1/2で掲載した。実測図・写真共、これに反する場合は個々にスケールを付した。
- ③遺物観察表中の（ ）は推定値を、－は残存値を示している。
- ④竪穴住居跡の主軸方位は、カマドが設置された壁辺に直交する方向とした。
- ⑤国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。
- ⑥挿図中で使用したスクリーントーンの表示は次頁に示した図の通りである。



図版凡例

目 次

序

例言・凡例

【本文目次】

I 調査に至る経過	1	2. 検出された遺構と遺物	9
II 遺跡の立地と環境	1	[1] 竪穴住居跡	9
1. 遺跡の立地	1	[2] 土坑	29
2. 周辺の地形	2	[3] 遺構外出土遺物	30
3. 周辺の遺跡	3	3. まとめ	36
III 調査の方法と整理	5	V 沼田遺跡	
1. 調査の方法	5	1. 基本層序	52
2. 室内整理	5	2. 検出された遺構と遺物	53
IV 西長岡長谷田遺跡		[1] 竪穴住居跡	53
1. 基本層序	8	[2] 土坑	66
		[3] 遺構外出土遺物	72
		4. まとめ	73

【表目次】

周辺の遺跡一覧表	3
----------	---

【図版目次】

第1図 岩手県図に見る遺跡の位置	1	第13図 2・3号竪穴住居跡②	19
第2図 地形分類図	2	第14図 2号竪穴住居出土遺物①	20
第3図 周辺の遺跡分布図	4	第15図 2号竪穴住居跡出土遺物②	21
第4図 調査区周辺の地形図	6	第16図 3号竪穴住居跡出土遺物	22
(西長岡長谷田遺跡)		第17図 4・5号竪穴住居跡	24
第5図 基本土層柱状図	8	第18図 4・5号竪穴住居跡出土遺物	25
第6図 1号竪穴住居跡①	10	第19図 6号竪穴住居跡	27
第7図 1号竪穴住居跡②	11	第20図 6号竪穴住居跡出土遺物	28
第8図 1号竪穴住居跡出土遺物①	12	第21図 1号土坑	29
第9図 1号竪穴住居跡出土遺物②	13	第22図 遺構外出土遺物①	32
第10図 1号竪穴住居跡出土遺物③	14	第23図 遺構外出土遺物②	33
第11図 1号竪穴住居跡出土遺物④	15	第24図 遺構外出土遺物③	34
第12図 2・3号竪穴住居跡①	18	第25図 遺構配置図	35

(沼田遺跡)	
第1図	基本土層柱状図……………52
第2図	1号竪穴住居跡……………54
第3図	1号竪穴住居跡出土遺物①……………55
第4図	1号竪穴住居跡出土遺物②……………56
第5図	1号竪穴住居跡出土遺物③……………57
第6図	2号竪穴住居跡出土遺物……………59
第7図	2号竪穴住居跡①……………60
第8図	2号竪穴住居跡②……………61
第9図	3・6号竪穴住居跡……………62
第10図	4・5号竪穴住居跡……………64
第11図	3・4・5号竪穴住居跡出土遺物……………65
第12図	1・2号土坑……………67
第13図	3～6号土坑……………69
第14図	6号竪穴住居跡・ 遺構外出土遺物……………70
第15図	水田部メインセクション……………71
第16図	遺構配置図……………74

【写真図版】

(西長岡長谷田遺跡)	
写真図版1	空中写真……………38
写真図版2	土層断面……………39
写真図版3	1号竪穴住居跡……………40
写真図版4	2・3号竪穴住居跡……………41
写真図版5	4・5号竪穴住居跡……………42
写真図版6	6号竪穴住居跡・1号土坑……………43
写真図版7	1号竪穴住居跡出土遺物①……………44
写真図版8	1号竪穴住居跡出土遺物②……………45
写真図版9	2号竪穴住居跡出土遺物……………46
写真図版10	3・4・5号竪穴住居跡出土遺物……………47
写真図版11	5・6号竪穴住居跡・遺構外出土遺物①……………48
写真図版12	遺構外出土遺物②……………49

(沼田遺跡)	
写真図版1	空中写真……………76
写真図版2	土層断面……………77
写真図版3	1号竪穴住居跡……………78
写真図版4	2号竪穴住居跡……………79
写真図版5	3号竪穴住居跡……………80
写真図版6	4号竪穴住居跡……………81
写真図版7	5号竪穴住居跡・1～2号土坑……………82
写真図版8	3～6号土坑……………83
写真図版9	1号竪穴住居跡出土遺物①……………84
写真図版10	1号竪穴住居跡出土遺物②……………85
写真図版11	2・3・4・5号竪穴住居跡出土遺物……………86
写真図版12	6号竪穴住居跡・遺構外出土遺物……………87

I 調査に至る経過

長岡地区は、紫波町の北部に位置し、北上川左岸に開けた水田地帯である。地区内水田は、小区画（10a）であり、小水路は用排兼用水路で、排水不良地となっており、農作業の省力化及び水田の汎用化が困難な状況にある。このため、低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業により、本地域の農業生産性を高め、多様化する農業情勢に対応しうる基盤の整備（区画整理、暗渠排水、農地の集団化）を実施し、併せて関連事業の排水対策特別事業により、支線排水路を整備し、もって農村環境の改善と農家経営の安定を図ることを目的として、平成6年度より事業実施しているものである。

今回、区画整理を行う区域において、西長岡長谷田遺跡及び沼田遺跡の存在が確認されていることから、岩手県教育委員会に依頼し、平成10年10月19日から30日にかけて試掘調査を行った。その結果、遺構が確認されたため、排水路整備および区画整理により遺構が保存出来ない部分について、発掘調査を行うこととなった。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

西長岡長谷田遺跡・沼田遺跡が所在する紫波郡紫波町は岩手県のほぼ中央部に位置し、北は矢巾町・盛岡市、東は大迫町、南は石鳥谷町、西は雫石町にそれぞれ接する。両遺跡は、国土地理院発行／五万分の一地形図「日詰」の図幅に含まれ、西長岡長谷田遺跡は北緯 $39^{\circ} 34' 39''$ ・東経 $141^{\circ} 11' 37''$ 付近、沼田遺跡は北緯 $39^{\circ} 34' 25''$ ・東経 $141^{\circ} 11' 27''$ 付近に位置する。また、両遺跡は東日本旅客鉄道東北本線（JR）古館駅の東方約3.1kmに位置し、南流する北上川の左岸に形成された沖積平野に立地する。両遺跡の南東側には館山、愛宕山、五つ森山等の小規模な丘陵が南-北に連なって位置し、その間には緩やかな谷地形が形成

されている。両遺跡は直線距離で約500mほど離れており、西長岡長谷田遺跡の南東方向に沼田遺跡が位置する。

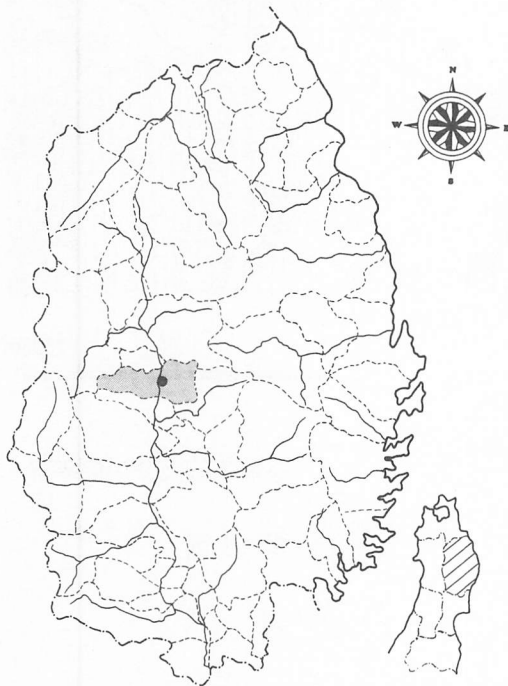
西長岡長谷田遺跡は北上川と南東側の丘陵に挟まれた砂礫段丘の縁辺部、標高98m前後に立地する。これに対し、沼田遺跡は北上川の沖積地に立地しており、標高は約97m前後である。両遺跡と北上川との比高差は約4～5m前後である。

現況は大部分が水田で、一部が畑地となっている。

遺跡の南西約4.25kmには当センターによって近年調査が行われた日詰七久保遺跡、西側約1.8kmには稲村遺跡等がある（第3図参照）。

2. 周辺の地形

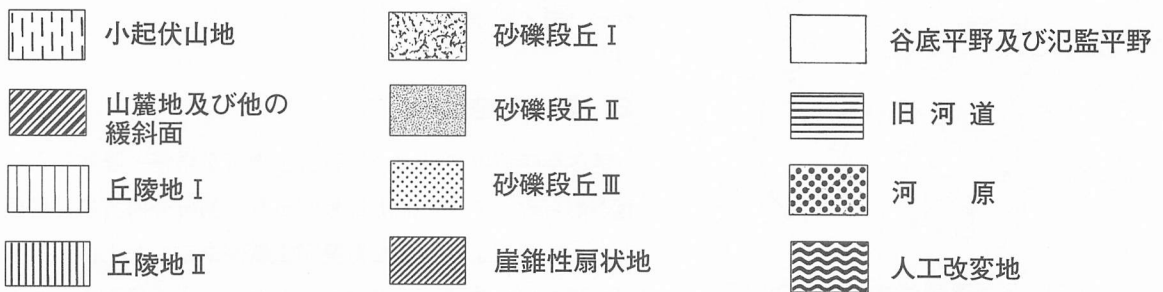
紫波郡紫波町の東方には石灰質物質が堆積・隆起した高地が削られてできた北上山地があり、同町の西方には海底火山や圧力により褶曲した奥羽山脈がある。北上山地・奥羽山脈の両山系は、そのつくりかたが大きく異なるため地



第1図 岩手県図に見る遺跡の位置



0 1000 2000m



第2図 地形分類図

形・地質は甚だ変化に富んでいる。北上山地西部縁辺部あるいは北上川河谷東側は、小起伏山地および中起伏山地からなり、主として古生層および花崗岩類からなる。奥羽山脈東部縁辺部は、基本的に火山灰が堆積し、緑色の岩石となっているグリーンタフで構成されている。高度的にも高い山塊で起伏量400m以上を示す直線状急崖地形となっている。このような両者の構造の違いを受けて、北上川の東岸と西岸では地形が対照的である。北上川西岸は奥羽山脈から流れ出す支流によって形成された大小の扇状地が見られ、この扇状地を刻むかたちで段丘もよく発達している。一方、北上川東岸では北上山地西部縁辺部が北上川に迫るように分布し、小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。紫波町の中央部を南流する北上川は、東北地方最長の河川で、岩手県北部の西岳に源を發し岩手県を縦断して宮城県に入り、飯野川付近で東に向きを変え追波湾に注いでいる。幹線流路延長は247kmに及ぶ。下流では大正から昭和の間の2度にわたり付け替え工事が行われ流路が変わっている。

3. 周辺の遺跡

現在、紫波町内では332遺跡が確認されている。時代別では縄文89、古代174、中・近世49、その他20である。なお、複合遺跡の場合は別個として捉えた。このうち図版内に掲載した遺跡は47遺跡である。

No.	遺跡名	時代	遺構・遺物	所在地	種別
1	手造	古代	土師器、須恵器	江柄字手造	散布地
2	柄内沢田	縄文、古代	縄文土器(後期)、石鏃、土師器、須恵器	柄内字沢田	散布地
3	柄内権現堂	縄文、奈良	縄文土器、土師器	柄内字権現堂83	散布地
4	東長岡天王Ⅱ	奈良、平安	土師器	東長岡字天王	散布地
5	西長岡長谷田	奈良、平安	土師器、須恵器	西長岡字長谷田白山	集落跡
6	六日町	奈良、平安	土師器	西長岡字六日町	散布地
7	沼田	奈良、平安	土師器、須恵器	犬吠森字沼田、字後田	散布地
8	草刈中屋敷	縄文、平安	縄文土器、土師器	草刈字中屋敷	散布地
9	東長岡林崎Ⅱ	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器、須恵器	東長岡字中沢	散布地
10	東長岡林崎Ⅰ	古代	土師器、須恵器、石鏃、石匙	東長岡字中沢	散布地
11	星川竈跡	平安		北田字北田	竈跡
12	大巻間田	古代	土師器	大巻字間田	散布地
13	稻村Ⅰ	古代	土師器	高持字穴上り	散布地
14	新田	古代	土師器、須恵器	二日町字和野	竈跡
15	杉の上Ⅱ	古代	土師器、須恵器	陣ヶ岡字栗木田	集落跡
16	平坊Ⅱ	縄文、古代	縄文土器、土師器	陣ヶ岡平坊	散布地
17	平坊Ⅲ	平安	土師器	陣ヶ岡平坊	集落
18	川原毛	平安	土師器、須恵器	二日町字川原毛	集落跡
19	杉の上Ⅲ	古代	土師器、須恵器	二日町字七久保陣ヶ岡	集落跡
20	宮手追分Ⅳ	古代	須恵器	宮手字追分	散布地
21	日詰七久保	平安	須恵器	日詰字七久保	散布地
22	七久保	古代	土師器、須恵器	日詰字七久保	竈跡
23	日詰上新田	古代	土師器	日詰字上新田	散布地
24	桜町上野沢	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器	桜町字上野沢	散布地
25	桜町下野沢	平安	土師器	桜町字下野沢	散布地
26	日詰下丸森	古代	土師器	日詰字下丸森	散布地
27	西藁	古代	土師器	日詰字牡丹野	散布地
28	桜町中桜Ⅰ	縄文、古代	縄文土器、石器、土師器	桜町字中桜	散布地
29	日詰牡丹野	古代	土師器	日詰字牡丹野	散布地
30	平沢松田Ⅲ	古代	土師器、須恵器	桜町字中森、平沢字松田	散布地
31	平沢松田	古代	土師器	平沢字松田、字佐藤部	散布地
32	平沢境田Ⅲ	平安	須恵器	平沢字境田	散布地
33	桜田田頭	古代	土師器、須恵器	桜町字田頭、字高木	散布地
34	北日詰下藁	古代	土師器	北日詰字下藁	散布地
35	北日詰外谷地	古代	土師器、須恵器	北日詰字外谷地	散布地
36	北日詰外谷地Ⅵ	古代	土師器	北日詰字外谷地	散布地
37	北日詰外谷地Ⅰ	縄文、古代	縄文土器、土師器、須恵器	北日詰字外谷地	散布地
38	北日詰外谷地Ⅱ	縄文、古代	縄文土器、石器、土師器	北日詰字外谷地	散布地
39	北日詰外谷地Ⅴ	古代	土師器、陶器	北日詰字外谷地	散布地
40	北日詰八掛	古代	土師器、須恵器	北日詰字八掛	散布地
41	北日詰東ノ坊Ⅰ	古代～中世	土師器、須恵器、かわらけ	北日詰字東ノ坊	散布地
42	比爪館	10・12C	土師器、須恵器、かわらけ、堀	北日詰字箱清水	城館跡
43	北日詰東ノ坊Ⅲ	古代～中世	かわらけ	北日詰字東ノ坊	散布地
44	北日詰東ノ坊Ⅱ	古代	土師器	北日詰東ノ坊、下東ノ坊	散布地
45	北日詰下東ノ坊	古代	土師器、白磁	北日詰下東ノ坊、字城内	散布地
46	南日詰大銀Ⅰ	古代	土師器	南日詰字大銀、字小路口	散布地
47	北日詰城内Ⅰ	古代	土師器、須恵器	北日詰字城内	散布地

表1 周辺の遺跡一覧表



第3図 周辺の遺跡分布図

Ⅲ 調査の方法と整理

1. 調査の方法

(1) グリッドの設定と遺構名

西長岡長谷田遺跡では平面直角座標（第X系）、 $X = -46824.926\text{m}$ 、 $Y = 30965.322\text{m}$ を基準点1、 $X = -46892.173\text{m}$ 、 $Y = 31064.705\text{m}$ を基準点2として、この2点を結んだ線を基準線とした。そしてこの基準および基準線を延長し、 $5 \times 5\text{m}$ のメッシュで全調査区を区画した。このメッシュの北端を基準として、北西-南東方向には北西からA、Bのアルファベットを与え、北東-南西方向には北東から1、2、3の番号を付し、1A区、7J区と表示した。遺構名は検出順に種別ごとに1号竪穴住居跡、1号土坑というように名称を付した。

沼田遺跡では平面直角座標（第X系）、 $X = -47261.894\text{m}$ 、 $Y = 30732.797\text{m}$ を基準点3、 $X = -47332.219\text{m}$ 、 $Y = 30685.053\text{m}$ を基準点4として、この2点を結んだ線を基準線とした。そしてこの基準点および基準線を延長し、 $5 \times 5\text{m}$ のメッシュで全調査区を区画した。このメッシュの北端を基準として、北西-南東方向には北西からA、Bのアルファベットを与え、北東-南西方向には東から1、2、3の番号を付し、1A区、7J区と表示した。遺構名は検出順に種別ごとに1号竪穴住居跡、1号土坑というように名称を付した。

(2) 粗掘りとは遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

検出面までの深さおよび層序の確認のため、調査区に地形に沿うかたちでトレンチを入れた。その後重機を使用して表土除去を行った。つぎに試掘結果に基づき、人力によって遺構の有無を確認しながら地山まで掘り下げた。遺構が検出された場合には二分法を原則として精査を行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。遺構内出土の遺物は、埋土では上・中・下位にわけて取り上げ、遺構外出土の遺物に付いてはグリッド別に出土した層位を記して取り上げた。

(3) 実測方法・写真撮影

各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた1mのメッシュを基本とした。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて任意の縮尺を用いた。写真撮影は35mmモノクロームとカラースライド各1台と6×9cmモノクローム1台を使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行い、調査終了時点でセスナにより空中写真を撮影した。

2. 室内整理

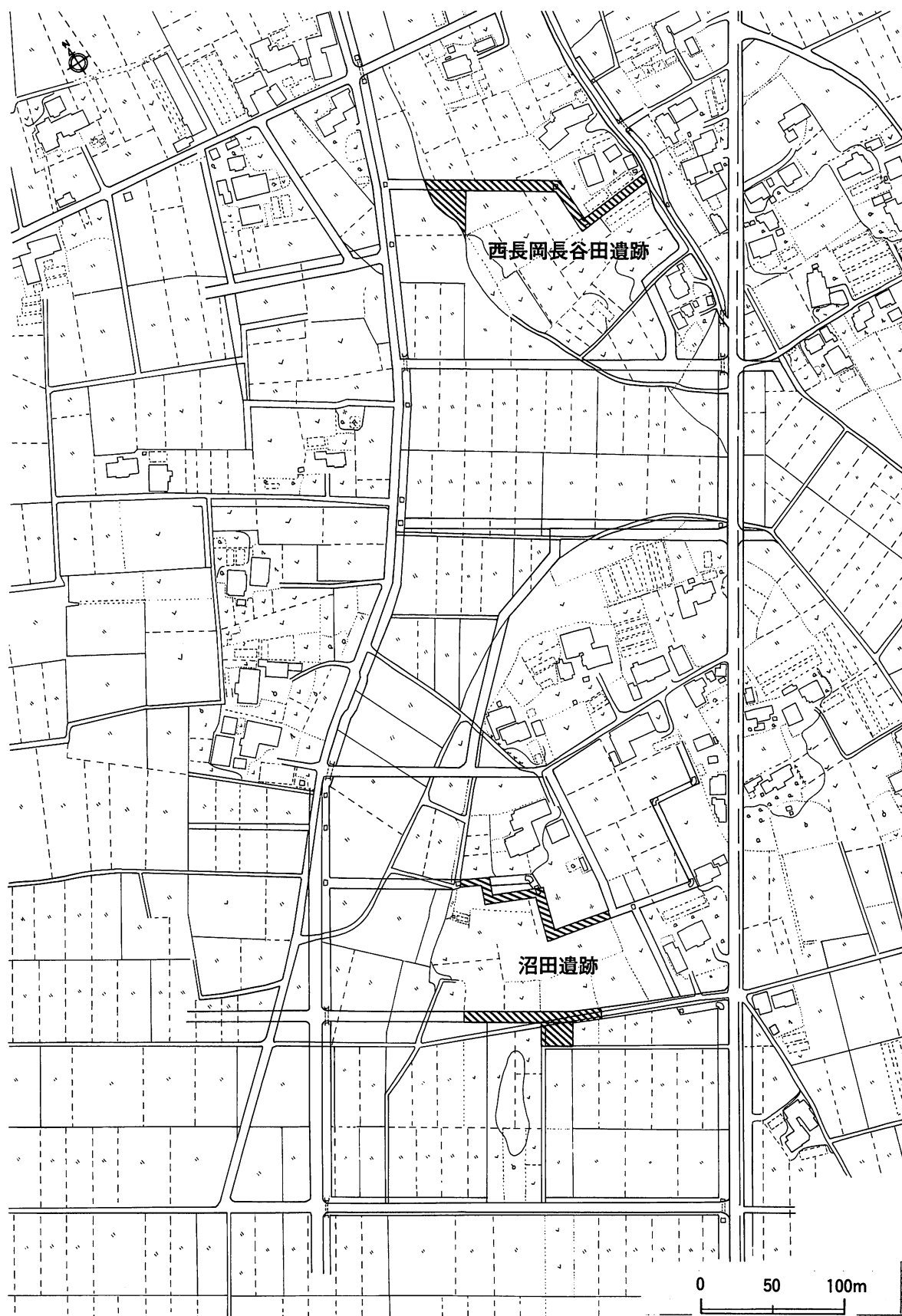
室内での整理作業は、遺物の仕分けと復元、遺物写真撮影・実測・拓本を優先させて行い、これと並行して図版・写真図版の作成を行った。

(1) 遺物整理

遺物整理は水洗、注記、接合、仕分け、掲載遺物の選別、写真撮影、実測、計測、トレースといった手順で進めた。

(2) 遺構図面

現場で記録した遺構平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認、図面の合成、トレースという手順で進めた。



第4図 調査区周辺の地形図

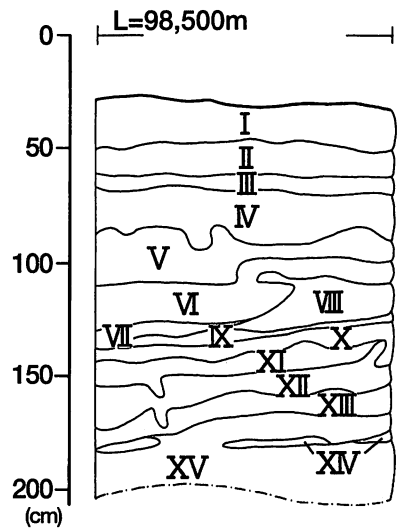
IV 西長岡長谷田遺跡

所在地	紫波町西長岡長谷田39-1ほか
委託者	盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所
遺跡台帳番号	LE57-1360
調査略号	NNH-99
調査面積	1,400m ²
調査期間	平成11年7月16日から8月31日
調査担当者	文化財専門調査員 中村直美・丸山浩治
整理担当者	文化財専門調査員 中村直美・丸山浩治
協力機関	紫波町教育委員会

1. 基本層序

本遺跡は南流する北上川の東約1kmに存在し、北上川によって形成された広範な沖積平野の微高地上に立地している。遺跡の標高は約98mで、この付近は北上川の氾濫源にあたる。そのため、これまでに洪水の影響を幾度となく受けてきたらしく、調査区域内堆積土は大半が砂質である。

今回の調査区域は、東西約160mの細長いクラック状を呈しており、各地点の海拔高度は、3Bグリッド付近で約97.500m、6Fグリッド付近で約98.300m、3Gグリッド付近で約98.200m、6A'グリッド付近で約98.000mを測る。調査区域西側三角部分の南西辺付近以西は一段低くなっているが、小段丘崖部分が水田造成に伴う削平および盛り土によって若干改変されたものと思われる。この部分以外に大きな傾斜の変化はなく、ほぼ平坦である。そのため堆積土が大きく異なる場所はない。



第5図 基本土層柱状図

- I. 10YR 4/4 褐色シルト 粘性中・しまり弱。植物根痕顕著。
- II. 10YR 4/2 灰黄褐色粘土 水田の床土。グライ化している。粘性強・しまり強。
7.5YR 3/4 暗褐色酸化鉄がモヤ状に入る。植物根痕顕著。
- III. 10YR 3.5/4 暗褐～褐色シルト 粘性中・しまり強。植物根痕顕著。
- IV. 10YR 4/4 暗褐色シルト 粘性中・しまり強。植物根痕顕著。
- V. 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中・しまり強。酸化鉄がモヤ状に入る。植物根痕顕著。
- VI. 10YR 4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性強・しまり強。炭化物粒 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 1%混入。
酸化鉄がモヤ状に入る。植物根痕顕著。
- VII. 2.5Y 5/3 黄褐色粘土 粘性強・しまり強。酸化鉄がモヤ状に入る。下位に5YR 5/8明赤褐色および10YR 1.7/1黒色酸化鉄層が約1cm堆積。植物根痕顕著。
- VIII. 7.5YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。植物根痕顕著。
- IX. 10YR 5/6 黄褐色砂 粘性中・しまり中。
- X. 10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。10YR 4/6褐色土粒 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 1%混入。
- XI. 10YR 4/6 褐色砂質シルト 粘性強・しまり中。
- XII. 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性強・しまり中。炭化物粒 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 2%混入。
- XIII. 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性強・しまり中。
- XIV. 2.5YR 5/3 黄褐色粘土 粘性強・しまり強。下位に5YR 5/8明赤褐色酸化鉄層が約5mm堆積。
- XV. 10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性強・しまり強。

今回の調査で遺構の発見された層位は、第三層～第七層で、現在の耕作土直下にあたる。そのため遺構のほとんどが破壊されたとみられ、堅穴住居床上数cmが残存するのみであった。

2. 検出された遺構と遺物

【1】 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

遺構（第6・7図／写真図版3）

[位置・重複関係] 3Eグリッドに位置している。検出面はⅢ層暗褐色土と黄褐色土ブロックの混合土の上面で、耕作土とグライ化した床土を除去するとすぐ、礫や土器片を多数含む暗褐色土の分布範囲として確認した。検出した時点ですでに遺構の大部分が削平を受け、消失していた。

[規模・平面形] 東辺-310cm、西辺-410cm、南辺505cmのほぼ隅丸方形を呈する。北側は調査区域外にかけ、東・西辺の規模は残存値である。

[覆土] 残存部の覆土は、褐色～暗褐色シルトを主体とした堆積土で構成され、全体に炭化物ブロック、焼土ブロックを含む。床面直上に炭化材、移地性の焼土が多量に分布する。

[壁] 壁高の残存値は4～12cm前後である。

[床面] 多量の炭化材と焼土が散在することから、焼失住居であったと思われる。焼土の多くは床面で検出される炭化材の上面に形成されている。また、焼土と炭化物の分布範囲は住居の縁辺部に多く、中央部では希薄である。床面を覆った焼土の下位に、火熱を受けない灰白色の植物繊維が貼りつくように残存する箇所が認められる。床自体はほぼ平坦でしまる。

[カマド] 攪乱を受けており、残存状態は不良である。カマド相当部周辺には多数の礫、土器片、焼土が散乱しており、燃焼部の一部のみが残存する。カマドの作られる位置は、住居跡北側が調査区域外にかけ詳細は不明であるが、燃焼部の状況から東壁に位置するものと思われる。燃焼部には径100×138・厚さ16cmの範囲で焼土が形成されている。煙道および煙出し部は削平により残存しない。

[柱穴・ピット] 合わせて3基の柱穴を検出した。径20～30・深さ30～45cm前後で、平面形は円形を呈する。覆土は炭化物粒・焼土粒が混入する褐色～黒褐色土主体で構成される。これらは配置より、住居内の支柱穴を構成するものと考えられる。

[重複?] 本住居跡南東側で土器片が比較的まとまって出土し、その周辺から炭化物をごく僅かに含む淡い暗褐色の範囲が認められた。住居跡が重複している可能性を想定し、精査を行ったが、範囲内にカマドが認められず、色調や混入物による覆土の識別も困難であった。ここでは一応の範囲のみを示した。

遺物（第8～11図／写真図版7・8）

あわせて34点の遺物が出土した。カマド～カマド周辺から多く出土している。カマドからは土師器の坏片が4点、高台付坏片が1点、小形甕片が3点、甕片が4点、須恵器の坏片が1点、大甕片が2点出土した。また、床面からは土師器の坏片が4点、甕片が1点出土した。PP1からは土師器の坏片1点と小形甕片1点出土した。

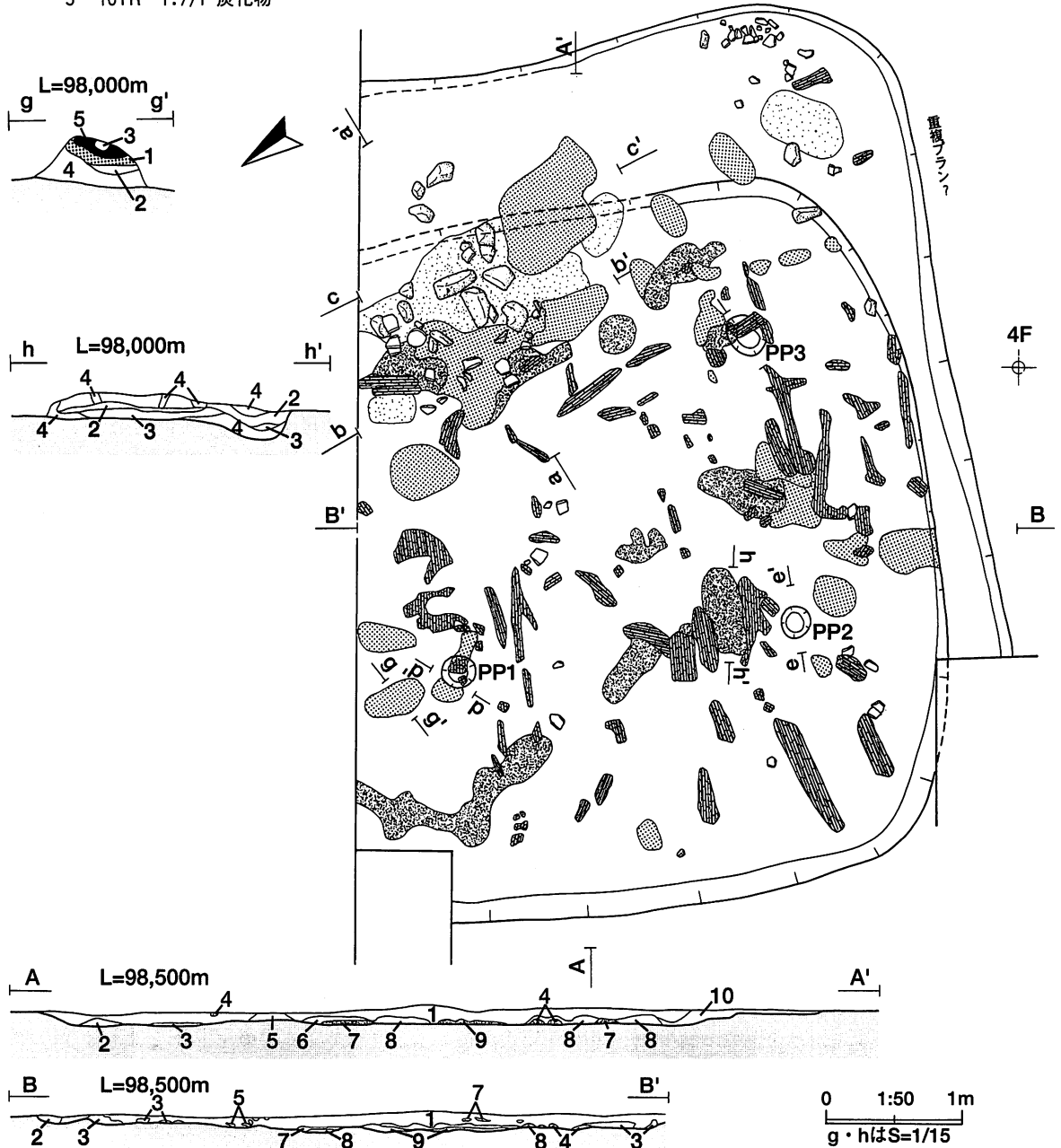
1号竪穴住居跡柱穴観察表

(cm)

No.	PP1	PP2	PP3
規模	23×25	22×24	26×32
深さ	47	42	29

1号住床面炭化物・焼土 (g-g'・h-h')

- 1 5YR 3/3 暗赤褐色シルト 極細粒の砂多量に含む 粘性中・しまり強
- 2 10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト にぶい黄橙と黒褐色の混合 被熱しない植物繊維多量
- 3 5YR 2/2 黒褐色土 極細粒の砂多量に含む 粘性中・しまり強
- 4 10YR 4/4 褐色シルト 極細粒の砂多量に含む 粘性中・しまり強
- 5 10YR 1.7/1 炭化物



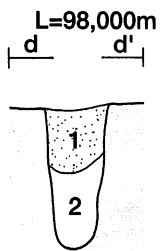
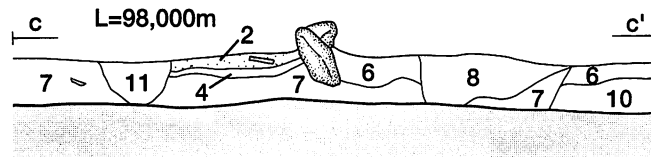
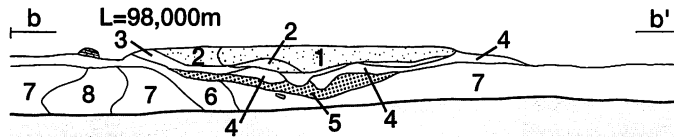
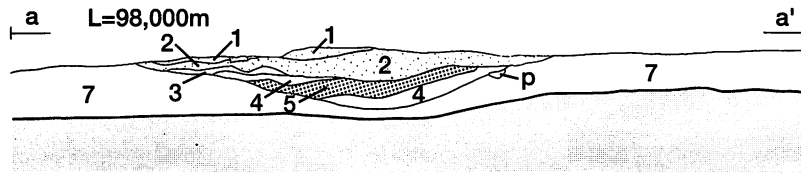
1号住 断面 (A-A')

- 1 10YR 4/6 褐色シルト 粘性弱・しまり中
- 2 10YR 4/4 褐色シルト 焼土粒含む 粘性弱・しまり中
- 3 10YR 3/4 暗褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 4 10YR 1.7/1 炭化物
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 焼土粒含む 粘性弱・しまり中
- 6 10YR 4/4 褐色シルト 焼土粒含む 粘性弱・しまり中
- 7 10YR 3/3 暗褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 8 5YR 4/6 赤褐色シルト 焼土含む 粘性弱・しまり中
- 9 10YR 4/6 褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 10 10YR 3/4 暗褐色シルト 焼土混じり 粘性弱・しまり中

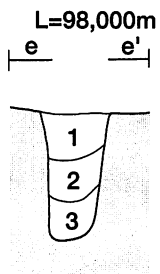
1号住 断面 (B-B')

- 1 10YR 4/6 褐色シルト 粘性弱・しまり中
- 2 5YR 4/8 赤褐色焼土 粘性弱・しまり中
- 3 5YR 3/6 暗褐色土 焼土含む 粘性弱・しまり中
- 4 10YR 4/4 褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 6 10YR 1.7/1 炭化物
- 7 7.5YR 4/6 褐色シルト 炭化物含む 粘性弱・しまり中
- 8 10YR 4/6 褐色シルト 焼土含む 粘性弱・しまり中
- 9 7.5YR 4/6 褐色シルト 粘性弱・しまり中

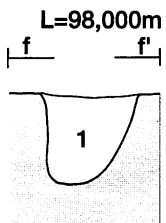
第6図 1号竪穴住居跡①



PP1



PP2



PP3

1号住 カマド断面 (a-a'・b-b'・c-c')

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト主体 橙焼土を粒状に含む
- 2 5YR 4/4 にぶい赤褐色 焼土粒少量含む 粘性なし・しまり強
- 3 10YR 3/4 暗褐色シルト 炭化材60%混入 粘性中・しまり中
- 4 10YR 3/4 暗褐色シルト 焼土粒10%含む 粘性強・しまり中
- 5 5YR 4/8 赤褐色焼土 植物根によるカクランが入る
- 6 10YR 3/4 暗褐色シルト 焼土粒・炭化物粒含む 粘性強・しまり中
- 7 10YR 3/4 暗褐色シルト 焼土粒・炭化物粒微量 粘性弱・しまり強
- 8 10YR 3/3 暗褐色シルト 焼土粒・炭化物粒少量 粘性弱・しまり強
- 9 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- 10 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱・しまり強
- 11 10YR 4/4 褐色シルト 粘性弱・しまり弱 (攪乱)

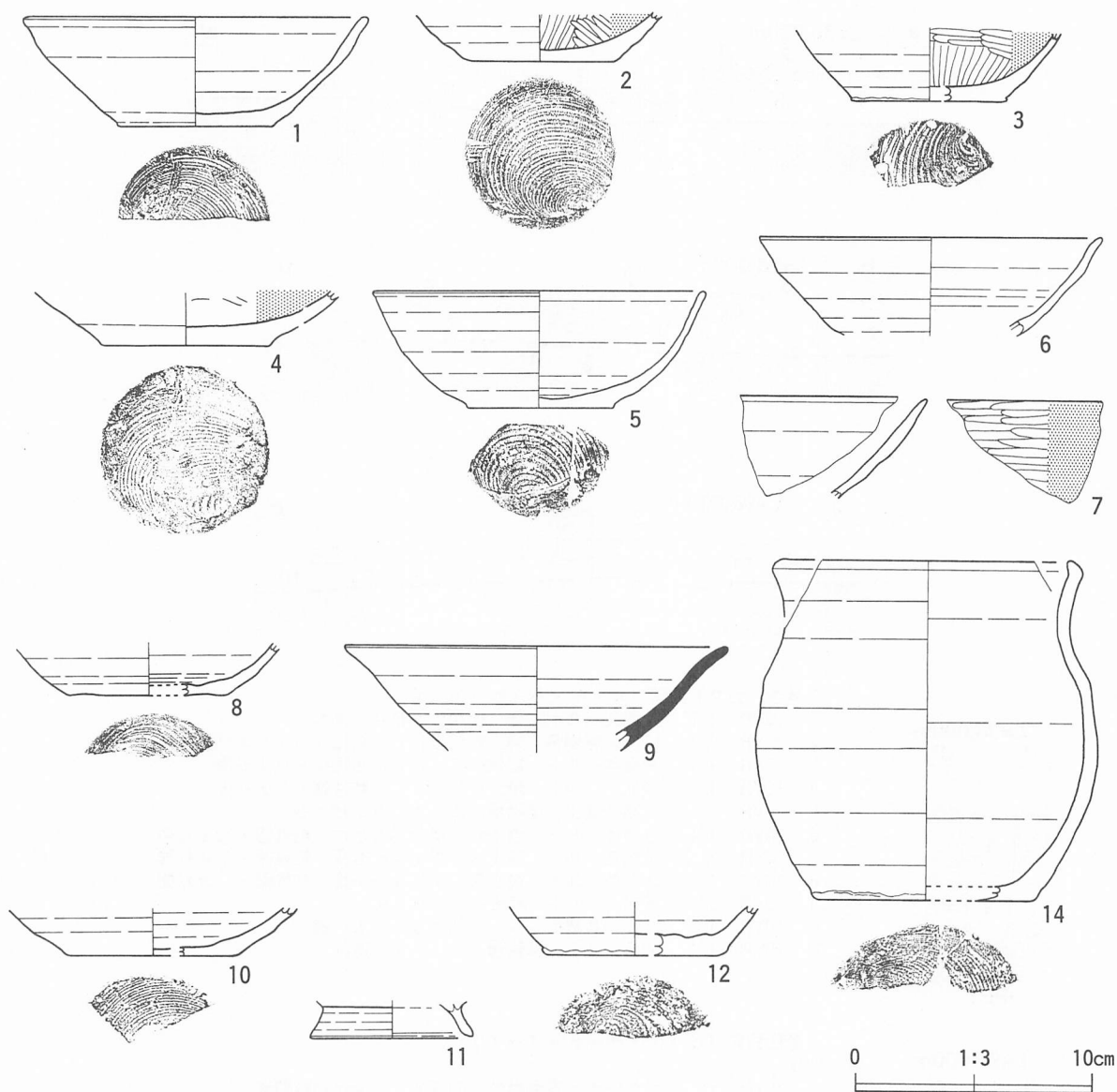
1号住柱穴 (d-d'・e-e'・f-f')

- PP1
- 1 10YR 3/3 暗褐色土と赤褐色焼土の混合土 炭化物粒顕著
 - 2 7.5YR 4/3 褐色シルト 炭化物粒少量含む 粘性強・しまり弱
- PP2
- 1 7.5YR 4/4 褐色シルト 炭化物少量含む 粘性中・しまり弱
 - 2 10YR 3/3 暗褐色シルト 炭化物粒少量 粘性中・しまり弱
 - 3 10YR 3/4 暗褐色シルト 炭化物極少量 砂多く含む 粘性中・しまり中

- PP3
- 1 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性中・しまり強

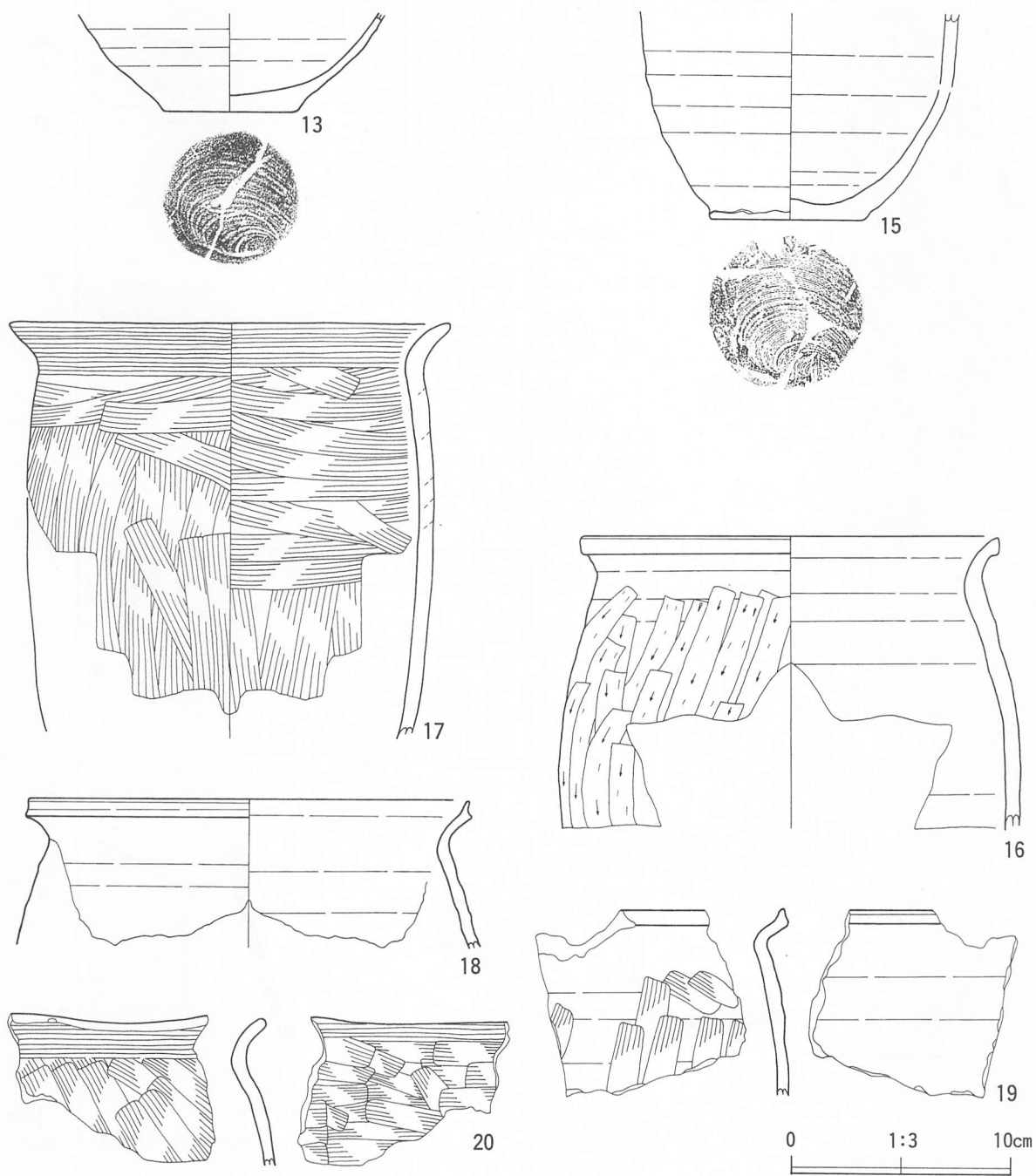
0 1:25 50cm

第7図 1号竪穴住居跡②



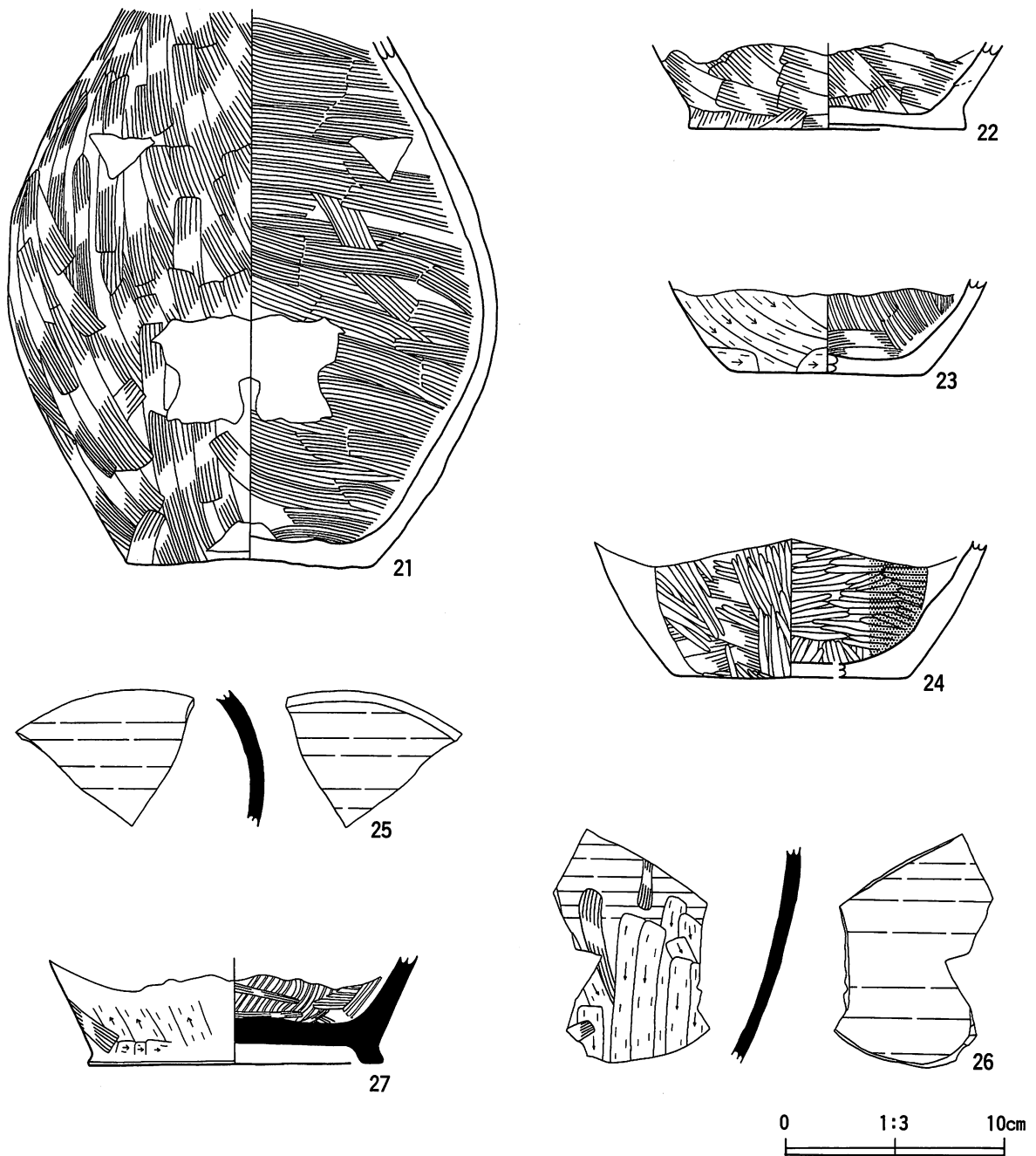
No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
1	1住カマド構成	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.4)	(6.6)	4.7	
2	1住カマド東側床面	土師器	坏	Ia	ロクロナデ	ミガキ	—	5.4	-2.2	内面黒色処理
3	1住カマド	土師器	坏	Ia	ロクロナデ	ミガキ	—	(6.4)	-3.0	内面黒色処理
4	1住床面	土師器	坏	Ia	ロクロナデ	ミガキ?	—	7.2	-2.2	
5	1住カマド構成	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.0)	(6.2)	4.9	
6	1住カマド	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.4)	—	-3.7	
7	1住PP1覆土	土師器	坏	Ia	ロクロナデ	ミガキ	—	—	-4.3	
8	1住床面	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(6.6)	-2.2	
9	1住カマド	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(16.2)	—	-4.5	
10	1住床面	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.0)	-2.0	
11	1住カマド構成	土師器	高台付坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(6.8)	—	-2.0	
12	1住PP1覆土	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.0)	-2.1	

第8図 1号竪穴住居跡出土遺物①



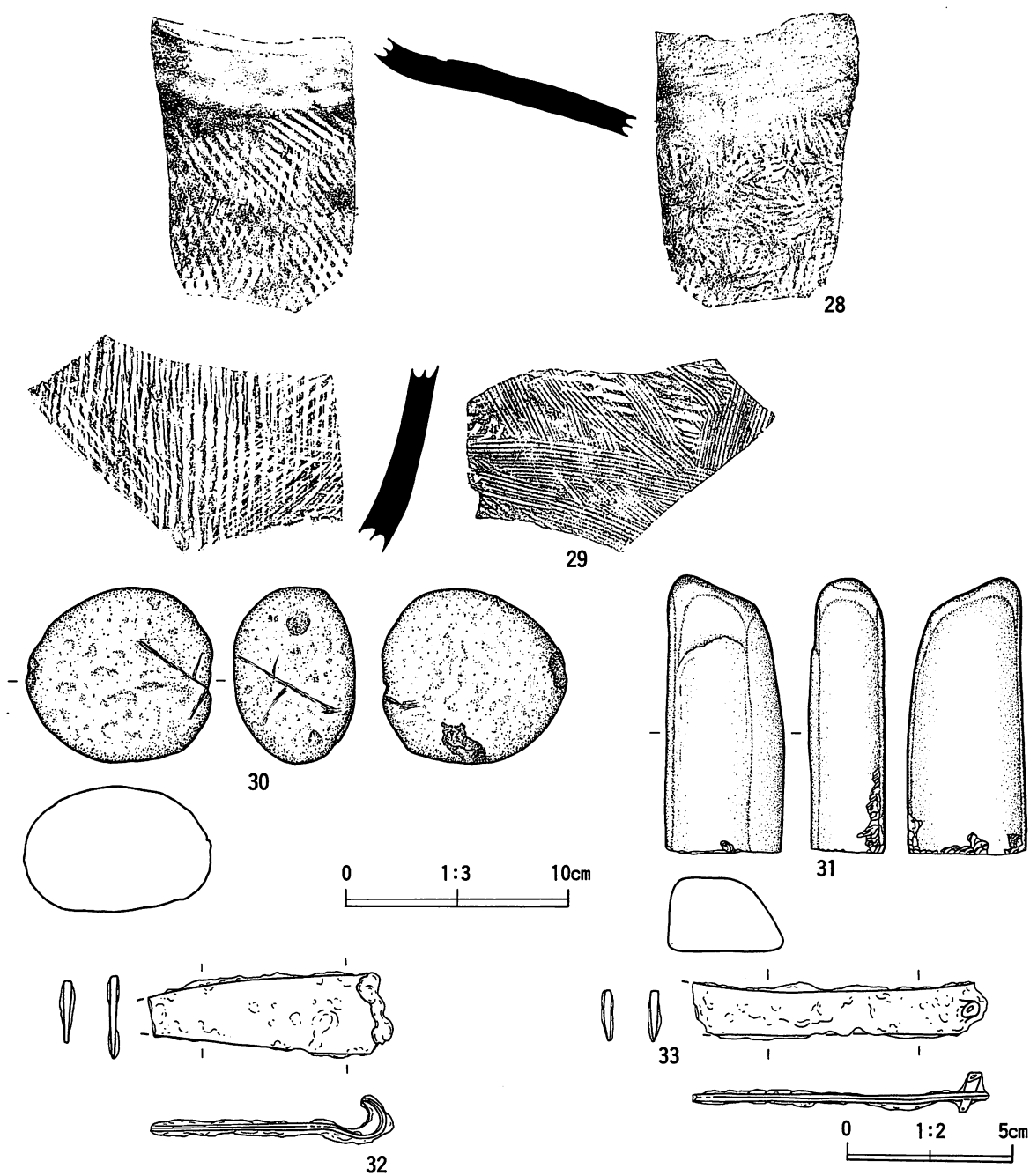
No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
13	1住カマド	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	—	6.2	— 4.6	
14	1住カマド構成	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	(13.2)	(9.4)	14.4	
15	1住カマド	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	—	7.0	— 9.4	
16	1住カマド	土師器	甕	B	ロクロナデ+ケズリ	ロクロナデ	(19.0)	—	—13.4	
17	1住カマド構成	土師器	甕	A	ナデ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	(20.0)	—	—20.0	
18	1住カマド	土師器	甕	B	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.0)	—	— 6.7	
19	1住カマド	土師器	甕	B	ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ	—	—	— 8.6	
20	1住床面	土師器	甕	A	ナデ+ヨコナデ	ヨコナデ+ナデ	—	—	— 6.7	

第9図 1号竪穴住居跡出土遺物②



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
21	1住カマド隔床	土師器	甕	A	ナデ	ハケメ	—	11.2	—25.3	
22	1住カマド構成	土師器	甕	A	ナデ	ナデ	—	12.6	—3.8	
23	1住カマド・6号住覆土	土師器	甕	A	ケズリ	ハケメ	—	(9.0)	—4.3	
24	1住覆土	須恵器	壺		ナデ+ミガキ	ミガキ	—	(10.6)	—6.2	内面黒色処理
25	1住覆土	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—5.2	
26	1住ピット覆土	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ+ナデ・ケズリ	ロクロナデ	—	—	—10.6	
27	1住カマド	須恵器	長頸瓶		ケズリ+ナデ	ハケメ	—	(13.4)	—4.8	

第10図 1号竪穴住居跡出土遺物③



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
28	1住カマド	須恵器	大甕		タタキメ	アテグ				
29	1住カマド	須恵器	大甕		タタキメ	アテグ+ハケメ				

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
30	1住カマド床面	磨石	安山岩質溶岩	奥羽山脈 第四紀火山	完形	7.9	8.2	5.4	306.41	一側縁に筋状の擦痕有
31	1住カマド床面	敲石	砂岩	奥羽山脈	一端部1/2 程度欠損	12.5	5.2	3.3	355.79	一側縁に敲打痕顕著

第11図 1号竪穴住居跡出土遺物④

2号竪穴住居跡

遺構（第12・13図／写真図版4）

[位置・重複関係] 3 I グリッドに位置する。検出面はⅢ層暗褐色土の上面で、暗褐色土・炭化物・焼土ブロックの分布する範囲として検出した。北東側で3号竪穴住居跡と重複しており、これを切る。なお、水田造成時に南西壁付近は完全に削平されており、他の部分も大半が破壊され床上数cmを残すのみである。南側が調査区域外にかかっているが、この部分については未調査であるため不明である。

[規模・平面形] 東辺で370cm、西辺で-205cm、南辺で-170cm、北辺で360cmのほぼ隅丸方形を呈するものと推測される。南西部が調査区域外にかかっているため、西辺と南辺の値は残存値である。

[覆土] 焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色砂質シルトが主体である。数cmしか残っておらず、これより上位は削平されていたため不明である。

[壁] ほとんど残存しておらず、計測できた部分でも5～8cmを測るのみである。

[床面] 炭化材や炭化物混入範囲が所々に認められることから、焼失住居であったと思われる。床面はほぼ平坦であるが、植物根痕などによる攪乱が多く小さな凹凸を多数認める。床面自体は硬くしまっている。3～5層は暗褐色シルトと褐色シルトの混合土で、貼り床と考えられる。

[カマド] 北東隅付近に設置されていたようであるが、削平・攪乱を受けており残存状態が悪く、煙道部の方向が不明であるため、北壁右側にあったのか、東壁左側にあったのか、特定することは難しい。残存していたのは燃焼部と思われる60×32cmの焼土の広がり、および不整形を呈するくぼみのみである。このくぼみは焼土の西側に存在し、大きく二つに分けられる。すなわち、南西側に存在する表面形約24×35cm・深さ5cmの狭く浅いくぼみと、北東側に存在する表面形約44×60・深さ10cmの広く深いくぼみの二つである。後者は焼土北端から北方向へ向かって延びるような形状を呈しており、断面は碗状を呈する。煙道の一部とも考えられるが、焼土北端と北壁との距離が約80cmと離れているためこの可能性も微妙である。焼土の位置から考えれば東壁左側にあった可能性が高い。

[柱穴・ピット] 南側からピット4基を検出した。位置、規模ともに規則性がみられない。柱穴と考えられるものはPP3のみである。

遺物（第14・15図／写真図版9）

カマド～覆土にかけて19点の遺物が出土している。カマドからは土師器の小形甕片2点と甕片4点、須恵器の長頸瓶片1点と大甕片1点が出土した。床面からは土師器の小形甕片が1点出土している。覆土からは土師器の坏片1点、甕片が5点、須恵器の坏片が1点、甕片が1点出土した。また、柱穴ピットから土師器の甕片2点が出土した。

3号竪穴住居跡

遺構（第12・13図／写真図版4）

[位置・重複関係] 3 I グリッドに位置する。検出面はⅢ層の上面で、2号竪穴住居跡の西～東側を囲むように広がる暗褐色土の範囲として確認した。南西側で2号竪穴住居跡と重複し、これによって切られている。なお、他の住居跡と同様に大半が削平によって破壊されており、残存状態は非常に悪い。南西側が調査区域外にかかっており、この部分については未調査である。

[規模・平面形] 東辺380cm、西辺100cm、南辺120cm、北辺386cmの、ほぼ隅丸方形を呈するものと推測される。南西側のほとんどを2号竪穴住居跡と重複しており、西辺・南辺の値は残存値である。

[覆土] 焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色砂質シルトを確認したのみである。これより上位は削平されており不明である。

[壁] ほとんど残存しておらず、計測できた部分でも3～10cmを測るのみである。

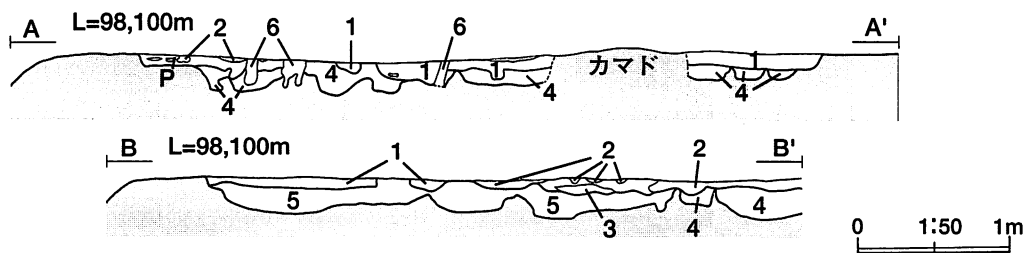
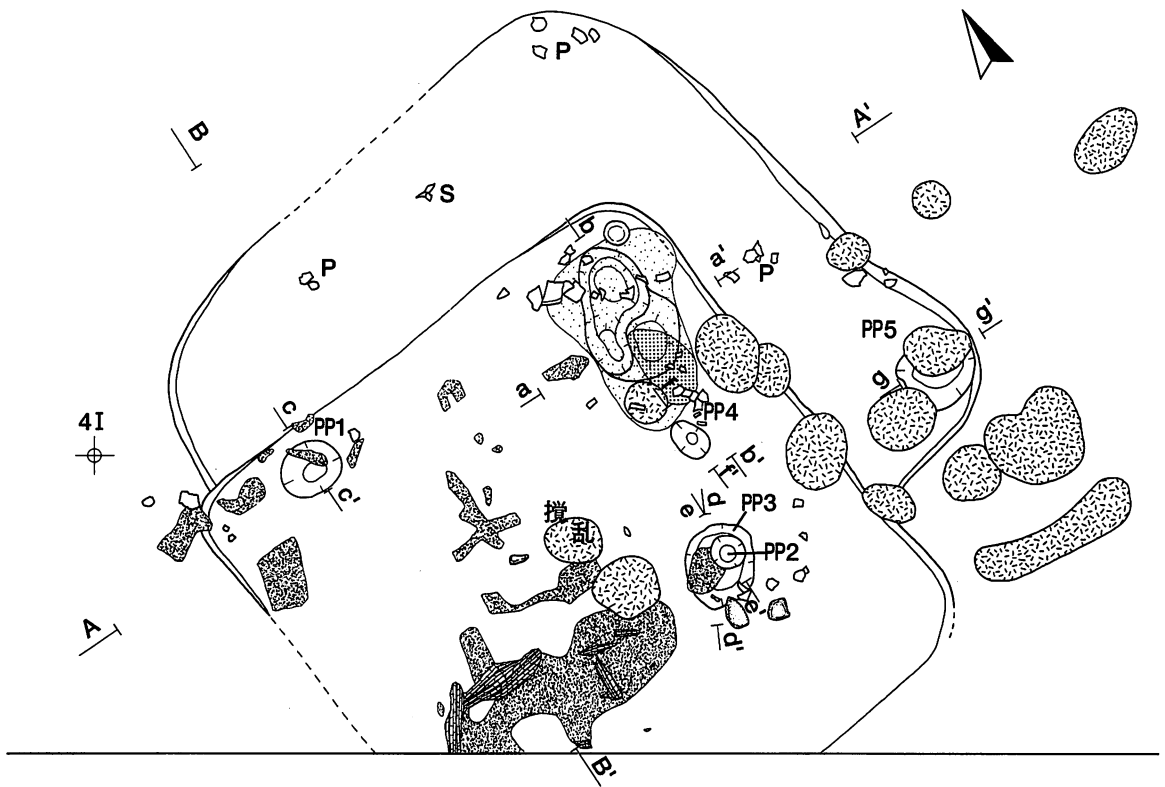
[床面] 大半が2号竪穴住居跡と重複しており、床面のレベルもほぼ同一であることから不明な部分が多い。残存部はおおむね平坦で硬くしまっており、暗褐色シルトと褐色シルトの混合土によって貼り床が形成されている。貼り床構築土が2号竪穴住居跡のものとほぼ同質であることから、2号では本住居跡の床面をそのまま使用していた可能性も考えられる。

[カマド] カマドの痕跡は全く残っておらず、設置場所を明確にすることは不可能であった。ただし、直接的な資料ではないが、東壁右側で検出されたピットから多量の焼土と土師器破片が出土したことから、カマドが東壁右側もしくは南壁左側に設置されていた可能性がある。

[柱穴・ピット] 東壁の右側から1基を検出した。現代の攪乱により半分程度破壊されているが、残存部からは焼土と土師器破片が多量に出土している。焼土は移地性である。

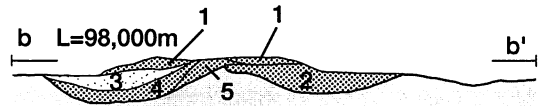
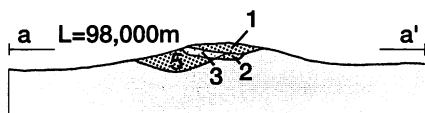
遺物（第16図／写真図版10）

床面から覆土にかけて10点の遺物が出土している。床面からは土師器の小形甕片が1点と甕片が1点、須恵器の坏片が4点、石器が2点出土した。覆土からは甕片が1点出土している。



2・3号住 断面 (A-A'・B-B')

- 1 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト 細粒砂多量に含む 焼土・炭化物粒混入 粘性弱・しまり強
- 2 10YR 1.7/1 黒 炭化物層
- 3 10YR 3/4 暗褐色シルトと褐色シルトとの混合土 粘性・しまり共強
- 4 10YR 3/4 暗褐色シルト 褐色シルトブロック含む 粘性・しまり共強
- 5 10YR 3/4 暗褐色シルト 褐色シルトブロック含む 焼土粒1% 粘性・しまり共強
- 6 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性中・しまり弱 植物根跡



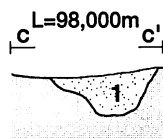
2・3号住 カマド (a-a'・b-b')

- 1 5YR 3/4 暗赤褐色シルト (焼土) 炭化物粒7% 粘性強・しまり中
- 2 5YR 4/6 赤褐色シルト (焼土) 粘性なし・しまり強 攪乱あり
- 3 10YR 4/4 褐色シルト 焼土粒1% 粘性なし・しまり強
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト 焼土粒多量に含む 粘性弱・しまり中
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 焼土・炭化物7% 粘性弱・しまり中

0 1:25 50cm

第12図 2・3号竪穴住居跡①

PP1

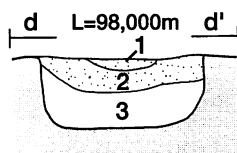


2・3号住 ピット (c-c'・d-d'・e-e'・f-f'・g-g')

PP1

- 1 10YR 4/3 褐色シルト 粘性弱・しまり中
明黄褐色土粒含む

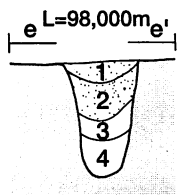
PP2



PP2

- 1 10YR 4/4 褐色シルト 焼土・炭化物粒状に含む 粘性弱・しまり強
2 10YR 4/4 褐色シルト 焼土多量・炭化物少量 粘性弱・しまり強
3 10YR 3/4 暗褐色シルト 1・2より砂質 焼土粒1% 粘性弱・しまり中

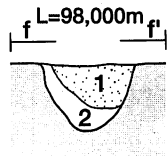
PP3



PP3

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト 焼土・炭化物粒含む 粘性弱・しまり中
2 10YR 3/2 黒褐色シルト 褐色土粒含む 焼土・炭化物粒10%
3 10YR 4/4 褐色粘土 粘性・しまり共強
4 10YR 3/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土粒少量含む 粘性強・しまり中

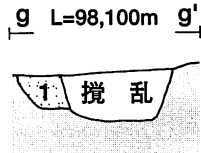
PP4



PP4

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト 焼土粒・炭化物粒少量含む 粘性強・しまり中
2 10YR 4/4 褐色シルト 粘性中・しまり中

PP5

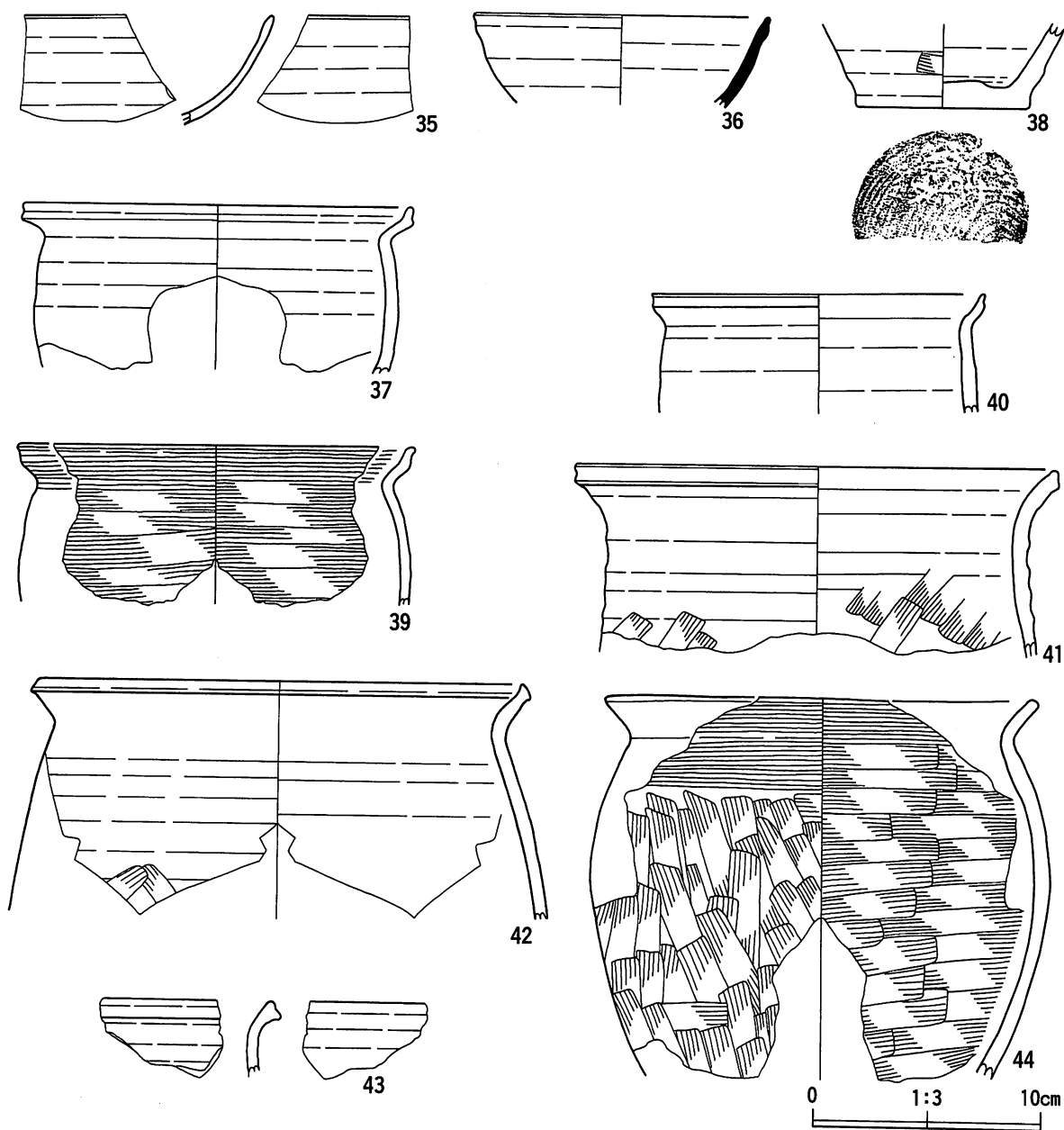


PP5

- 1 5 YR 4/8 赤褐焼土と10YR 4/6褐色シルトの混合土
炭化物粒少量 粘性強・しまり中

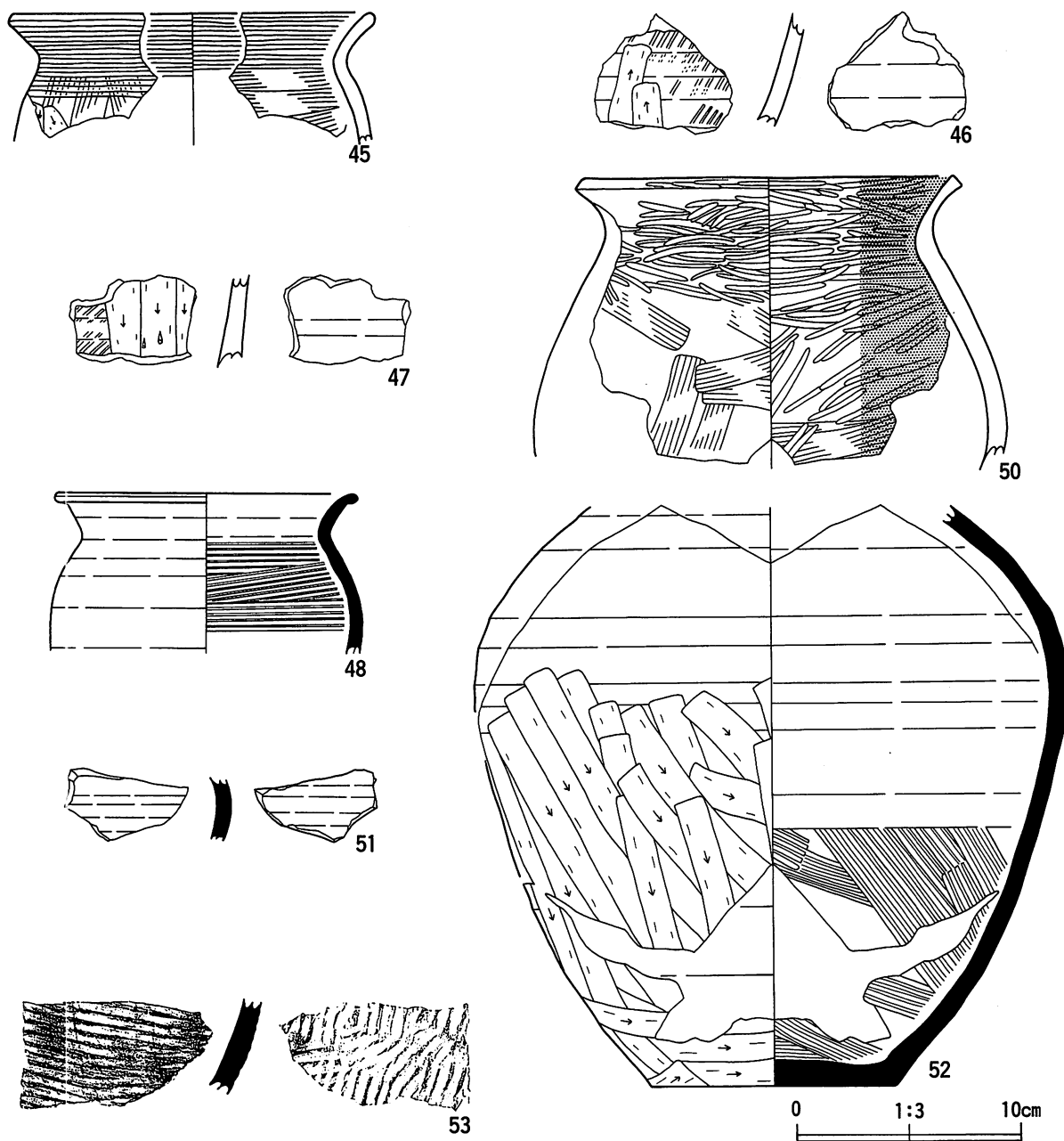
0 1:25 50cm

第13図 2・3号竪穴住居跡②



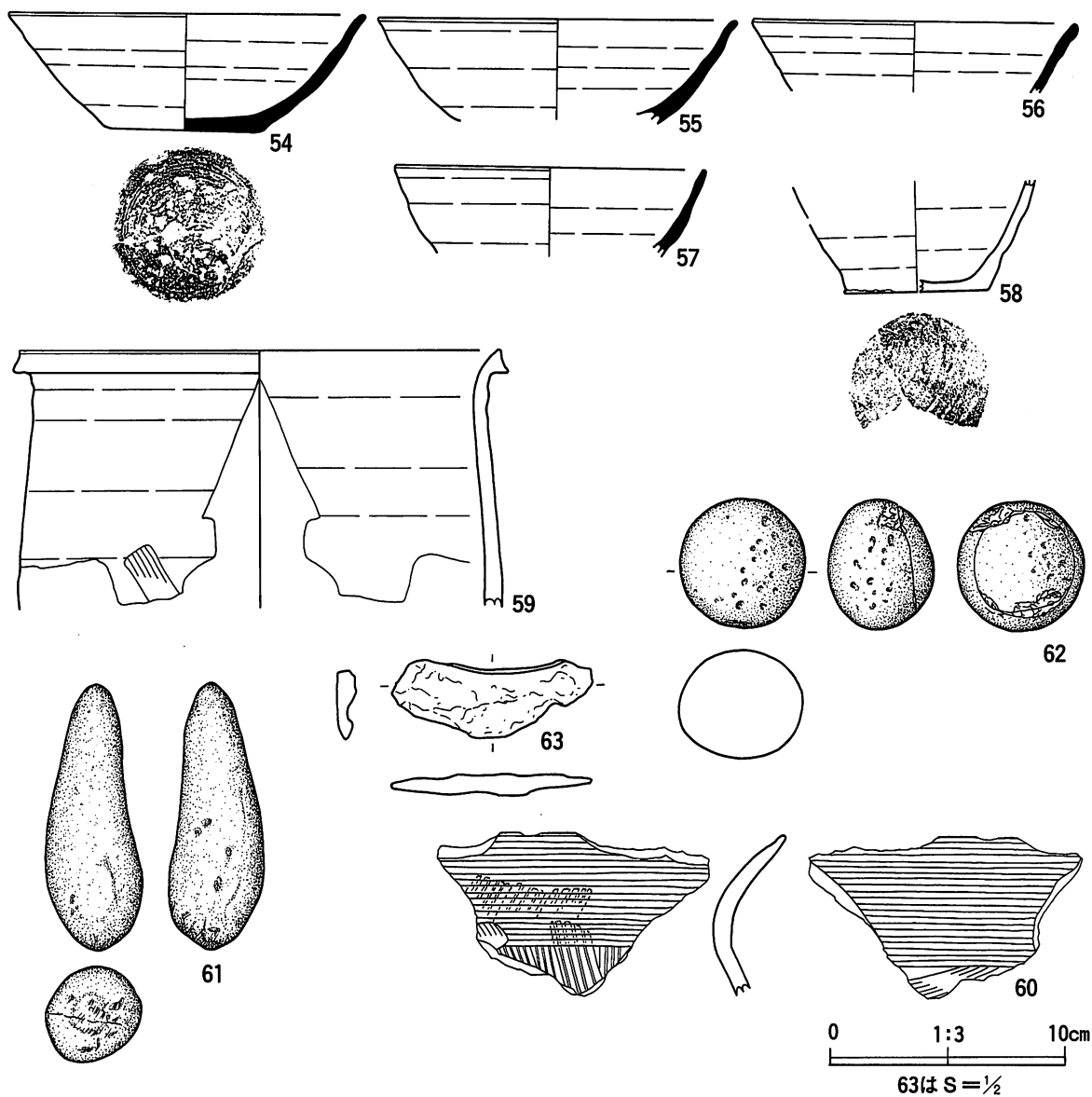
No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
35	2住覆土上部	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	— 4.8	
36	2住覆土上部	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(13.0)	—	— 4.0	
37	2住カマド左側	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	(17.0)	—	— 7.3	
38	2住カマド左付近	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.6)	— 3.7	
39	2住カマド右袖	土師器	甕	A	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+ナデ	(17.4)	—	— 7.0	
40	2住床面	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	(14.6)	—	— 5.2	
41	2住覆土下部	土師器	甕	B	ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ+ナデ	(22.0)	—	— 8.1	
42	2住覆土上部	土師器	甕	B	ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ	(21.2)	—	— 10.2	
43	2住カマド左側	土師器	甕	B	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	— 3.4	
44	2住カマド右袖	土師器	甕	A	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+ナデ	19.0	—	— 16.7	

第14図 2号竪穴住居出土遺物①



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
45	2住床面カマド左袖	土師器	甕	A	ナデ+ケズリ+ヨコナデ	ヨコナデ+ナデ	(16.2)	—	— 5.9	
46	2住覆土上部	土師器	甕	C	タタキメ+ロクロナデ+ケズリ	ロクロナデ	—	—	— 5.0	
47	2住覆土上部	土師器	甕	C	タタキメ+ロクロナデ+ケズリ	ロクロナデ	—	—	— 4.0	
48	2住覆土上部	須恵器	甕		ロクロナデ	ロクロナデ+カキメ	(13.4)	—	— 7.0	
49	2住P P 8 覆土	土師器	甕	A	ナデ	ナデ				写真のみ
50	2住P P 3 覆土	土師器	甕	A	ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	(17.2)	—	— 13.0	
51	2住覆土上部	須恵器	甕?		ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	— 3.1	
52	2住床面カマド左側	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ+ケズリ	ハケメ+ロクロナデ	-26.3	10.8	-25.9	
53	2住床~カマド左側	須恵器	大甕		タタキメ	アテグ				平行文と平行文

第15図 2号竪穴住居跡出土遺物②



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
54	3住床直	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	15.2	6.6	5.0	
55	3住床面	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(15.5)	—	— 4.3	
56	3住床面	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8)	—	— 3.8	
57	3住床面	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(12.2)	—	— 3.7	
58	3住床面	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	—	6.0	— 5.7	
59	3住床面	土師器	甕	B	ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ	(20.4)	—	— 10.8	
60	3住覆土	土師器	甕	A	ハケメ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	—	—	— 6.8	

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
61	3住床面	敲磨石	砂岩	奥羽山脈	完形	11.2	4.1	4.1	231.46	幅広端部に擦痕顕著
62	3住床面	敲磨石	凝灰岩	奥羽山脈	完形	5.5	5.2	4.5	125.06	球形、全体に敲打痕有

第16図 3号竪穴住居跡出土遺物

4号竪穴住居跡

遺構 (第17図/写真図版5)

[位置・重複関係] 4 Mグリッドに位置している。検出面はⅢ層暗褐色土の上面で、当初、炭化物・焼土ブロックの分布する範囲として確認した。北西側で5号竪穴住居跡と重複し、これを切る。南半部は調査区域外にかかる。

[規模・平面形] 北西辺(330)cm、北東辺(270)cmのほぼ隅丸方形を呈する。平面形を色調、混入物から把握するのは非常に困難で、掘り上げ終了後もはっきりとした壁を掘むことができなかった。そのため規模は推定値である。

[覆土] 2層に大別される。上位は炭化材を含む暗褐色シルト、下位は褐色シルト主体で構成される。

[壁] 黄褐色シルトを掘り込んで構築している。壁高の残存値は9～25cmである。

[床面] 炭化材が比較的多量に認められた為、焼失住居であったと思われる。炭化材除去後にやや凹凸が認められた。床面自体はしまっている。貼り床は確認できなかった。

[カマド] 全体的に削平を受け、残存状態は悪い。現地性の焼土が北西壁に存在するのみで、煙道部～煙出し部は残存しない。南側が調査区域外にかかっていることから、詳細は明らかではない。

[柱穴・ピット] なし。

遺物 (第18図/写真図版10)

付近から須恵器の坏1点と蓋1点が出土しているが、本住居跡に直接伴うとみられる遺物はない。

5号竪穴住居跡

遺構 (第17図/写真図版5)

[位置・重複関係] 3 Mグリッドに位置している。検出面はⅢ層暗褐色土の上面で、当初、炭化物を比較的多く含む範囲として検出した。南東側で4号竪穴住居跡と重複し、これにより切られる。南側隅が調査区域外にかかる。

[規模・平面形] 北西辺(407)cm、北東辺—340cm、南西辺—350cmのほぼ隅丸方形を呈すると思われる。4号竪穴住居跡同様、色調・混入物から平面形を把握するのは非常に困難で、掘り上げ終了後もはっきりとした壁を掘むことができなかった。このため、北西辺の規模は推定値である。また、南東側が4号竪穴住居跡と重複するため北東辺と南西辺は残存値である。

[覆土] 2層に細分され、褐色土主体で構成される。上位に炭化物粒が僅かに含まれる。

[壁] 黄褐色シルトを掘り込んで構築しており、壁高の残存値は5～19cmを測る。検出時点でほぼ床面だったと考えられ、残存状態は不良であった。

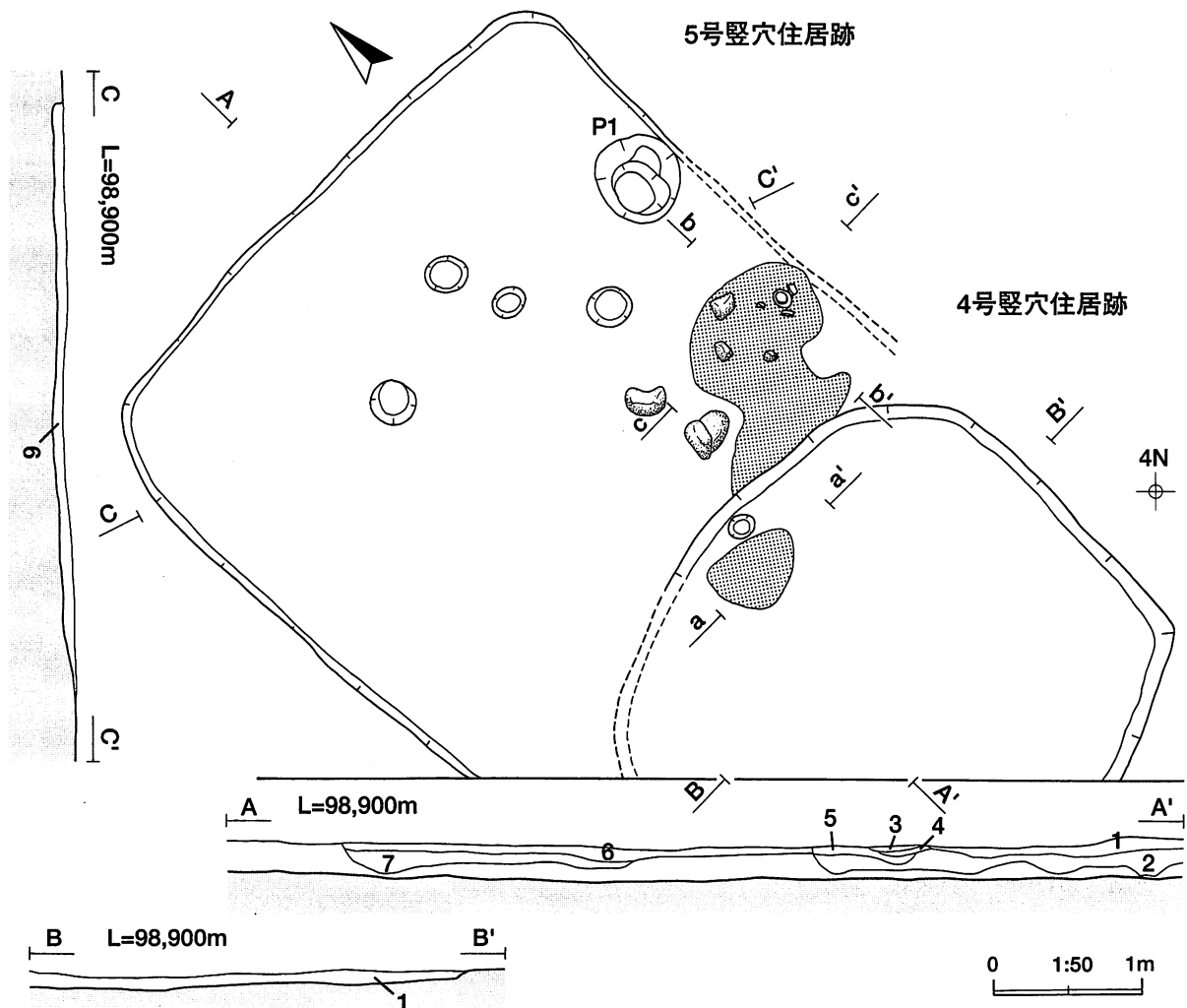
[床面] 中央部はほぼ平坦で、北東側でやや落ち込む形状を呈する。床面自体のしまりは固い。貼り床は確認できなかった。

[カマド] 設置場所を明確にすることはできなかったが、焼土の形成箇所、支脚の設置箇所から推測して、北東壁に位置した可能性が高いと思われる。煙道～煙出し相当部は残存しない。

[柱穴・ピット] 北東壁付近からピット1基を検出した。規模は56×58cm・深さ18cmを測る。

遺物 (第18図/写真図版10・11)

カマド～床面にかけて5点の遺物が出土している。カマドから土師器の小形甕片1点、甕片2点、石器が1点出土した。また、種類不明の土製品1点が住居内ピットから出土している。

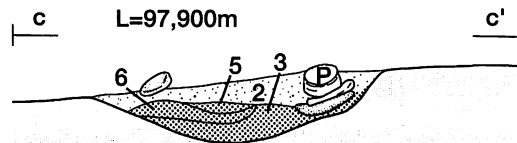
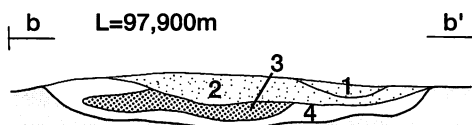
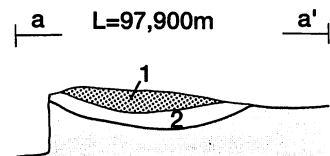


4号住 カマド断面 (a-a')

- 1 5YR 5/8 明赤褐色 明黄褐色焼土粒少量含む
炭化物1% 粘性・しまりに弱
- 2 10YR 4/4 褐色シルト 砂多量 炭化物微量 粘性弱・しまり中

4・5号住 断面(A-A'・B-B'・C-C')

- 1 10YR 3/4 暗褐色シルト 炭化物(材・粒)含む 粘性中・しまり強
- 2 10YR 4/5 褐色シルト 粘性中・しまり強
- 3 10YR 4/6 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む 粘性中・しまり強
- 4 10YR 4/6 褐色シルト 焼土・炭化物多量に含む 粘性中・しまり強
- 5 10YR 3.5/4 暗褐色～褐色シルト 粘性中・しまり強
- 6 10YR 4/4 褐色シルト 炭化物粒・床土ブロック?含む 粘性中・しまり強
- 7 10YR 4/6 褐色シルト 暗褐色土がブロック状に混入 粘性中・しまり強

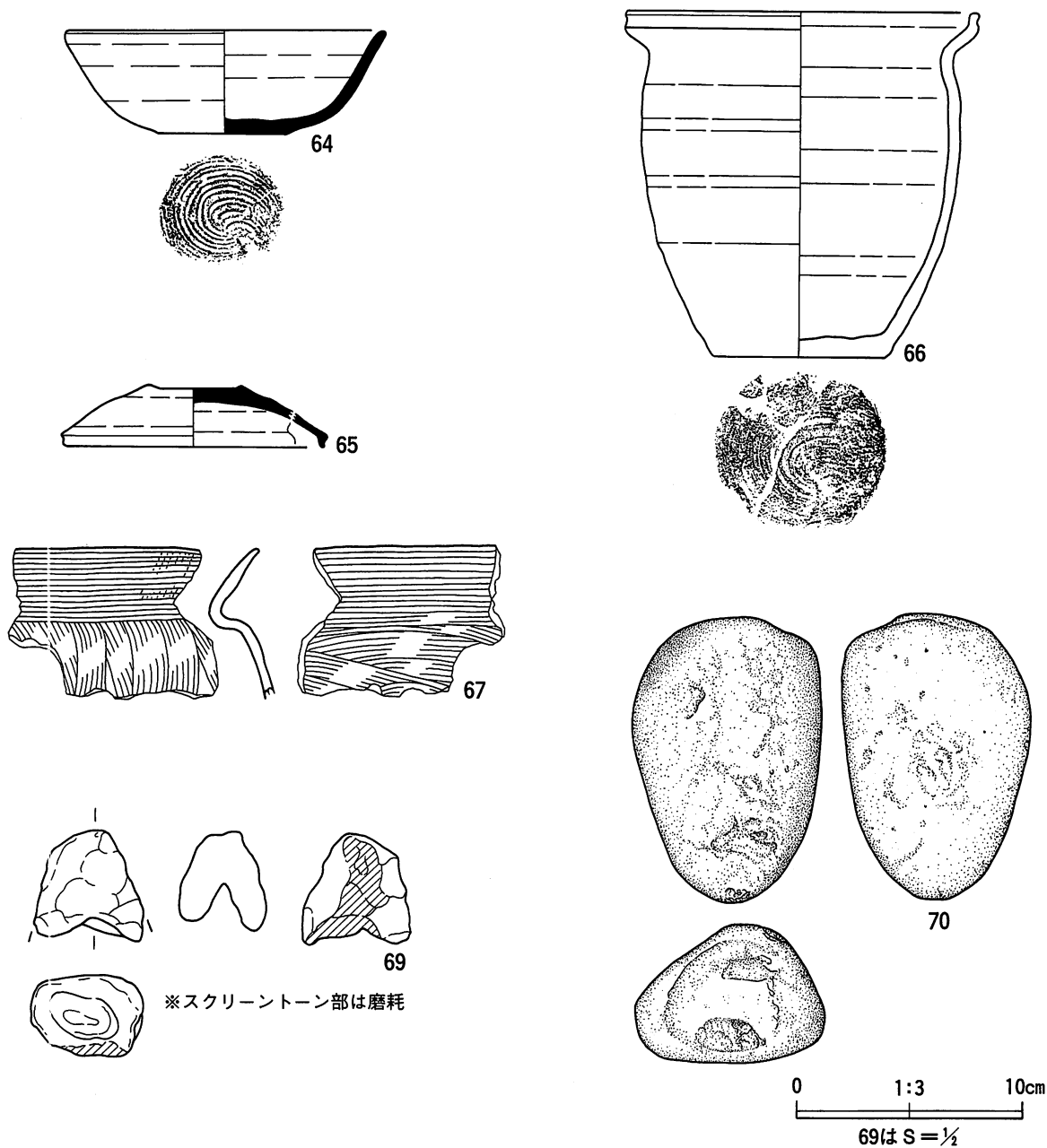


5号住 カマド断面(b-b'・c-c')

- 1 10YR 4/4 褐色シルト 焼土・炭化物1% 粘性弱・しまり強
- 2 10YR 3/4 暗褐色シルト 明赤褐色焼土粒10% 粘性弱・しまり強
- 3 5YR 3/6 暗赤褐色シルト(焼土) 粘性中・しまり強
- 4 10YR 4/4 褐色シルト 粘性中・しまり強
- 5 7.5YR 6/8 橙焼土 粘性なし・しまり強 被熱により硬化
- 6 2.5YR 5/8 明赤褐色焼土 粘性なし・しまり中

0 1:25 50cm

第17図 4・5号竖穴住居跡



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
64	4住付近I層	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	14.2	5.6	4.6	
65	4住付近I層	須恵器	蓋		ロクロナデ	ロクロナデ	11.4	4.2	3.3	
66	5住カマド内	土師器	小形甕		ロクロナデ	ロクロナデ	(15.4)	7.6	15.3	
67	5住カマド一括	土師器	甕	A	ナデ+ヨコナデ	ヨコナデ+ナデ	—	—	— 6.7	
68	5住床面	土師器	甕	B	ロクロナデ	ロクロナデ				写真のみ

No	出土地点	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
69	5住ピット	不明	-3.2	-3.3	0.9		

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
70	5住カマド前床面	敲石	安山岩	奥羽山脈	完形	12.6	8.3	5.6	833.90	被熱により一部変色

第18図 4・5号竪穴住居跡出土遺物

6号竪穴住居跡

遺構（第19図／写真図版11）

[位置・重複関係] 3Dグリッドに位置している。検出面はⅢ層暗褐色土と黄褐色土ブロックの混合土の上面で、当初、礫・土器片を比較的多く含む範囲として検出した。全体的に削平・攪乱を受けている。南西側は特に大きく攪乱を受け、流木や廃棄物等が混入する。

[規模・平面形] 平面形は、削平・攪乱のためほとんど現形を留めておらず、北東隅のみ残存する。北辺100m、東辺180cmで、規模は全て残存値である。

[覆土] 黄褐色シルト主体で構成される。

[壁] 壁高の残存値は2～9cmである。

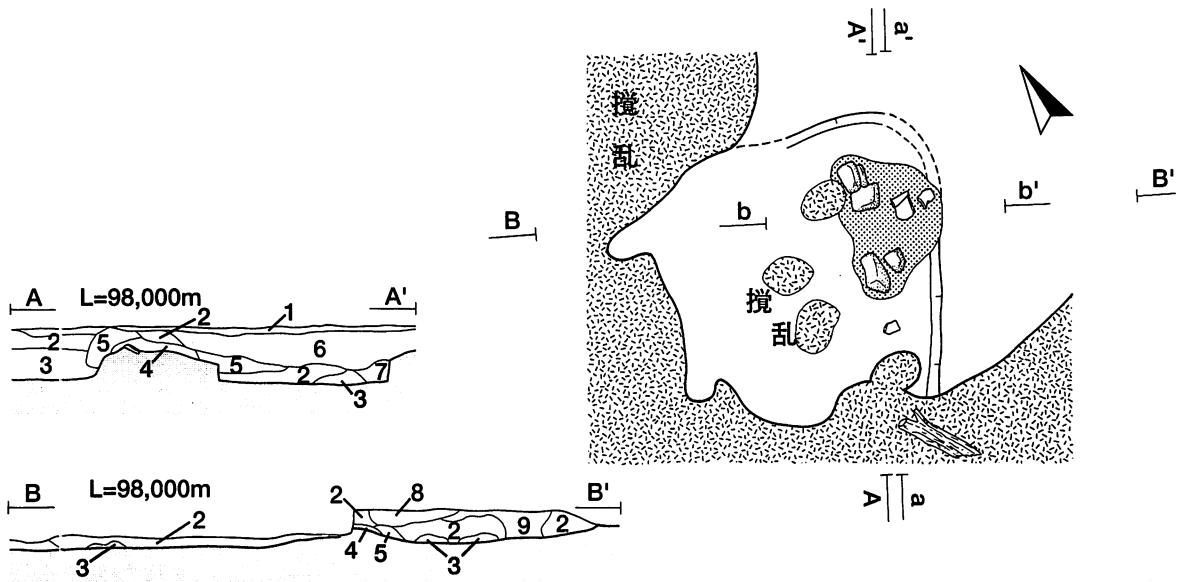
[床面] ほぼ平坦でしまっている。

[カマド] 全体的に削平・攪乱の影響を受け、残存状態は悪い。現地性の焼土が東壁に存在するのみで、煙道部～煙出し部は残存しない。残存部から形状を予測するのは困難であり、詳細は不明である。

[柱穴・ピット] なし。

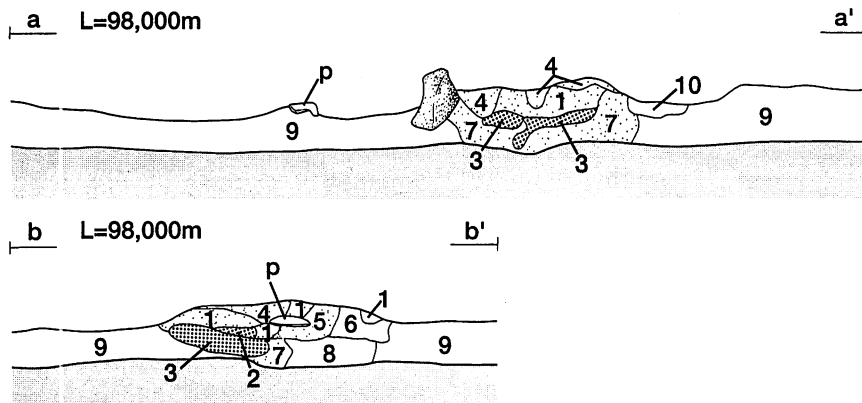
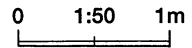
遺物（第20図／写真図版11）

カマド～埋土にかけて5点の遺物が出土した。カマドから土師器の甕片2点が出土している。76はカマドの構築材として使用された礫である。西長岡長谷田遺跡では、他の住居跡においてもカマド構築材として同様の素材が用いられていることから掲載を行った。上位の攪乱からは土師器の甕片1点と須恵器の坏片1点が出土した。



6号住 断面 (A-A'・B-B')

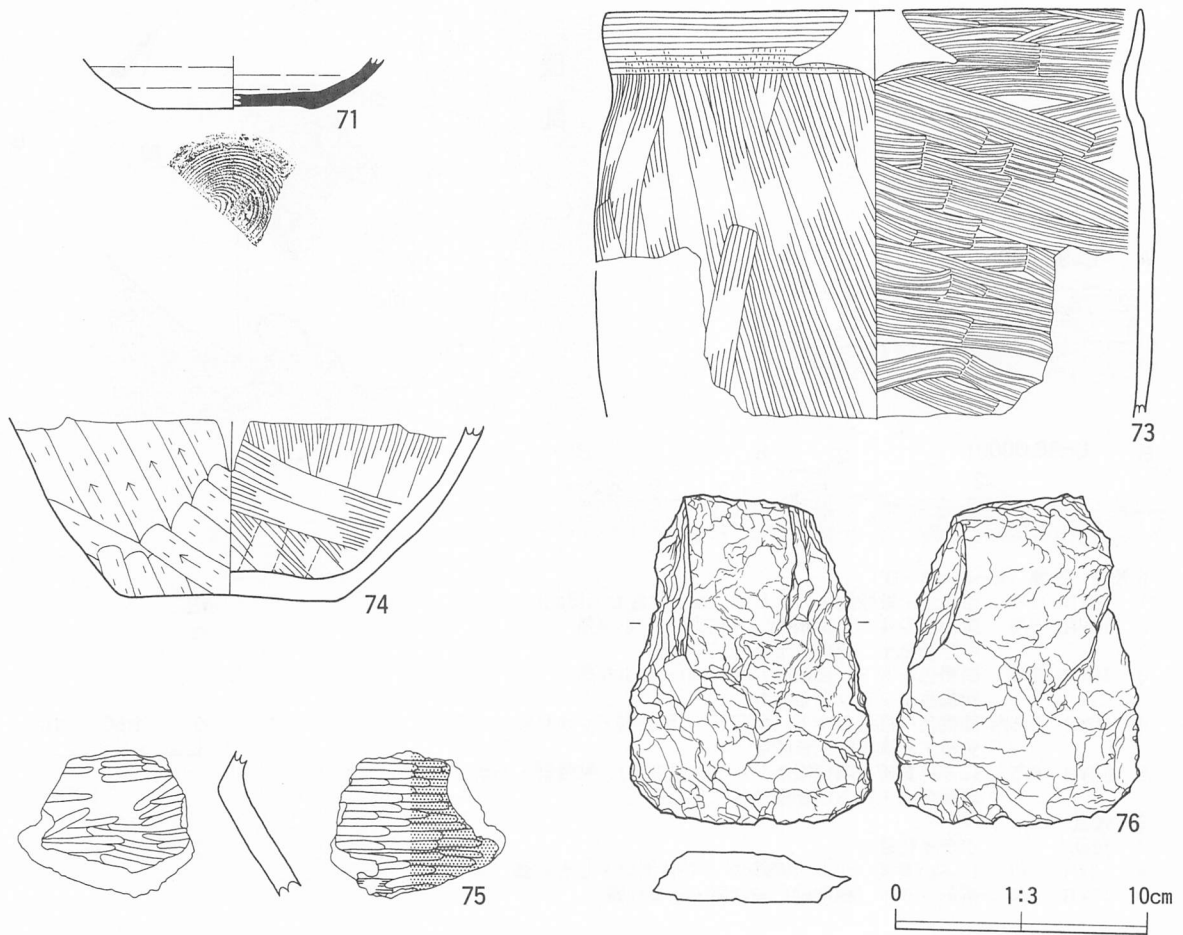
- 1 10YR 4/4 褐色土 粘性弱・しまり中 焼土粒含む (攪乱)
- 2 10YR 5/6 黄褐色シルト (極細砂)、粘性弱・しまり強
明赤褐色土、暗褐色土を粒状に含む
- 3 10YR 3/3 暗褐色シルト (極細砂)、粘性中・しまり強
黄褐色土ブロックを含む
- 4 10YR 3.5/4 暗褐色～褐色シルト (極細砂)、粘性弱・しまり強
黄橙・赤褐色焼土粒微量
- 5 10YR 6/5 にぶい黄橙～明黄褐色シルト (極細砂)、粘性弱・しまり強
赤褐色土・にぶい黄橙粒状に含む
- 6 攪乱
- 7 攪乱 グライ化層
- 8 10YR 4/3 にぶい黄褐シルト (極細砂)、粘性弱い・しまり強
- 9 10YR 4/4 褐色シルト (極細砂) 粘性弱・しまり強



6号住 カマド断面 (a-a'・b-b')

- 1 10YR 4/4 褐色土 粘性弱・しまり中 明～暗赤褐色焼土粒微量
- 2 7.5YR 5/6 明褐色焼土 粘性なし・しまり強 被熱により硬化
- 3 5YR 3/6 暗赤褐色焼土 粘性なし・しまり中
- 4 10YR 4/4 褐色土 粘性弱・しまり中 明～暗赤褐色焼土粒微量
- 5 7.5YR 4/3 褐色と黒褐色土の混合土 粘性中・しまり強
明赤褐色焼土・炭化物含む
- 6 10YR 3/3 暗褐色土 粘性中・しまり強
- 7 10YR 3/4 暗褐色土 粘性強・しまり強 暗赤褐色焼土粒・炭化物微量
- 8 10YR 3/4 暗褐色土と黄褐色土の混合土 粘性強・しまり中 炭化物微量
- 9 10YR 3/3 暗褐色土と黄褐色土の混合土 粘性中・しまり強
- 10 2.5Y 7/4 浅黄色土と褐色土の混合土 粘性中・しまり強

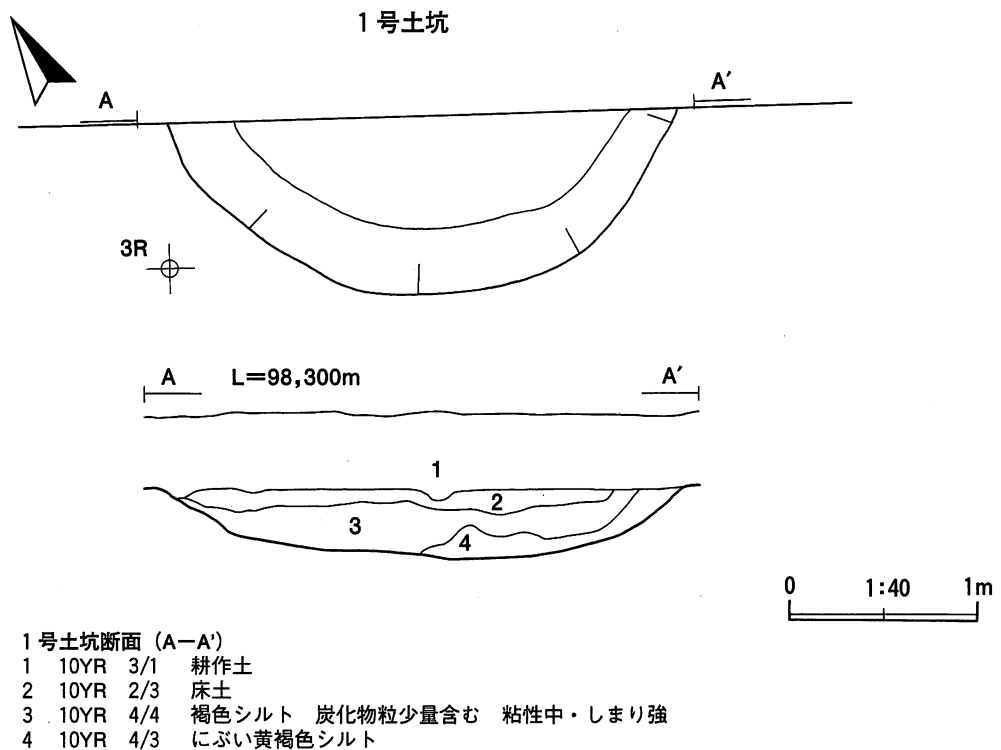
第19図 6号竪穴住居跡



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
71	6住上位攪乱	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	(11.8)	6.6	4.9	
72	6住カマド	土師器	甕	B	ロクロナデ	ロクロナデ				写真のみ
73	6住カマド	土師器	甕	A	ナデ+ヨコナデ	ハケメ	(21.2)	—	—16.1	
74	6住上位攪乱	土師器	甕	A	ケズリ	ナデ	—	8.4	—6.9	
75	6住カマド左奥	土師器	甕	A	ミガキ	ミガキ	—	—	—5.8	

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
76	6住カマド	自然礫	片岩	断層に伴うもの	—	13.1	9.4	1.9	255.86	カマド芯材、被熱により白濁

第20図 6号竪穴住居跡出土遺物



第21図 1号土坑

〔2〕土坑

1号土坑

遺構 (第21図/写真図版6)

[位置・重複関係] 3Rグリッドに位置する。検出面はⅢ層暗褐色土面である。

[規模・平面形] 開口部径96×270cm、底部径60×210cm・深さ37cmを測る。北東半部が調査区域外にかかり、形状など詳細は不明であるが、残存部から推定して円形を基調とするものと思われる。覆土は2層に細分され、炭化物粒を少量含む褐色シルト主体で構成される。

[出土遺物・時期] 遺物が出土しておらず時期など詳細は不明である。埋土の状況が竪穴住居と類似することより、平安時代の遺構である可能性がある。

【3】遺構外出土遺物

遺構外からは、大コンテナ2箱分の遺物が出土した。内訳は土器(縄文～弥生・土師器・須恵器)、石器、土製品である。

(1) 縄文時代：縄文時代晩期後葉(～弥生初頭?)に相当する粗製土器群(第23図77～78)

77は底部から口縁部まで外傾し、口縁部付近でやや内湾する器形を呈するもので、口縁部は二重口縁を呈し、口唇部には工具による刻目を持つ。胴部にはLR縄文が施されている。78は胴部上端に最大径を持ち、口唇部で一旦括れて口縁部に至って短く外反するような器形を呈する。口唇部には工具により刻目が付けられる。該期の土器はこの2点のみであり、詳細は不明であるが、おおむね縄文時代晩期後葉～弥生初頭に位置付けできると思われる。

(2) 弥生時代：弥生時代後期の土器(第23図79～80)

弥生時代後期の土器と考えられるものは79・80の2点である。これらは文様等の特徴からいずれも弥生後期の天王山式期に位置付けられるものと思われ、岩手県内では赤穴式、小田野編年のV期(小田野1999)に相当する土器群であると考えられる。79は甕の体部破片である。胴部には平行する浅い沈線と、それに沿うように縄の一端を巻き付けた原本文様が横位に施文される。また、中央に同一の原体の端部を用いて付けたと思われる回転圧痕が列点状に施文される。80は破片の一端に浅い平行沈線を持つ。体部には縄の一端を巻き付けた原本文様が縦位に施文される。

(3) 土師器・須恵器(第23図81～91)

西長岡長谷田遺跡で見つかった遺構外出土の土師器・須恵器は小コンテナで1箱分である。土師器の坏は5点出土したが、内3点は内面ミガキ+黒色処理の技法で製作されており、81～82は底部縁辺にヘラケズリ再調整が見られる。84～85はロクロ以外の調整を持たない。86は須恵器の坏である。87は土師器の高台付坏である。

分類

遺構内外から大コンテナで4箱弱出土している。このうち出土総数の8割以上を占める土師器と須恵器について整理し、まとめたい。なお、分類は遺構内のものも含めておこなった。

(1) 分類

分類に当たっては土師器・須恵器を主要な識別形式とし、これに器種・調整技法を付加するかたちで行った。器種には坏・高台付坏・甕・小形甕・埴がある。

土師器

今回の調査で出土した土師器のうち、図示したものは50個体である。そのうち坏は15点、高台付坏2点、甕23点、小形甕9点、埴1点である。坏の一部を除くほとんどは破片資料で、全体の器形の特徴などがわかるものは少ない。細分は可能なものについて行い、不可能なものについては各器種の特徴を述べるにとどめた。

[坏] 坏の製作に際してはいずれもロクロが使用されている。坏は底部の切り離し技法によって、回転糸切りで再調整が行われないもの/回転糸切り後手持ちヘラケズリによる再調整が行われるものに大別される。以下では体部内面の調整技法をもとにして更に細分を行った。

I類：底部切り離し技法が回転糸切りで再調整が施されないもの

II類：回転糸切り後手持ちヘラケズリにより再調整が行われるもの

III類：再調整や器面の磨耗・剥落などにより底部切り離し技法が不明のもの

} 外面調整

- a : 内面にミガキ・黒色処理が施されるもの
 - b : ロクロ痕以外の調整を持たないもの
 - c : その他
- } 内面調整

[高台付坏] 2点が出土した。底部回転糸切り後に高台を付けているもので内面は黒色処理される。

[甕] 26点が出土した。甕の製作に際してはロクロを使用するものと使用しないものの2種類に分類できる。

A群：製作に際してロクロを使用しないもの。口縁部はヨコナデ、体部はケズリ、ナデ、ミガキ、ハケメ調整される。

B群：製作に際してロクロを使用するもの。体部上半部ロクロナデ、下半部ケズリ・ナデ調整される。

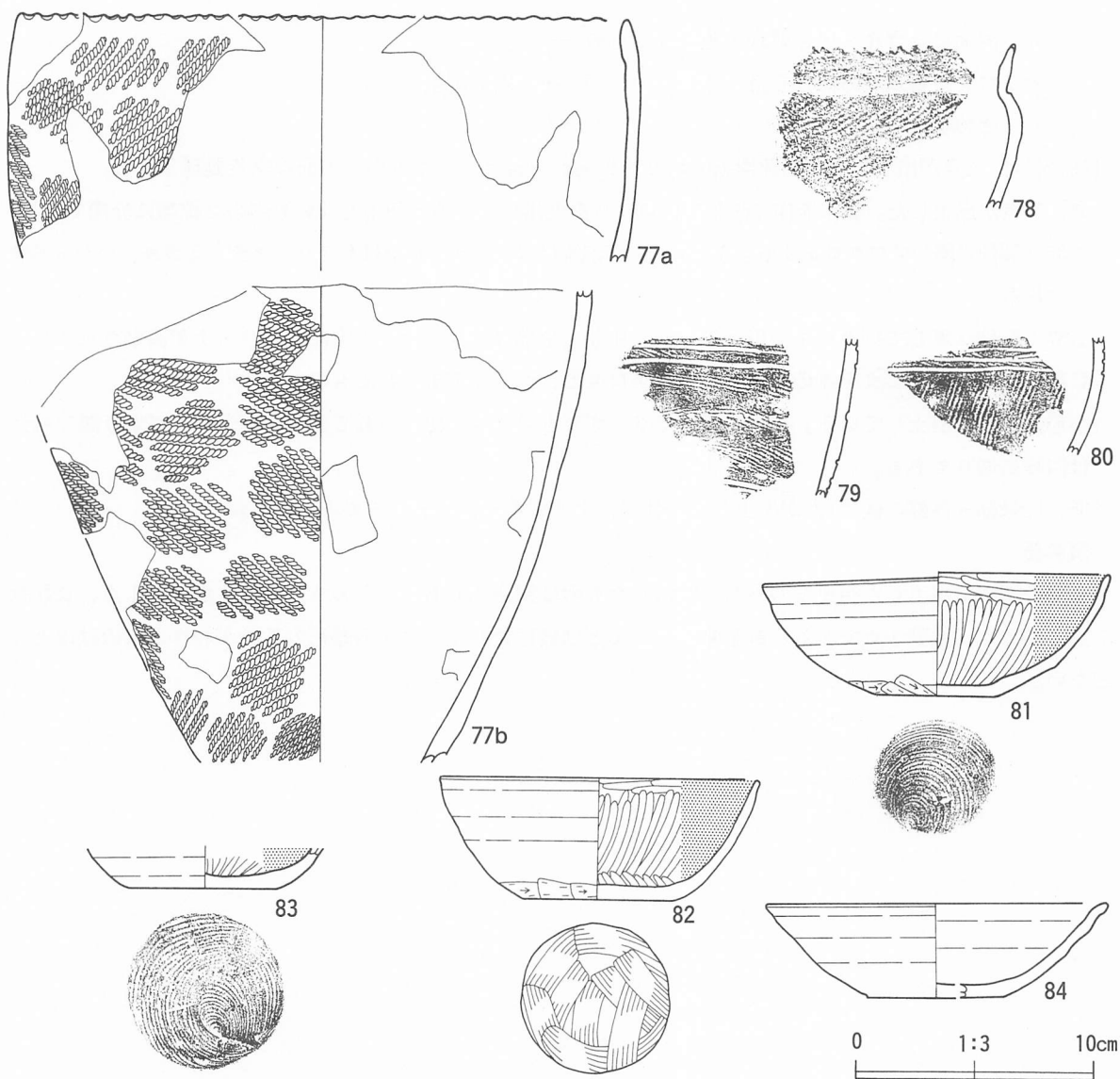
C群：製作に際してタタキの工程を経てロクロ成形、ケズリ調整されるもの。

[小形甕] 9点出土している。製作に際してはいずれもロクロが用いられており、小形で底部切り離し技法は回転糸切りである。

[埴] 口縁部～体部の破片1点が出土した。体部はナデ調整で、一部にミガキが行われている。

須恵器

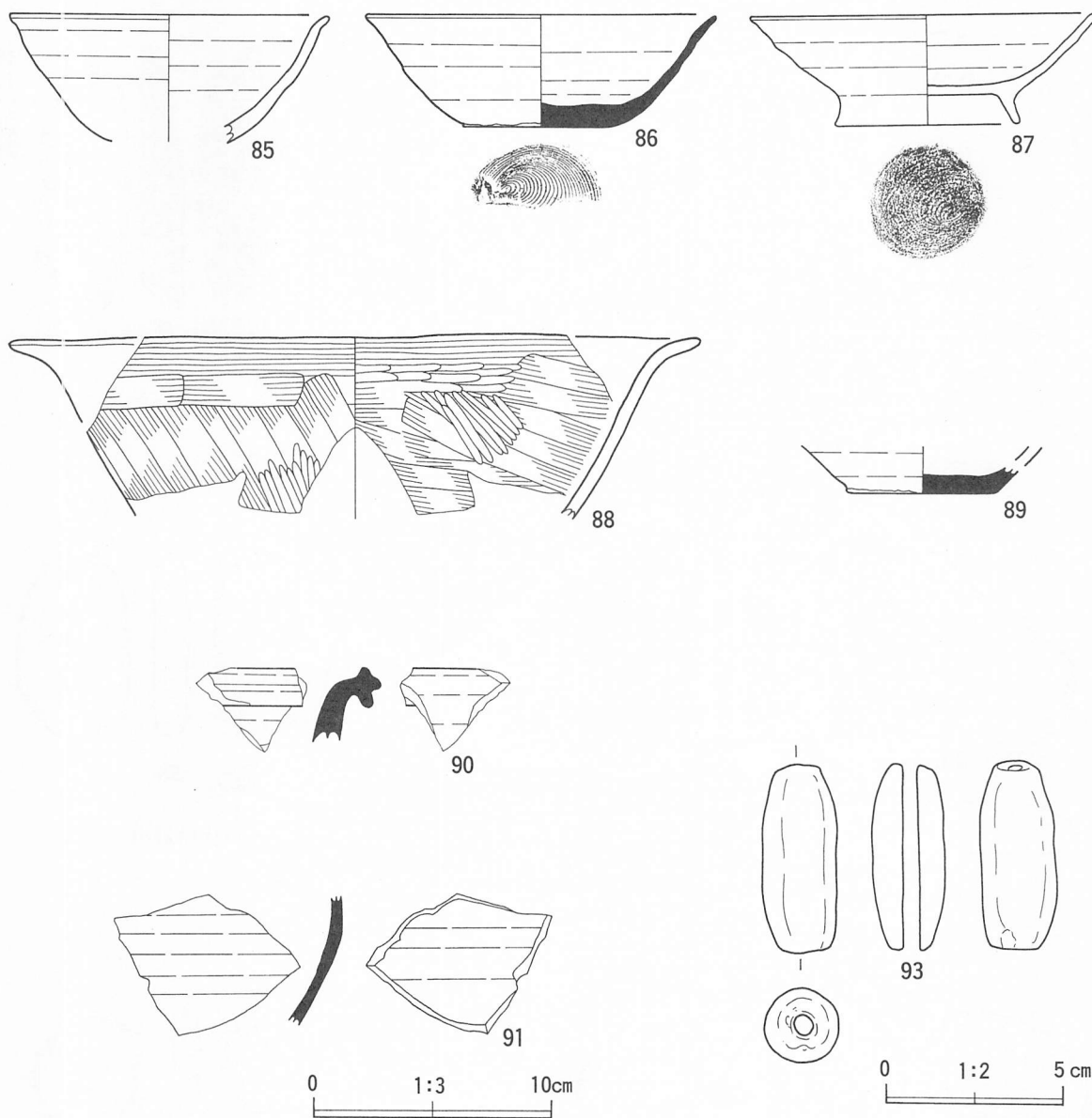
今回の調査で出土した須恵器のうち、図示したものは23個体である。そのうち坏は9点、蓋1点、長頸瓶7点、甕3点、大甕3点である。蓋を除くほとんどは破片資料で、全体の器形の特徴がわかるものはほとんどない。



No	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	備考
77a	遺構外攪乱	深鉢	口縁部	L R	折り返し口縁を呈する。口唇部棒状工具により波状形成される。	同一個体
77b	遺構外攪乱	深鉢	胴部	L R	胴下部から口縁部に向かって外傾する器形を呈する。縦位主体のL Rを器面全体に施す。	
78	遺構外攪乱	甕	口縁部	L R	胴上半部で最大径を持ち、頸部で括れ、口縁部が短く外反する器形を呈する。口唇部は工具による刻目を持つ。胴部にはL R縄文が横位に施される。	
79	遺構外攪乱	甕	胴部	附加条	破片上端と下端に数条の並行沈線を持つ。胴部にはR Lの縄を二つ折りにし、一方を軸にして他方の縄を巻き付けた縄巻き縄文が横位に施される。その際、原体につくられたループ状の突起部により連続する竹管刺突様の押圧痕が付けられる。	
80	遺構外攪乱	甕	胴部	附加条	破片の一端に数条の並行沈線を持つ。胴部にはR Lの縄を二つ折りにし、一方を軸として他方の縄を巻き付けた原体を用いた縄巻き縄文が縦位に施される。	

No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
81	第2トレンチ表土	土師器	坏	II a	ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	ミガキ	-	5.0	5.2	内面黒色処理
82	第1トレンチ	土師器	坏	III a	ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	ミガキ	-	6.2	5.1	内面黒色処理
83	第2トレンチ表土	土師器	坏	I a	ロクロナデ	ミガキ	-	6.5	-1.7	内面黒色処理
84	第1トレンチ表土下60cm	土師器	坏	I b	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.4)	-	4.0	

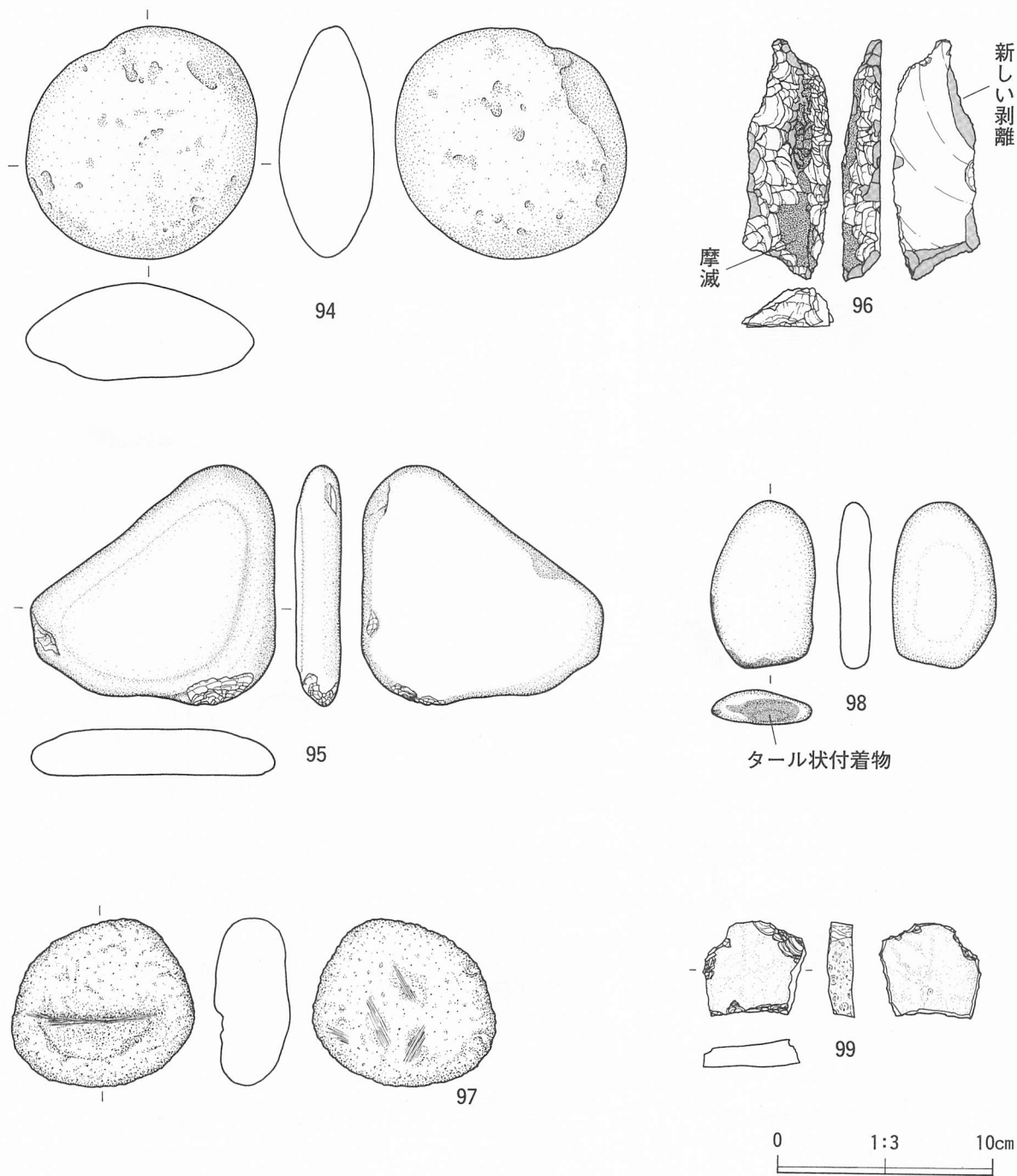
第22図 遺構外出土遺物①



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
85	第1トレンチ	土師器	坏	Ib	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.4)	—	-5.3	
86	第1トレンチ攪乱	須恵器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	14.8	5.4	4.8	
87	第2トレンチ表土	土師器	高台付坏		ロクロナデ	ロクロナデ	—	7.8	4.7	
88	補3付近床土下	土師器	埴		ヨコナデ+ナデ+ミガキ	ヨコナデ+ナデ+ミガキ	(29.0)	—	-7.6	
89	補3付近床土下	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ	ロクロナデ	—	6.6	-4.5	
90	第1トレンチI層耕作土	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	-3.6	
91	第1トレンチ表土下20~50cm	須恵器	長頸瓶		ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	-5.9	
92	遺構外I層	磁器	碗							写真のみ

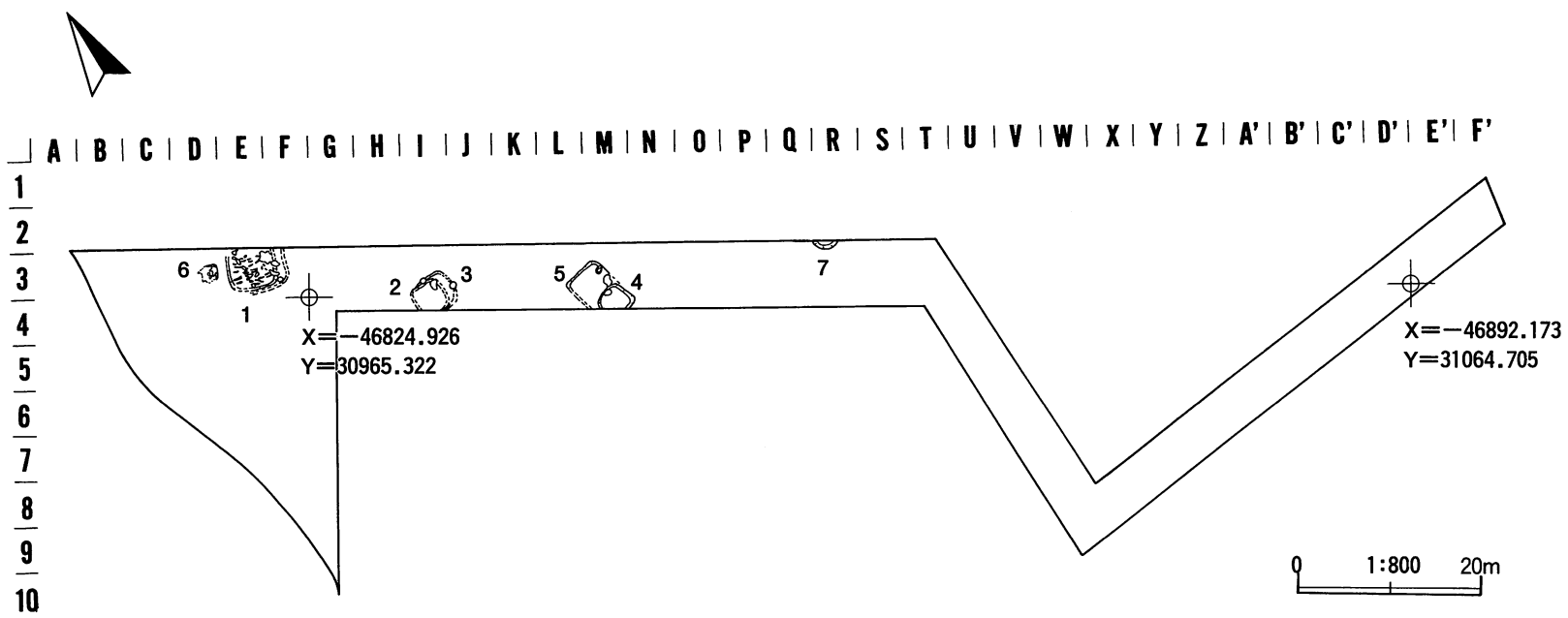
No	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
93	補2付近床土下	土錘	5.3	2.05	0.85		

第23図 遺構外出土遺物②



No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
94	4 E I層	敲石	安山岩質 溶岩	奥羽山脈 第四紀火山	完形	10.7	10.6	4.4	533.95	
95	5 U I層	敲石	砂岩	奥羽山脈	完形	11.1	11.2	2.1	386.72	一端部に敲打痕有
96	3 I I層	石匙	砂岩	奥羽山脈	両端部 一部欠損	7.5	2.3	1.1	23.03	風化・摩滅著しい
97	地点不明	磨石	玄武岩質 溶岩	奥羽山脈 第四紀火山	完形	7.7	8.4	3.5	206.20	表・裏面及び側縁に筋状の 擦痕有
98	地点不明	磨石?	細粒岩質	北上山地	完形	7.6	4.7	1.6	79.67	被熱 長軸一端部にタール状の付着物
99	3 G I層	素材	瑪瑙	奥羽山脈	完形	4.4	4.6	1.2	39.69	調整痕無

第24図 遺構外出土遺物③



- 1. 1号竖穴住居跡
- 2. 2号竖穴住居跡
- 3. 3号竖穴住居跡
- 4. 4号竖穴住居跡
- 5. 5号竖穴住居跡
- 6. 6号竖穴住居跡
- 7. 1号土坑

第25图 遺構配置图

3. まとめ

今回の調査で西長岡長谷田遺跡は、平安時代の集落跡の一部であることが明らかになった。

遺跡は北上川左岸の砂礫段丘上に立地しているが、この地域は昭和30年代に堤防が築かれるまで、川の氾濫のたびに洪水が繰り返されたようである。また、同じ昭和30年代に大規模な水田造成工事がおこなわれ、その際に周辺の地形は大きく改変されている。本調査で見つかった遺構は、辛うじて痕跡をとどめる程度のもので多く、この時点で多くの遺構が削平・消失した可能性が高い。

住居跡は6棟検出されたが、残存状況はきわめて不良で、明確にプランを把握できたものは無い。カマドの位置はおおむね東方向にもつものと思われるが、カマドの有無が不明確なもの、焼土のみが残存するものなど不明な点が多く、詳細を明らかにできなかった。住居には重複関係がみられるものが存在することから、2時期以上の時期差があることが考えられる。1号竪穴住居跡が確認された北側の立地面は、黒褐色土と黄褐色土が混じりあう様相を呈しており、住居の構築以前から洪水により、たびたび冠水していた様子が窺えた。

土坑については1基検出されたが、単独の出土であり、出土遺物もないことからその詳細は不明であるが、埋土の状態が住居と似ることから、これらと同時期の可能性がある。

調査区自体は水路予定地に当たっているため細長く、これらの遺構のほかに集落を構成していたと思われる遺構については不明である。

また、地元の民家の方より、調査区の数百メートル北側で行われた水田工事の際、多量の古代の土器片が出土したとの話を伺った。これより遺跡の広がりには北側まで延びると推測され、遺跡の位置する微高地上一帯に集落が営まれていた可能性が高い。

写真図版



遺跡遠景 (E→)



調査区全景 (N→)
写真図版1 空中写真



土層断面(西側攪乱部)



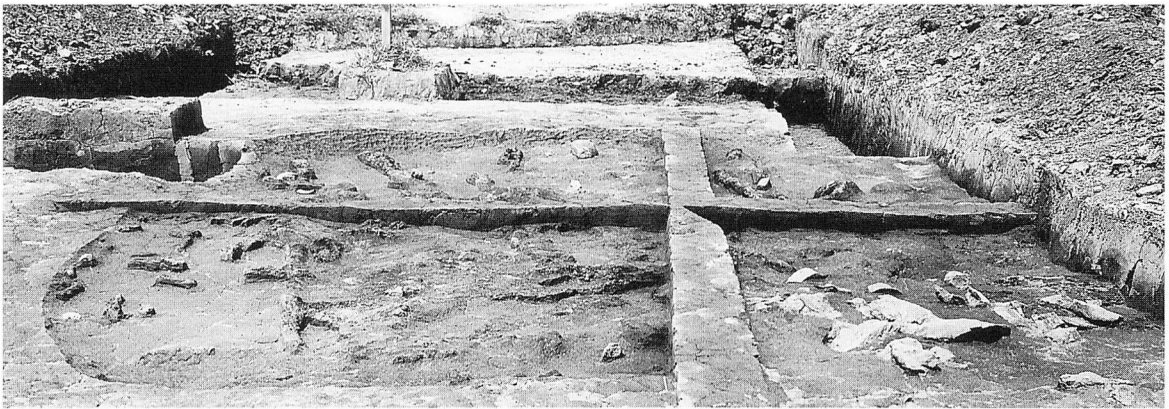
土層断面(平坦部)



試掘作業風景
写真図版 2 土層断面



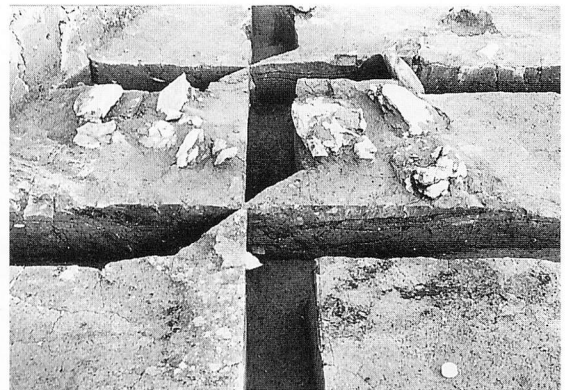
1号竪穴住居跡平面



断面



カマド平面 (NW→)

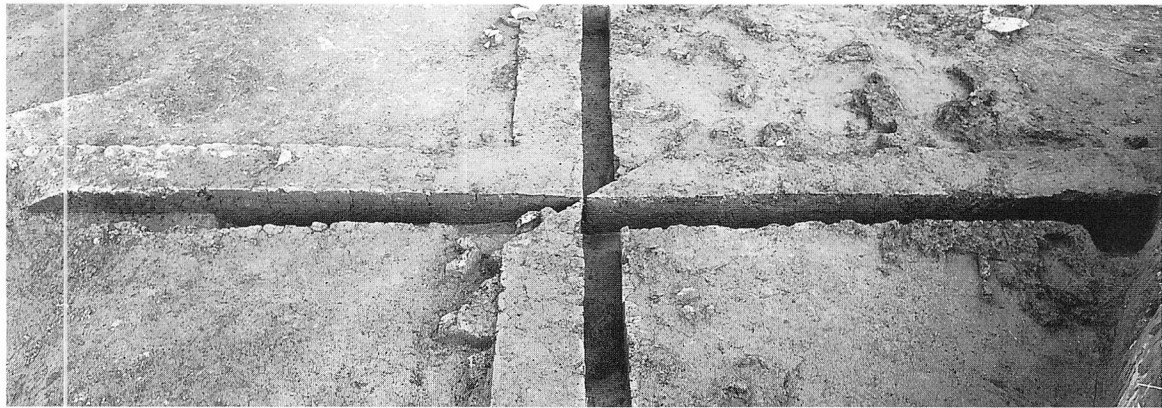


カマド断面 (NW→)

写真図版3 1号竪穴住居跡



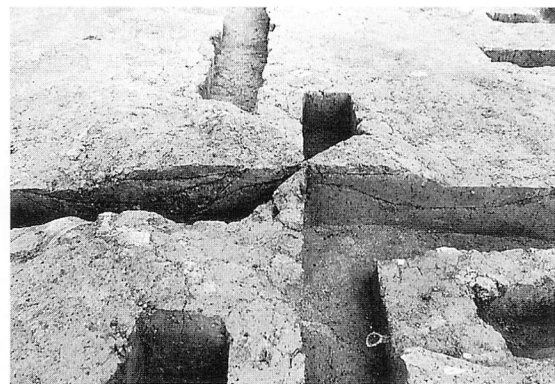
2・3号竪穴住居跡平面



断面

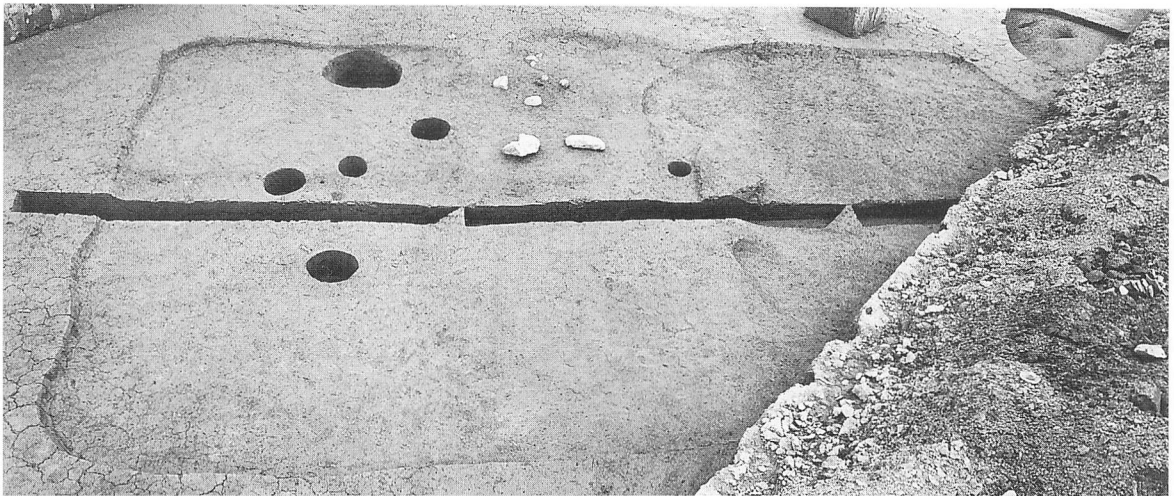


カマド燃烧部断面 (S→)

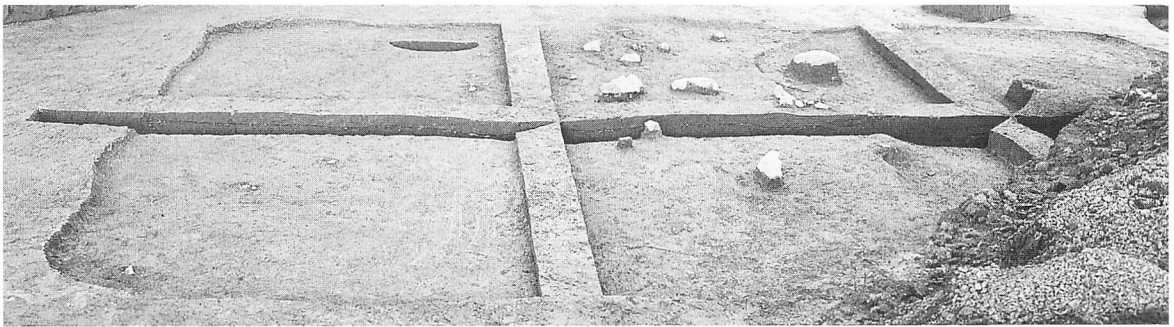


カマド燃烧部断面 (W→)

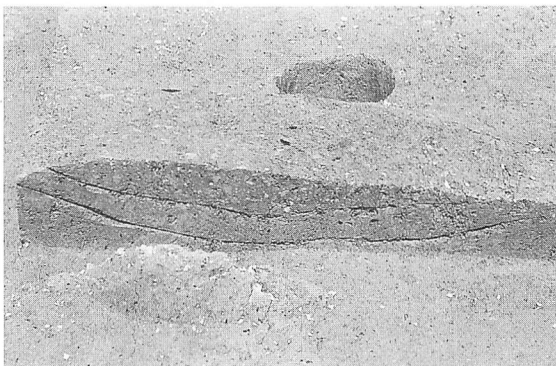
写真図版4 2・3号竪穴住居跡



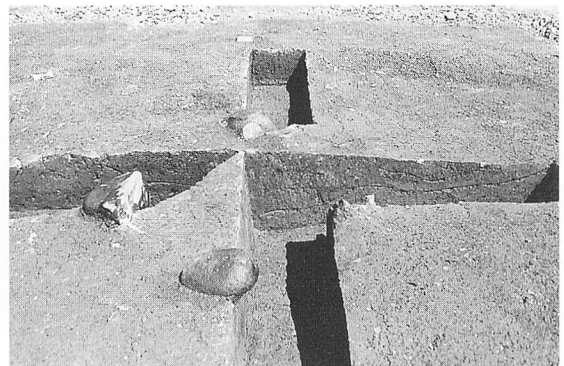
4・5号竪穴住居跡平面



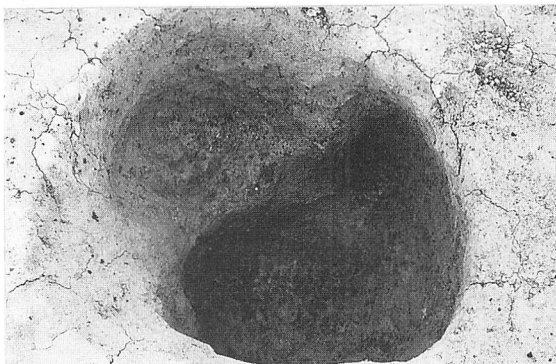
断面



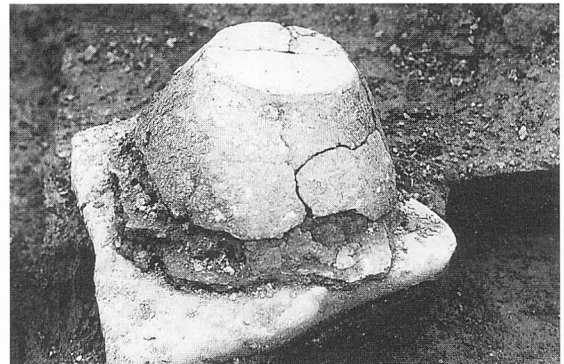
4号住カマド断面 (S→)



5号住カマド断面 (S→)



5号住PP1



5号住カマド支脚

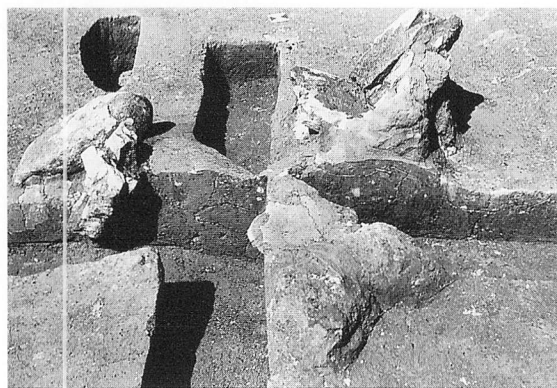
写真図版5 4・5号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡平面



断面

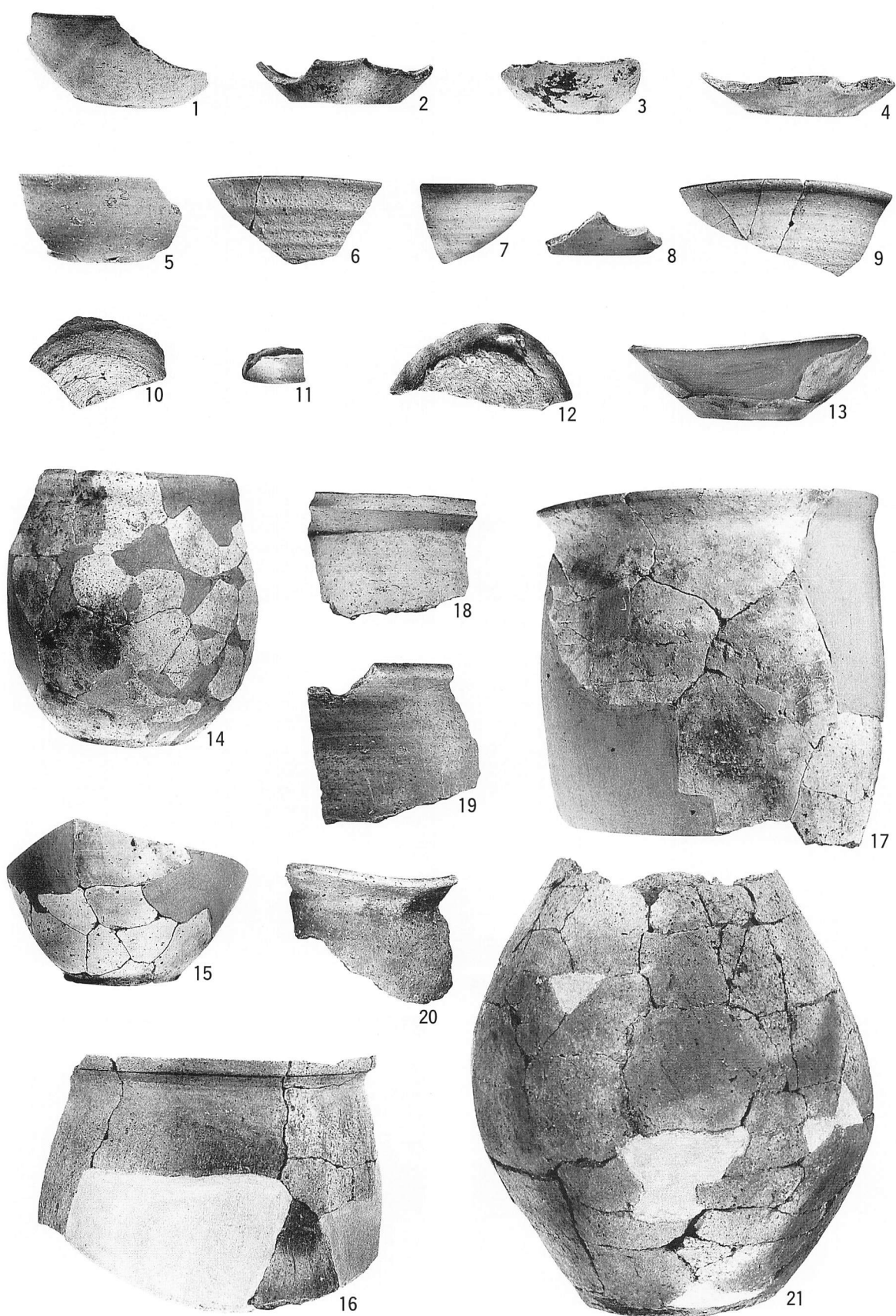


カマド断面 (SE→)

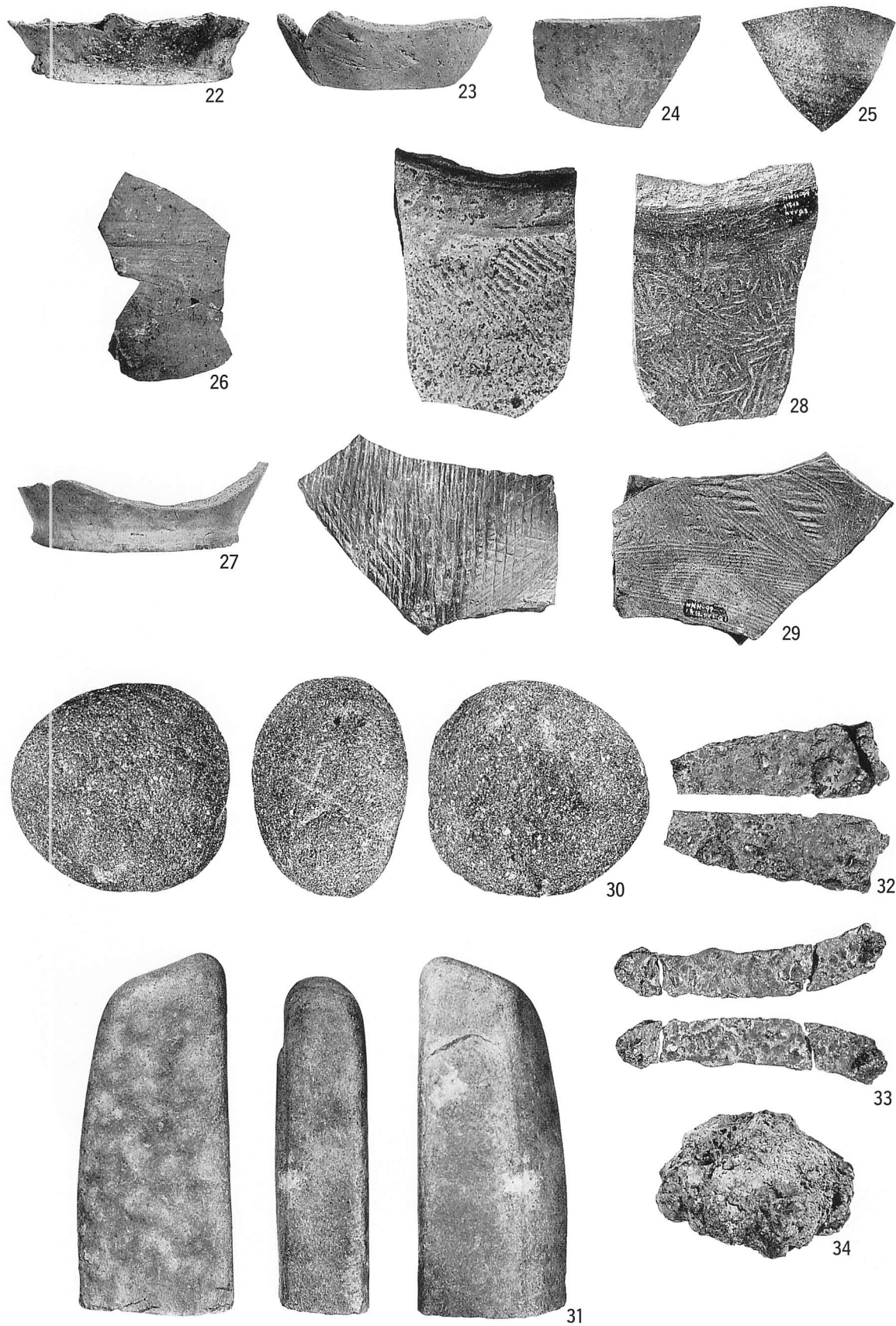


1号土坑平面・断面

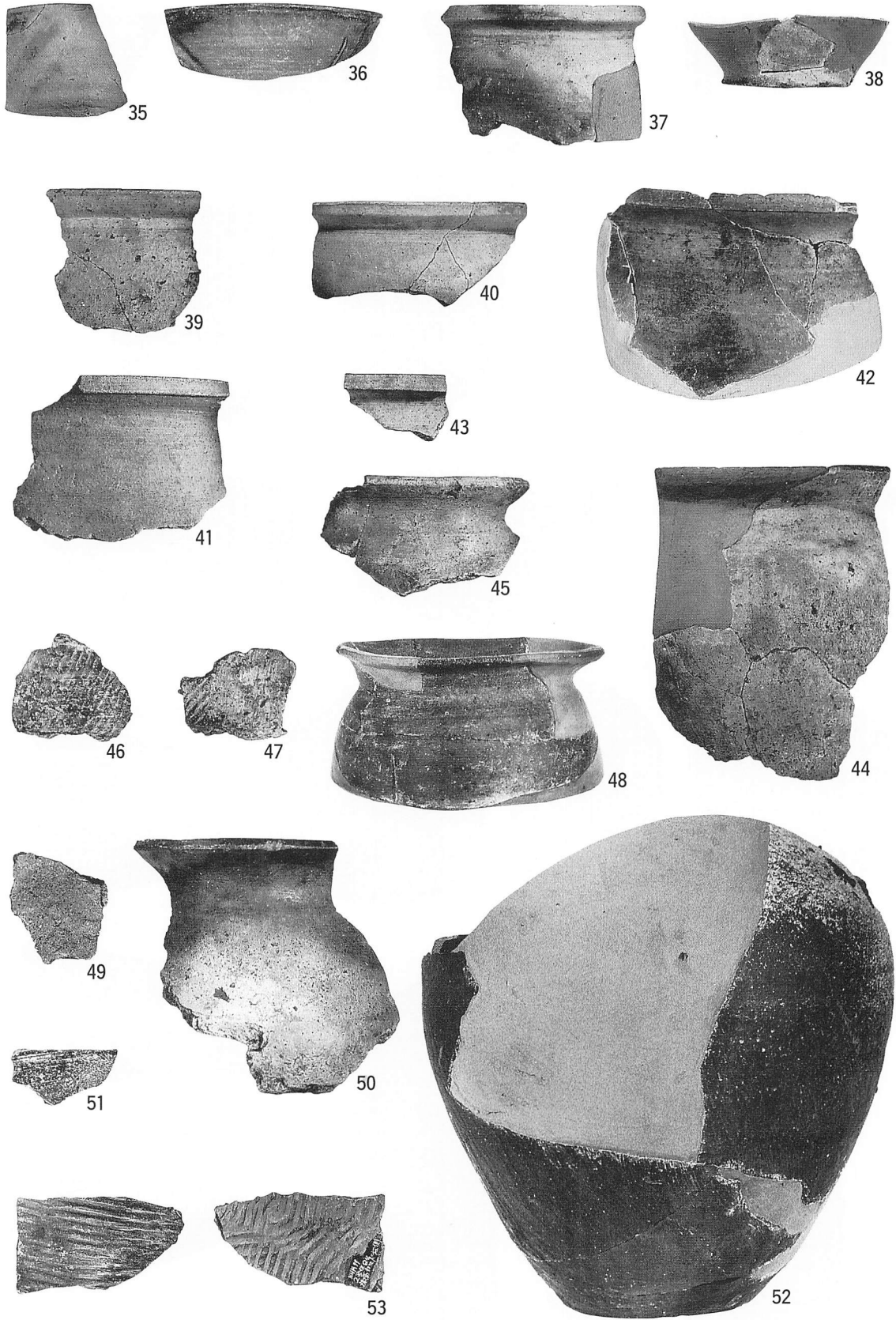
写真図版 6 6号竪穴住居跡・1号土坑



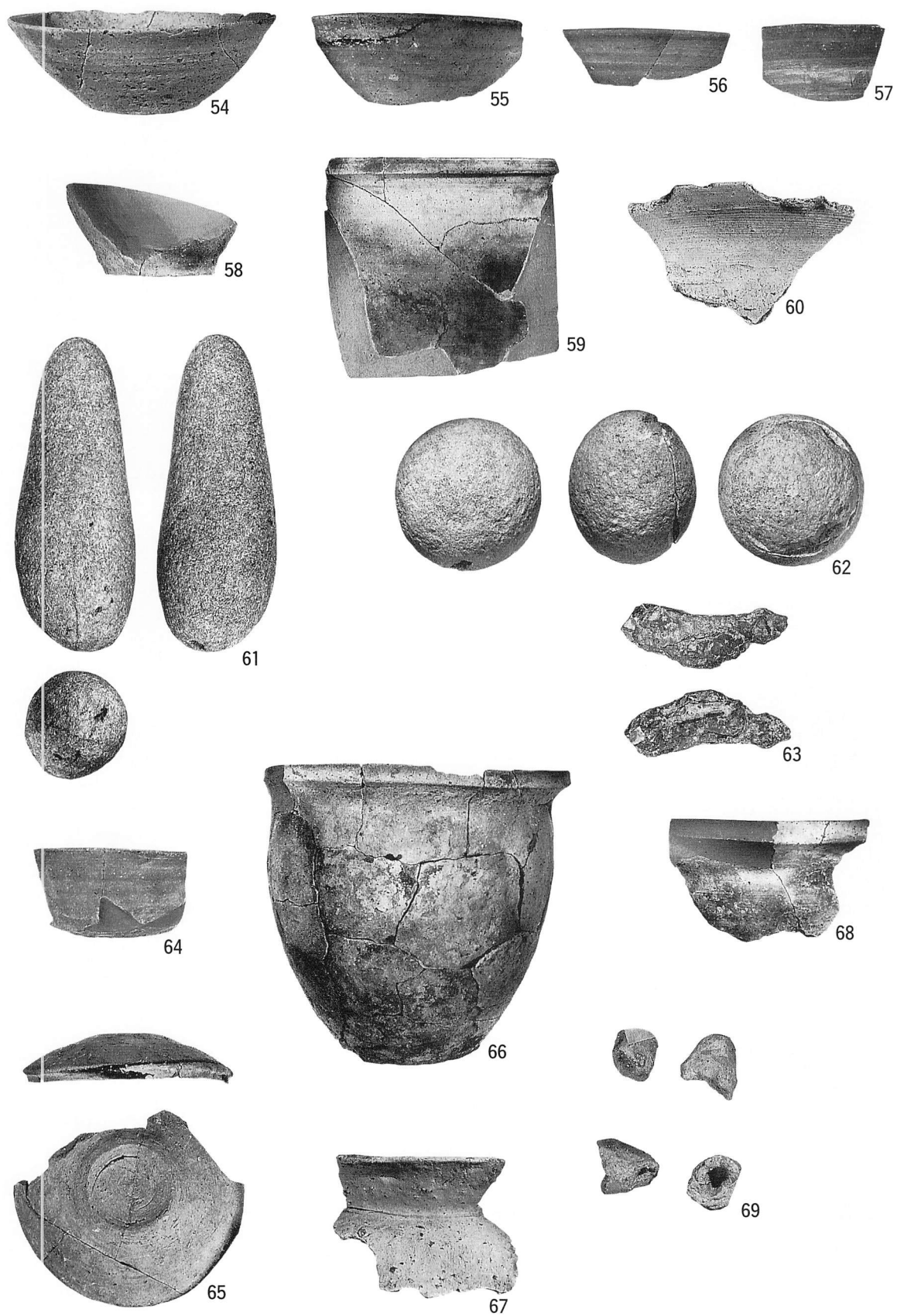
写真図版7 1号豎穴住居跡出土遺物①



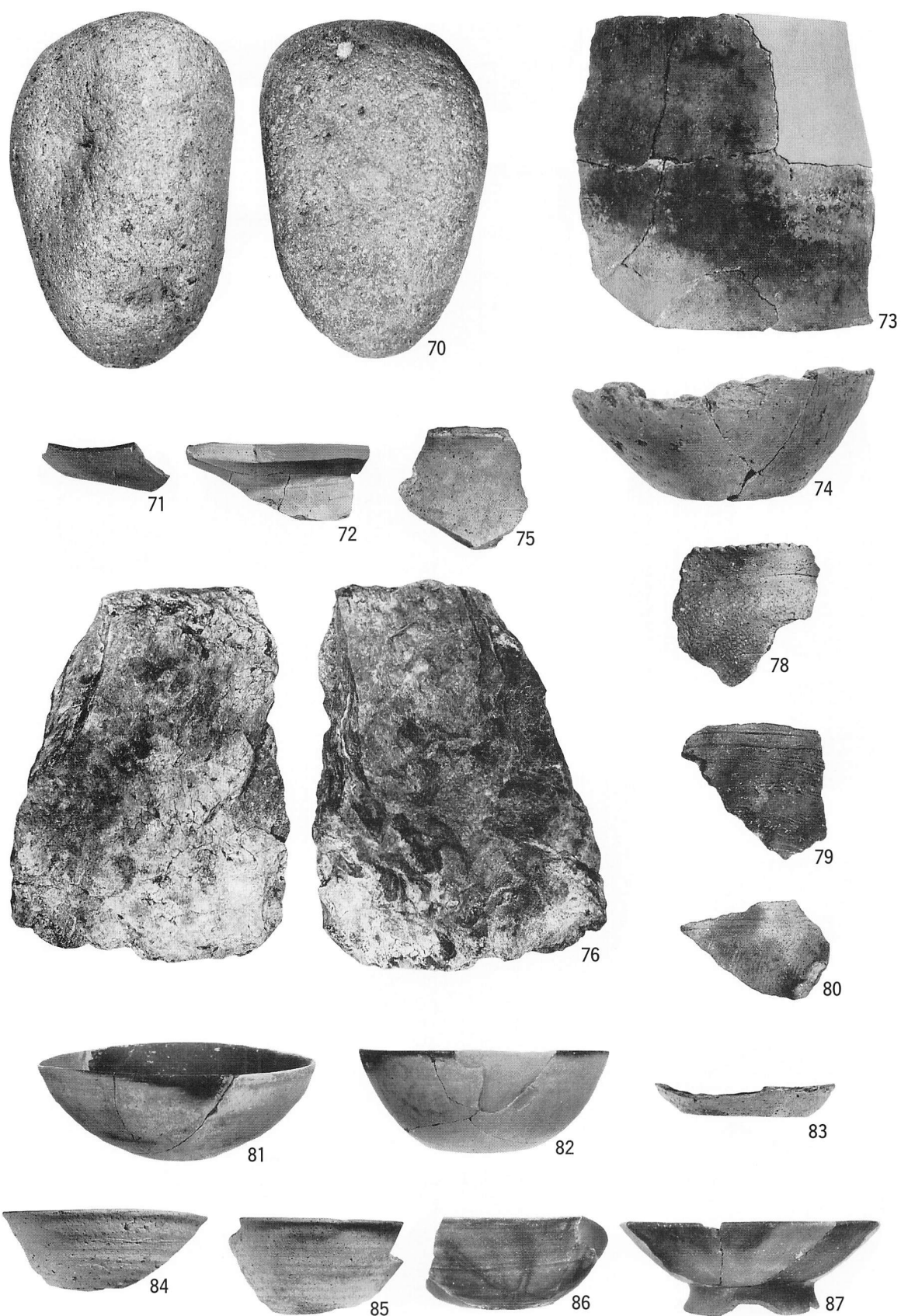
写真図版 8 1号竖穴住居跡出土遺物②



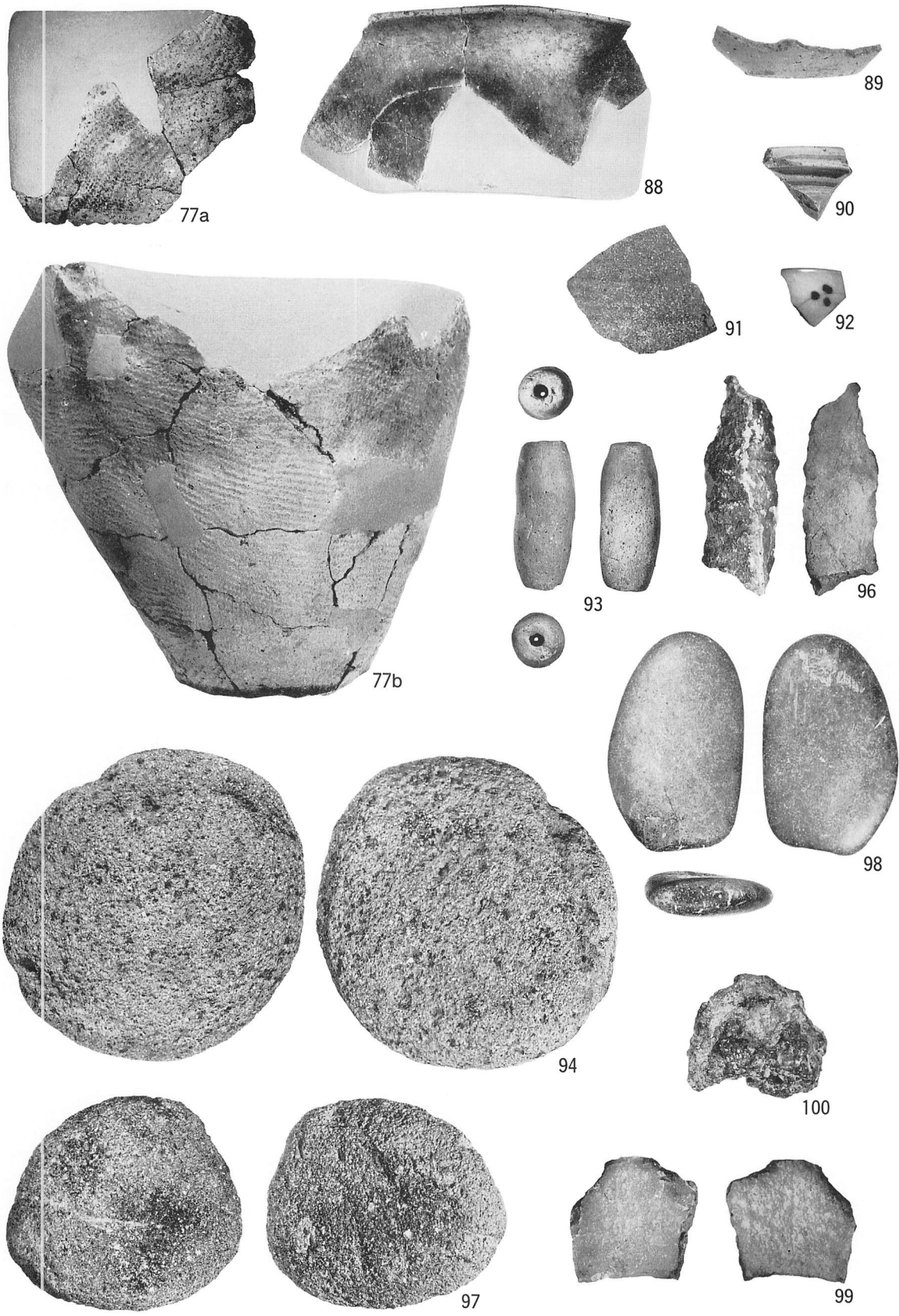
写真图版 9 2号竖穴住居跡出土遺物



写真图版10 3·4·5号竖穴住居跡出土遺物



写真図版11 5・6号竪穴住居跡・遺構外出土遺物①



写真図版12 遺構外出土遺物②

西長岡長谷田報告書抄録

ふりがな	にしながおかはせだいせきはくつちようさほうこくしよ							
書名	西長岡長谷田遺跡発掘調査報告書							
副書名	ほ場整備事業長岡地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第361集							
編著者名	中村直美 丸山浩治							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西長岡長谷田遺跡	いわてけんしわぐん 岩手県紫波郡 しわおにしがわか 紫波町西長岡 はせだ 長谷田39-1 ほか	03321	LE57-1360	39° 34' 39"	141° 11' 37"	平成11年 9月1日～ 10月 日	1,400㎡	ほ場整備 事業
所収遺構名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西長岡長谷田遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代		竪穴住居跡 土坑		土師器 須恵器		

V 沼 田 遺 跡

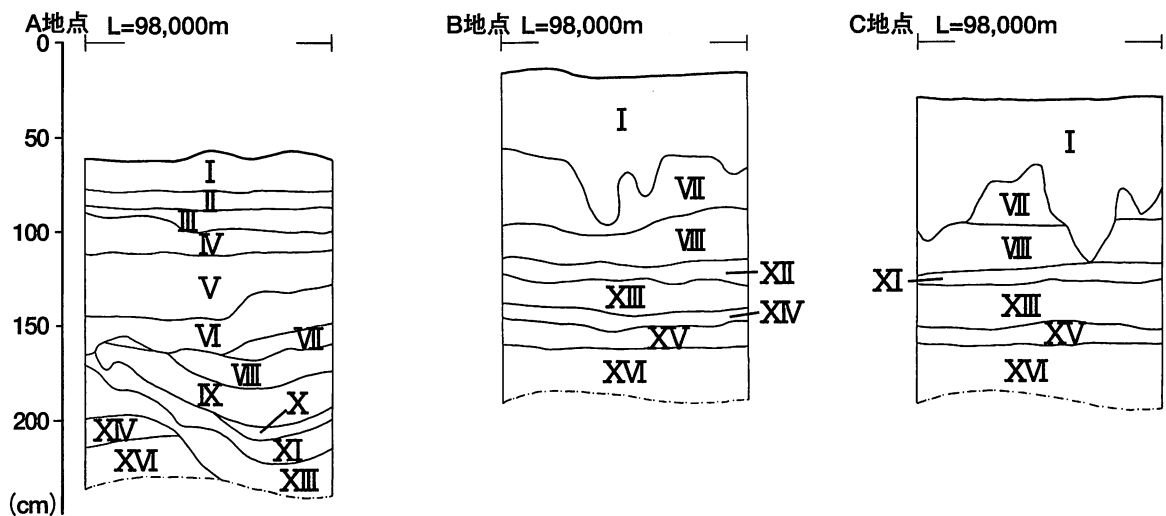
所 在 地	紫波町犬吠森沼端字沼田
委 託 者	盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所
遺跡台帳番号	LE57-2272
調 査 略 号	NT-99
調 査 面 積	900m ²
調 査 期 間	平成11年 9 月16日～10月25日
調 査 担 当 者	中村直美・丸山浩治
整 理 担 当 者	中村直美・丸山浩治
協 力 機 関	紫波町教育委員会

1. 基本層序

本遺跡は、西長岡長谷田遺跡の南西約550mに位置し、その海拔高度にほとんど差が無く、また同一の微高地上にあるためその様相は似通った状態を呈している。西側を流れる北上川との距離は約1 km、標高は約98mで、洪水の影響を幾度となく受けてきたらしく、調査区域内堆積土は大半が砂質である。

基本層序は、2 Aグリッド・4 Eグリッド・3 Kグリッド計3地点の深堀トレンチ断面の観察によって決定した。各地点の表土面における海拔高度は、2 Aグリッド付近で約97.400m、4 Eグリッド付近で約97.850m、3 Kグリッド付近で約97.700mを測る。北上川側にあたる2 Aグリッド付近が若干低く、第Ⅱ～第Ⅵ層を残しているが、他の2地点では確認されなかった。西方向に極緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。そのため堆積土が大きく異なる場所はない。

- I. 10YR 3/4 暗褐色シルト 耕作土。植物痕顕著。粘性弱・しまり弱。
- II. 2.5Y 4.5/2 暗灰黄色シルト グライ化層。粘性中・しまり強。5 YR 3/6～4/8 暗赤褐～暗褐色酸化鉄がモヤ状に30%入る。水田の床土。植物痕顕著。
- III. 10YR 4/2.5 灰黄褐～にぶい黄褐色砂質シルト グライ化層。粘性中・しまり強。暗赤褐色酸化鉄がモヤ状に10%、炭化物粒(φ 1～3 mm) 1%以下混入。植物痕顕著。
- IV. 10YR 4/2.5 灰黄褐～にぶい黄褐色砂質シルト グライ化層。粘性中・しまり強。炭化物粒(φ 1～3 mm) 1%以下混入。植物痕顕著。
- V. 10YR 3/3 暗褐色シルト 植物痕顕著。粘性中・しまり強。
- VI. 10YR 3/3 暗褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。10YR 5/8 黄褐色土淡く混入(10%)。植物痕顕著。
- VII. 7.5YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。10YR 3/4 暗褐色土淡く混入(30%)。植物痕顕著。
- VIII. 10YR 4/5 褐色砂 粘性微弱・しまり中。植物痕顕著。粒度細かい。
- IX. 10YR 5/6 黄褐色粘土 粘性強・しまり強。赤褐色酸化鉄がモヤ状に30%混入。植物痕顕著。
- X. 10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中・しまり強。10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト10%混入。赤褐色酸化鉄がモヤ状に10%混入。



第1図 基本土層柱状図

- X I. 10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中・しまり強。植物痕が若干入る。
- X II. 酸素還元層、酸化層、砂層の混合土。主に以下の①～⑤の順序で堆積。
- ①10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質粘土 粘性中・しまり中。層厚10～30mm (還元層)。
- ②5 YR 4/8 赤褐色砂 粘性無し・しまり強。鉄分の集積層。層厚0～10mm (酸化層)。
- ③10YR 4/5 褐色砂 粘性無し・しまり中。層厚0～30mm。
- ④10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。0～30mm (還元層)。
- ⑤10YR 4/8 赤褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。0～10mm (酸化層)。
- X III. 10YR 4/6 褐色砂 粘性なし・しまり中。10YR 4/4 褐色砂との互層。粒度粗い。
- X IV. 10YR 4.5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性中・しまり中。赤褐色酸化鉄粒 (ϕ 1～5 mm) 斑紋状に3%混入。粒度粗い。
- X V. 10YR 4/6 褐色砂 粘性なし・しまり強。10YR 3/4 暗褐色砂との混合土。粒度粗い。
- X VI. 10YR 3/3 暗褐色砂 粘性なし・しまり中。粒度粗い。

遺構検出層位は第Ⅱ～Ⅶ層で、その残存状態は耕作などの影響を受けており非常に悪い。

2. 検出された遺構と遺物

〔1〕 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

遺構 (第2図/写真図版3)

[位置・重複関係] 2Dグリッドに位置している。試掘調査により、存在が確認されていたもので、試掘トレンチ確認作業中にⅢ層灰黄褐色土の面で検出した。

[規模・平面形] 北辺2.9m、東辺3.1m、南辺3.1m、西辺3.3mのほぼ隅丸方形を呈する。

[覆土] 残存部の覆土は、褐色～黄褐色砂を主体とした堆積土で構成される。全体的にしまりは強く、粘性はない。

[壁] 壁高の残存値は5～25cmである。

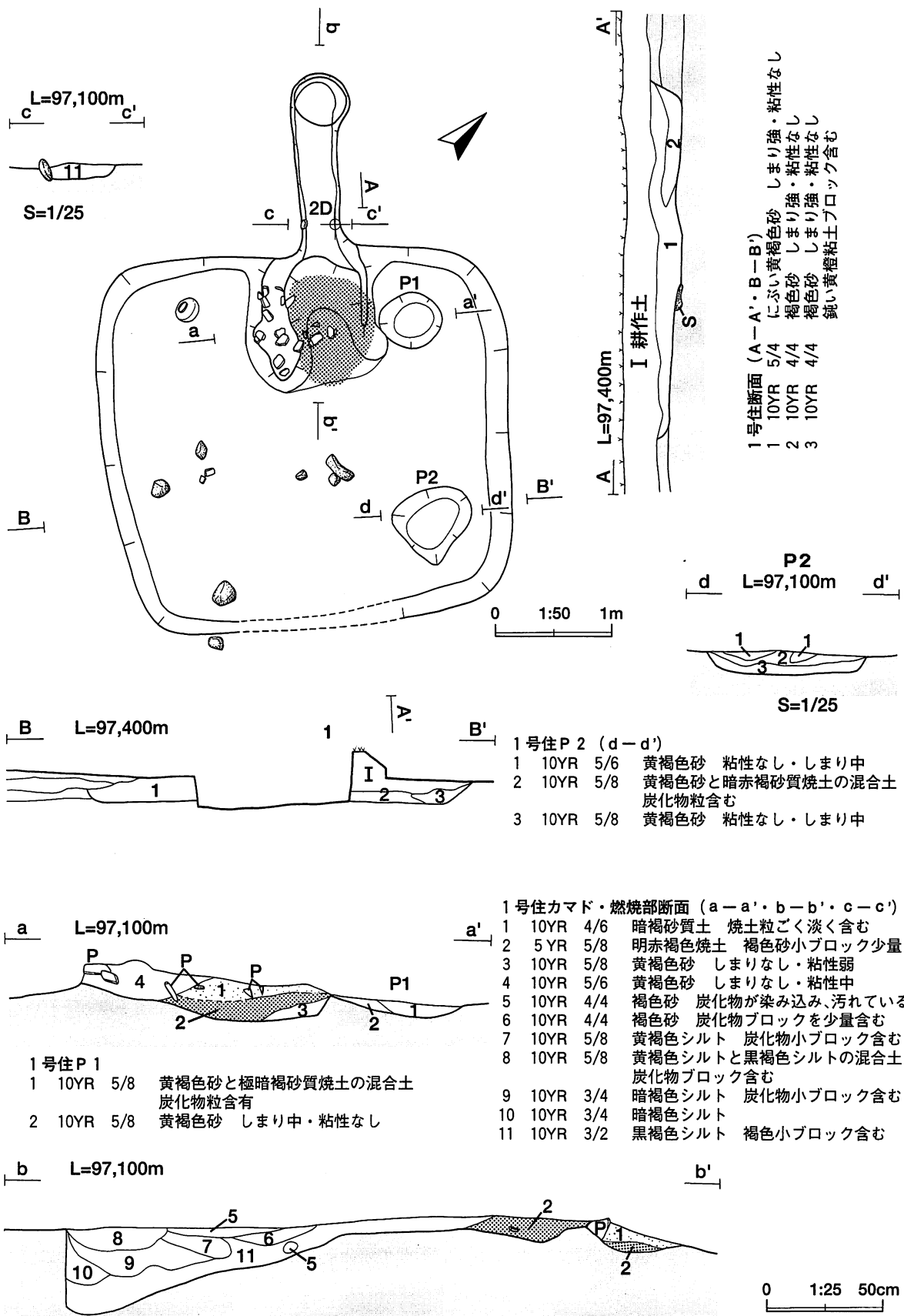
[床面] 礫石器が散在する。

[カマド] 西壁の中央やや北寄りに構築されている。本体はやや粘性のあるシルトで構築されている。燃焼部には73×110cm・厚さ10cmの焼土が形成されている。煙道部は上部を削平されているため構造など詳細は不明であるが、外側に向かい約15°の傾斜をもって緩やかに下る。煙出し孔は44×50cmのほぼ円形で、深さ36cmである。

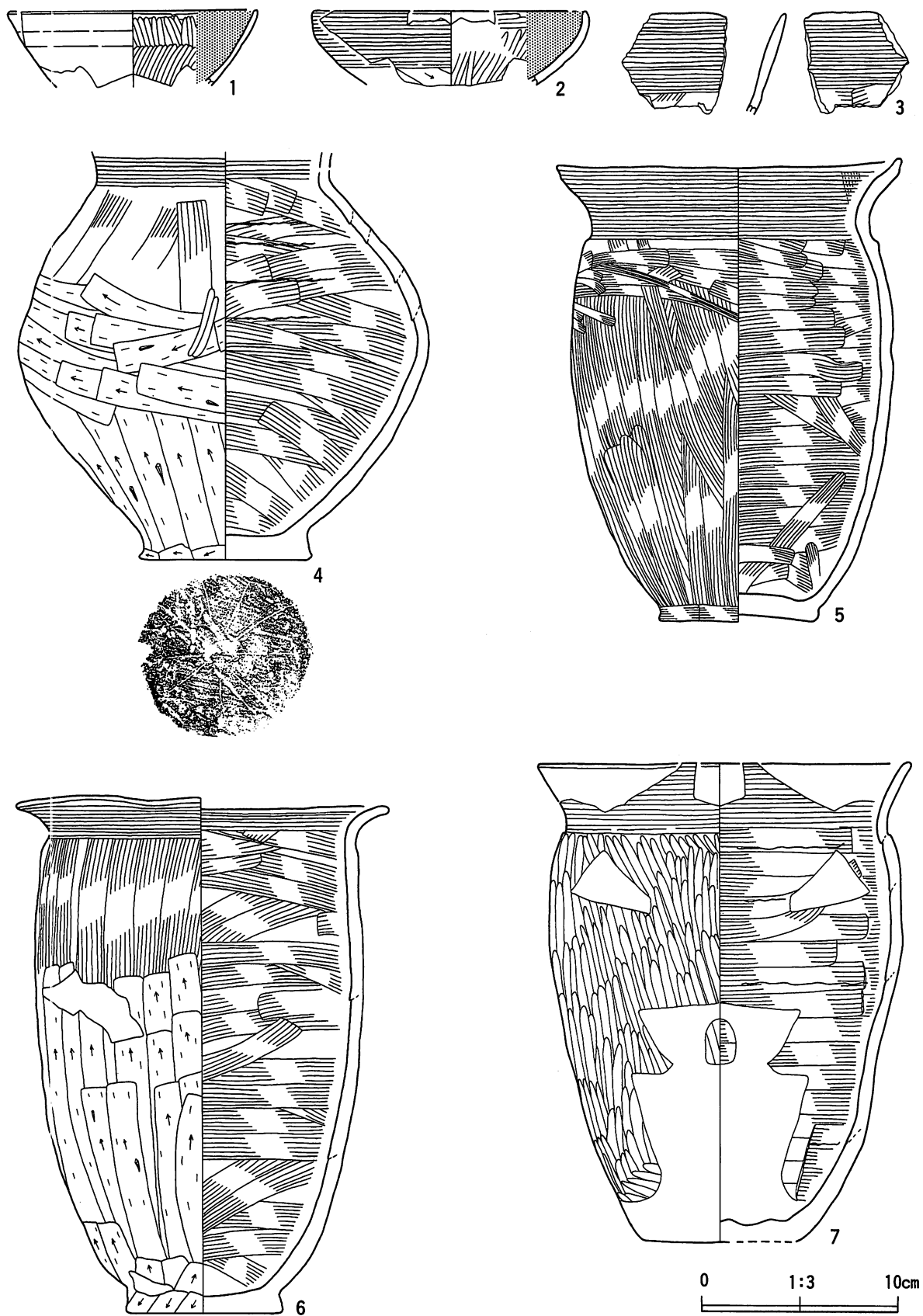
[柱穴・ピット] 床面から2つのピットを検出した。規模はP1が49×54cm・深さ6cm、P2が66×68cm・深さ11cmである。

遺物 (第3～5図/写真図版9・10)

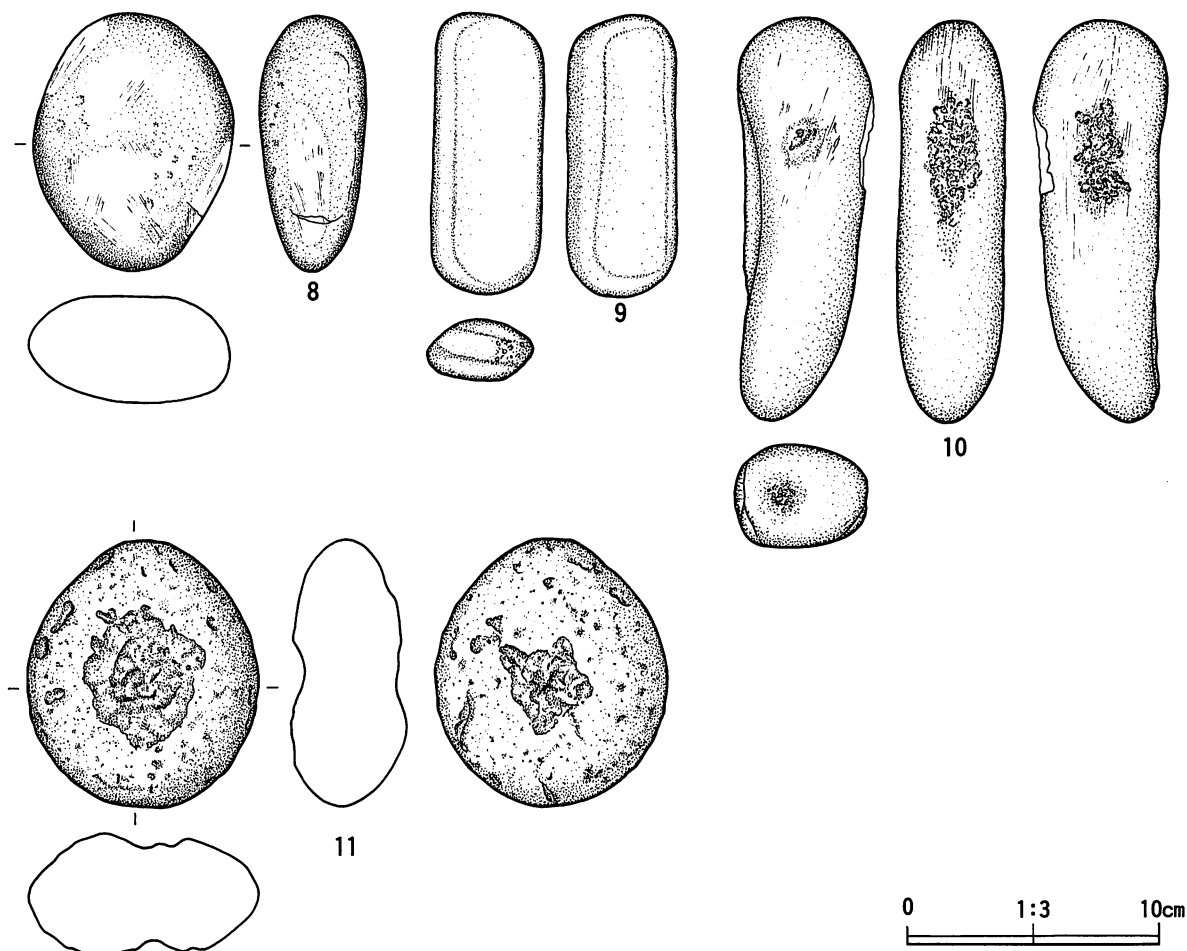
床面から土師器の坏片1点と、土師器の甕片1点、石器6点が出土した。覆土からは土師器の坏片2点と土師器の甕片3点が出土した。煙道基部より、礫石器1点が得られた。



第2図 1号竪穴住居跡



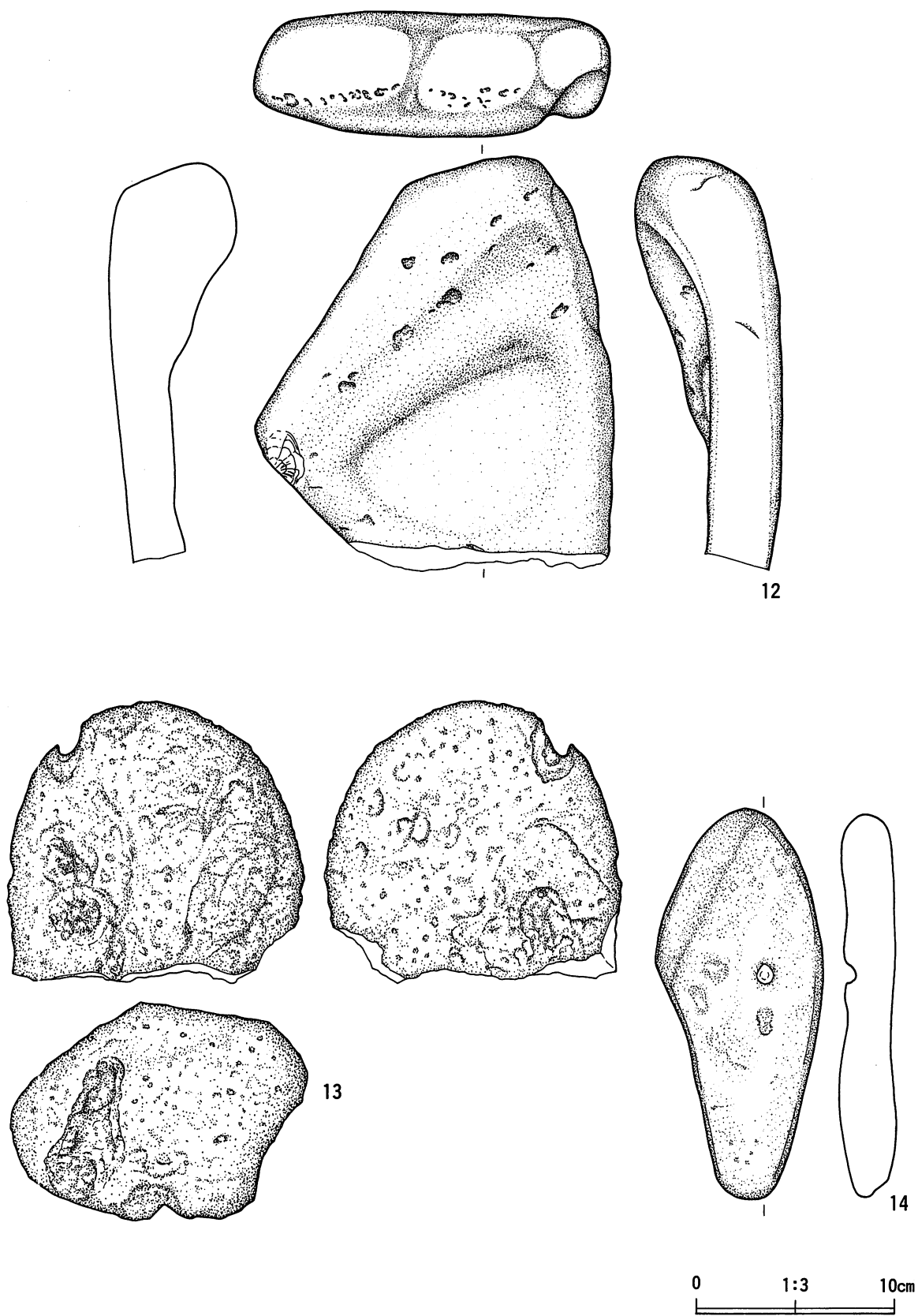
第3图 1号竖穴住居跡出土遺物①



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
1	1住床面	土師器	坏	BⅢ a	ロクロナデ	ミガキ	(12.7)	—	— 3.9	内面黒色処理
2	1住覆土	土師器	坏	AⅡ a 2	ケズリ+ヨコナデ	ミガキ	(14.0)	—	— 3.8	内面黒色処理
3	1住覆土	土師器	坏	AⅡ a 1	ナデ+ヨコナデ	ヨコナデ+ナデ	—	—	— 5.2	
4	1住床面	土師器	甕		ナデ+ケズリ+ヨコナデ+ミガキ	ナデ+ヨコナデ	-11.9	8.7	-20.8	
5	1住覆土	土師器	甕		ハケメ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	17.7	7.9	23.6	
6	1住覆土	土師器	甕		ナデ+ケズリ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	19.0	8.0	26.5	
7	1住覆土下位	土師器	甕		ミガキ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	19.8	(8.0)	24.4	

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
8	1住煙道部	磨石	安山岩	奥羽山脈	完形	10.1	7.9	4.2	461.70	カマド芯材に転用
9	1住カマド付近床面	敲石	砂岩	奥羽山脈	完形	11.1	4.4	2.4	167.63	端部に微細な敲打痕
10	1住覆土Ⅱ層	敲石	安山岩	奥羽山脈	完形	15.9	4.8	4.1	556.59	敲打痕は側縁部に顕著
11	1住床面	凹石	安山岩質溶岩	奥羽山脈第四紀火山	完形	10.6	9.0	4.8	386.23	表・裏面中央部に浅孔有
12	1住床面	台石	砂岩	奥羽山脈	一端部1/3程度欠損	20.7	17.9	6.2	2297.12	欠損部以外の側縁部磨痕顕著被熱により赤色化
13	1住床面	凹石	安山岩質溶岩	奥羽山脈第四紀火山	完形	14.8	14.8	11.0	1568.56	人為による浅孔2カ所
14	1住覆土	凹石?	凝灰岩	奥羽山脈	完形	19.7	8.4	2.8	497.05	φ 1 cmの浅孔1カ所

第4図 1号竪穴住居跡出土遺物②



第5图 1号竖穴住居跡出土遺物③

2号竪穴住居跡

遺構（第7・8図／写真図版4）

[位置・重複関係] 3 Jグリッドに位置している。Ⅲ層をトレンチ状に掘り下げ中に炭化物の淡く混入する範囲として検出した。

[規模・平面形] 北辺4.25m、東辺4.6m、南辺0.9m、西辺1.5mのほぼ隅丸方形を呈する。南西隅が調査区域外にかかっており、南辺と西辺の計測値は残存値である。

[覆土] 4層に細分され、褐色土主体で構成される。床面上位に炭化物を多量に含んだ黒褐色土と廃棄焼土の分布が認められる。

[壁] 壁高の残存値は18～30cmである。

[床面] ほぼ平坦である。床面直上に約115×172cmの範囲で炭化物の広がりが認められた。

[カマド] 北壁の中央部やや西寄りに構築されている。本体はやや粘性のあるシルトで構築されている。燃焼部には72×154cm・厚さ14cmの焼土が形成されている。煙道部は刳り抜き式の構造で、外側に向かい約16°の傾斜をもって緩やかに下る。煙出し孔は30×34cmのほぼ円形で、深さは残存値で47cmである。

[柱穴・ピット] 北東隅からピットを1基検出した。規模は60×93cm・深さ26cmを測る。

遺物（第6図／写真図版11）

カマド付近の床面から合わせて6点の遺物が出土している。カマド周辺床面から土師器坏が1点、ミニチュア土器が1点、土師器甕片が4点出土した。

3号竪穴住居跡

遺構（第9図／写真図版5）

[位置・重複関係] 7 Lグリッドに位置している。検出面はⅢ層黒褐色土で、遺構検出作業中に炭化物を少量含むプランとして検出した。

[規模・平面形] 北西辺360cm、北東辺340cm、南西辺370cm、南東辺320cmの隅丸方形を呈する。西側は調査区域外にかかる。

[覆土] 黄褐色～にぶい黄褐色シルトを主体として構成される。炭化物ブロックが極少量混入する。

[壁] 壁高の残存値は18～24cmである。

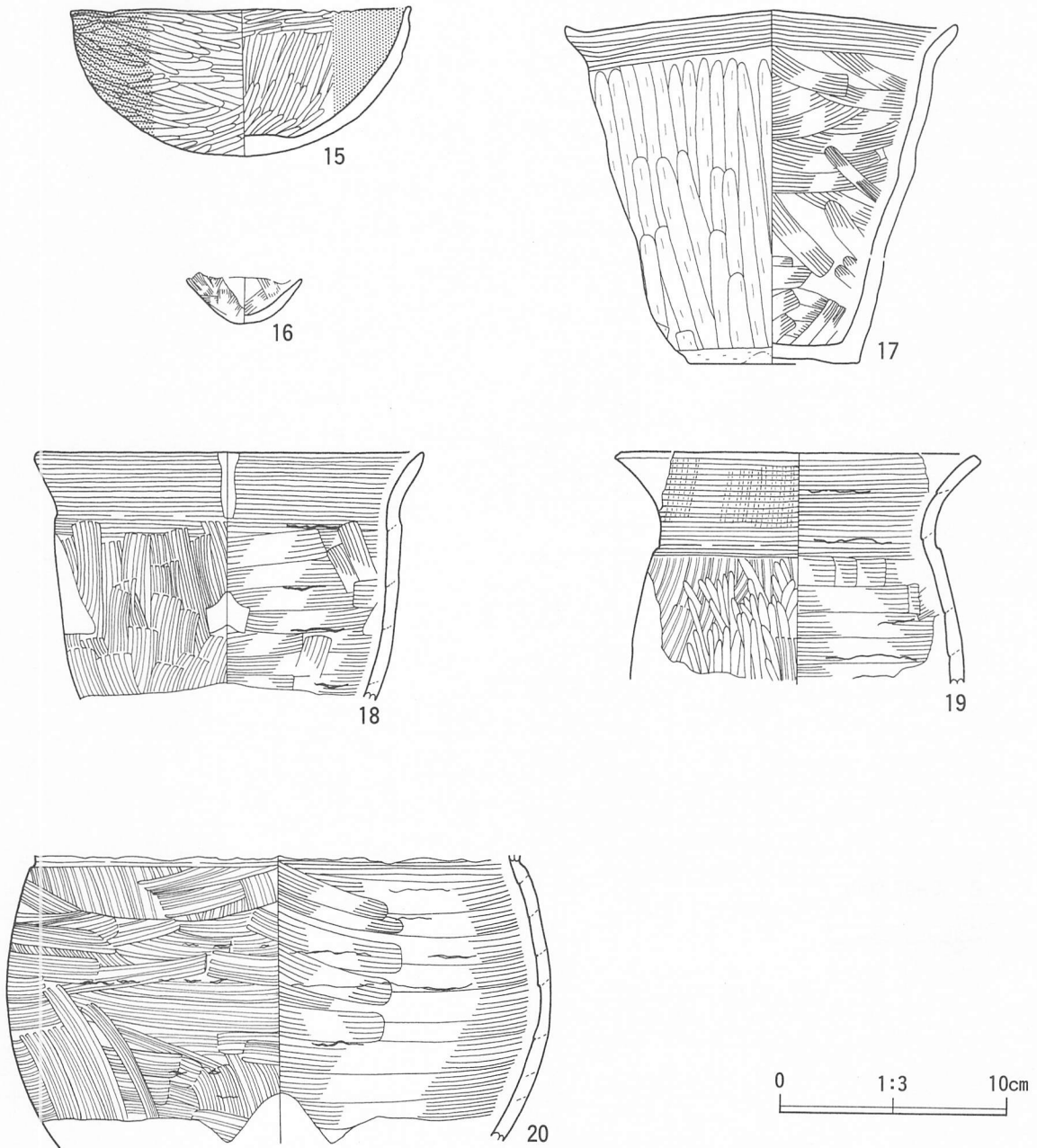
[床面] ほぼ平坦である。床面はとくに締まらず、貼り床も施されていない。

[カマド] 北西壁中央部に構築されている。本体は炭化物・焼土粒を含むシルトで構築されている。燃焼部には57×105cm・厚さ11cmの焼土が形成されている。煙道部は削平により不明である。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

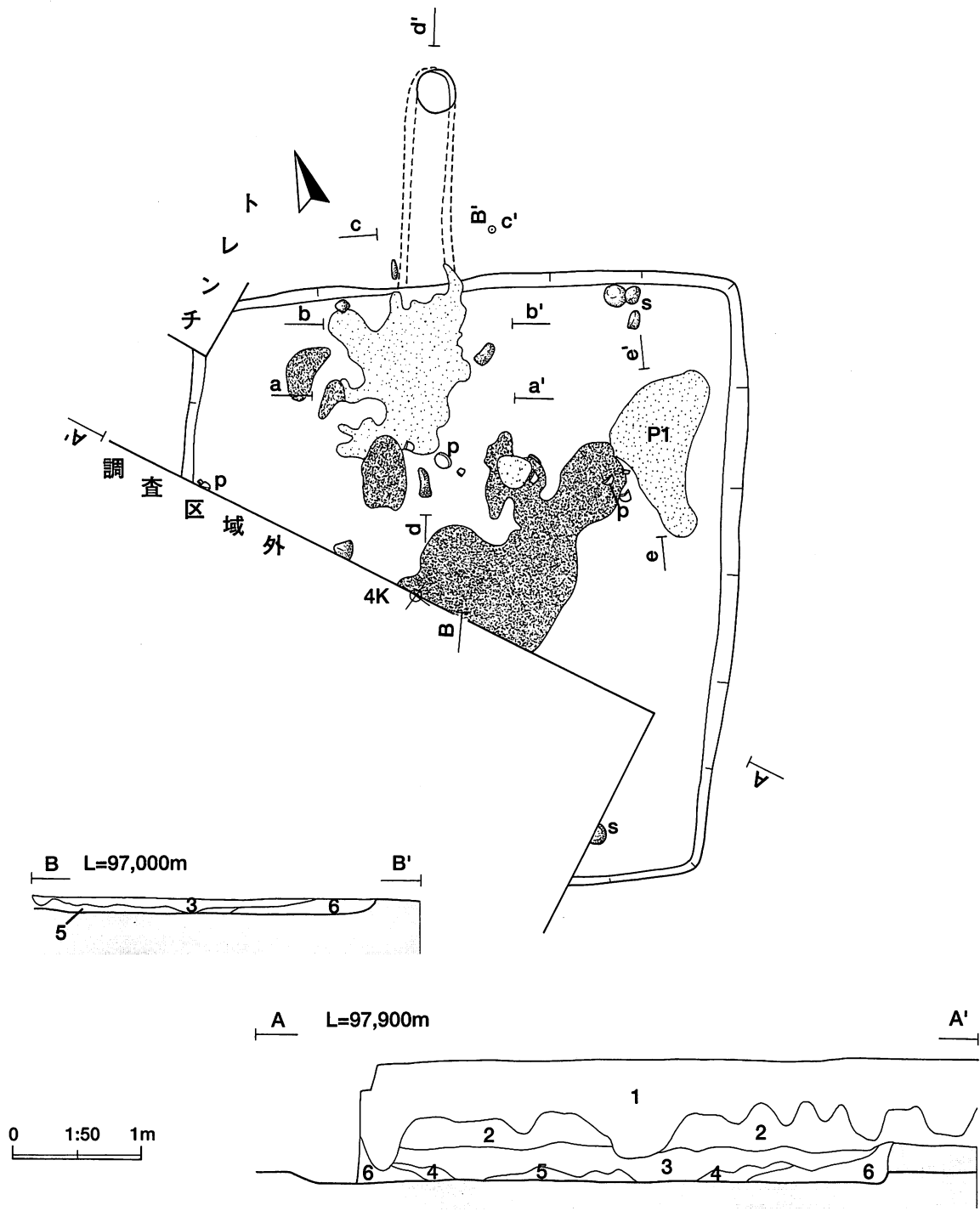
遺物（第11図／写真図版11）

カマド～床面にかけて、合わせて5点の遺物が出土している。床面から土師器の甕片が1点出土した。覆土からは土師器の坏片が3点出土した。21の土師器の坏は、出土位置からカマドの支脚として使用されていた可能性が高い。



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
15	2住床面	土師器	坏	A I a 1	ミガキ	ミガキ	15.0	丸底	6.4	内外面黒色処理
16	2住覆土	土師器	小形土器		ナデ	ナデ	5.1	丸底	2.2	
17	2住床直	土師器	甕		ヨコナデ+ナデ	ナデ+ヨコナデ	(17.3)	7.5	15.6	
18	2住カマド前	土師器	甕		ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ	17.2	—	-10.9	
19	2住床直	土師器	甕		ハケメ+ミガキ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	16.2	—	-10.1	
20	2住カマド前床面	土師器	甕		ハケメ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	—	—	-12.5	

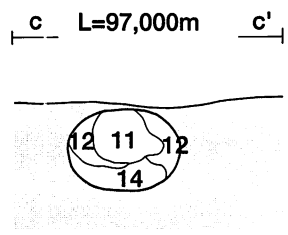
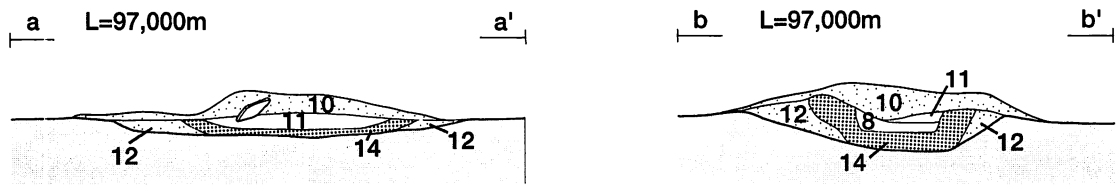
第6図 2号竪穴住居跡出土遺物



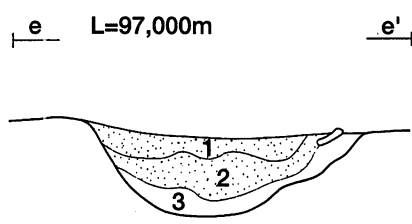
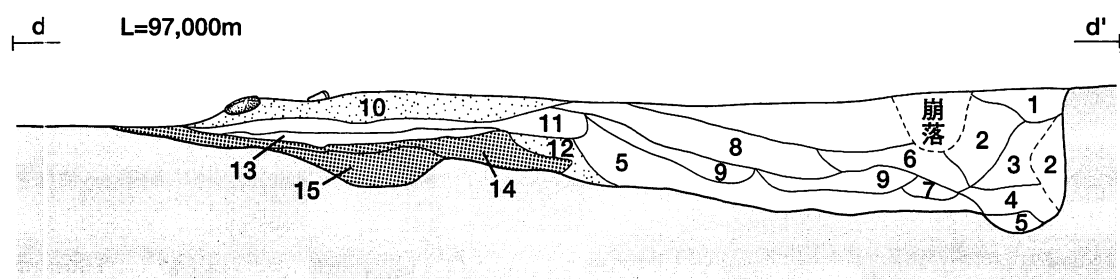
2号住断面 (A-A'・B-B')

- | | | |
|---|----------|-------------------------------------|
| 1 | I層 | |
| 2 | VII層 | |
| 3 | 10YR 4/3 | にぶい黄褐色シルト 粘性中・しまり中
炭化物小ブロック極少量含む |
| 4 | 10YR 4/3 | にぶい黄褐色シルト 粘性中・しまり中
炭化物小ブロック少量含む |
| 5 | 10YR 3/1 | 黒褐色シルト 粘性中・しまり中
炭化物多く含む |
| 6 | 10YR 3/4 | 暗褐色シルト 粘性中・しまり中
にぶい黄褐色ブロック含む |

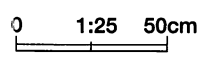
第7図 2号竪穴住居跡①



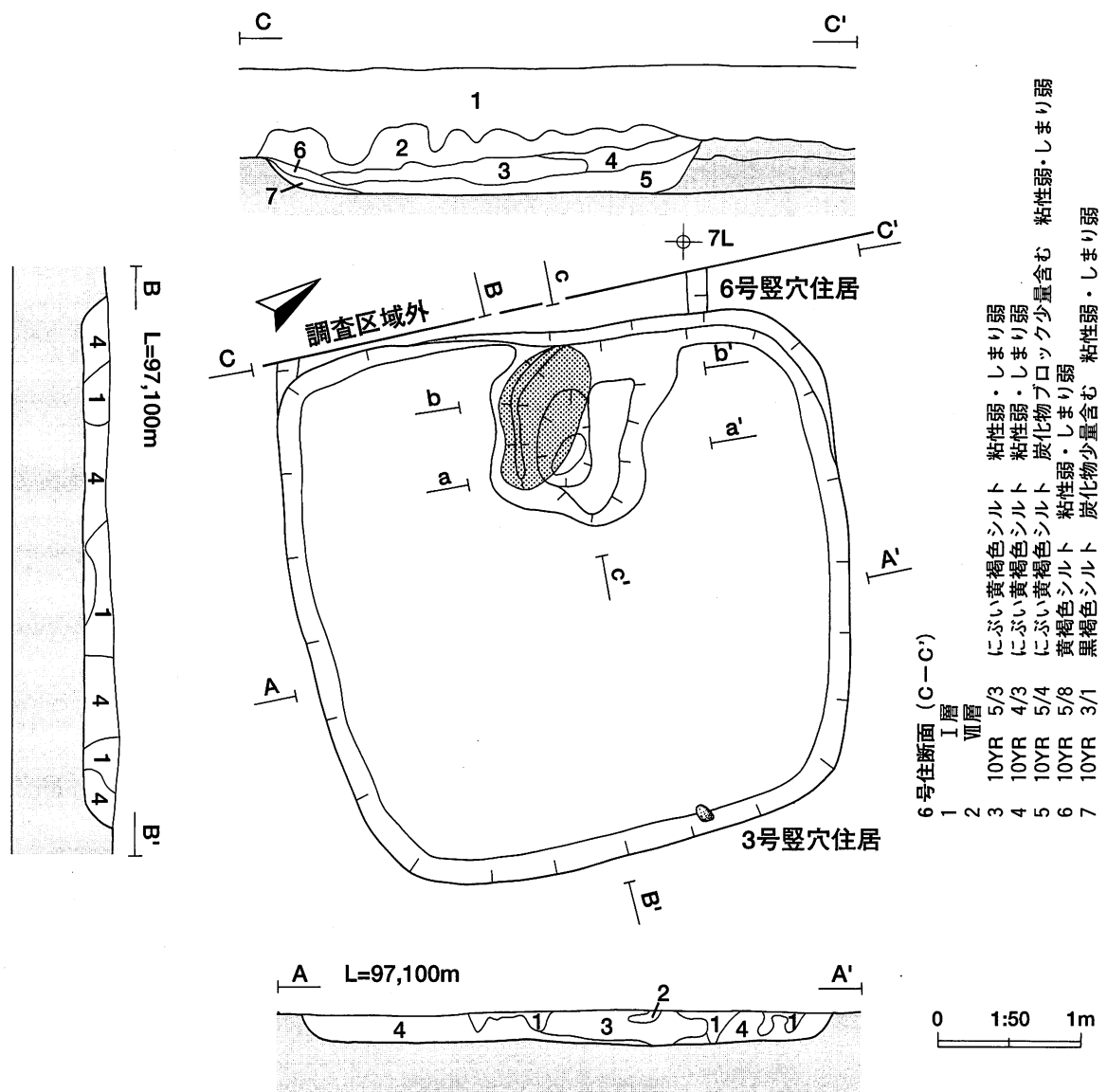
- 2号住カマド (a-a'・b-b'・c-c'・d-d')
- 1 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性なし・しまり弱 黒色土筋状に混入
 - 2 10YR 4/4 褐色シルト 粘性中・しまり中 細砂質土
 - 3 10YR 3/4 暗褐砂 粘性なし・しまり弱 黒色土との混合土
 - 4 7.5YR 1.7/1 黒色砂 粘性なし・しまり弱 暗褐色土がブロック状に混入炭化物混入
 - 5 10YR 3/3 暗褐色シルト 炭化物小ブロック全体に含む 焼土少量
 - 6 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物ごく少量 粘性弱・しまり弱
 - 7 10YR 4/4 褐色シルト 炭化物ブロック全体に含む
 - 8 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物ごく少量 粘性弱・しまり弱
 - 9 10YR 6/3 にぶい黄橙シルト 粘性弱・しまり弱
 - 10 10YR 4/4 褐色シルト 炭化物・焼土粒混入 粘性弱・しまり弱
 - 11 10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性中・しまり中
 - 12 10YR 3/2 黒褐色シルト 焼土ブロック含む 粘性中・しまり中
 - 13 10YR 6/4 にぶい黄橙シルト 粘性中・しまり中
 - 14 5 YR 5/4 にぶい赤褐色シルト 粘性中・しまり強
 - 15 5 YR 5/8 明赤褐色シルト焼土 粘性強・しまり中



- 2号住P1 (e-e')
- 1 10YR 4/3 にぶい赤褐色焼土ブロック
 - 2 10YR 4/4 にぶい赤褐色焼土ブロック多量に含む
 - 3 10YR 4/2 灰褐色シルト



第8図 2号竪穴住居跡②



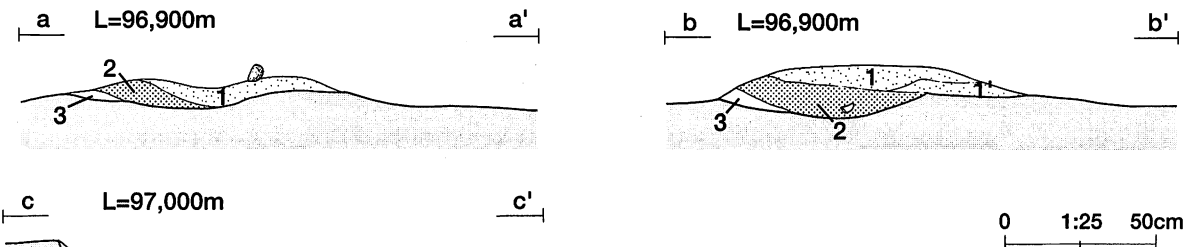
3号住断面 (A-A'・B-B')

1 10YR 3/1 黒褐色シルト 耕作による攪乱

2 10YR 5/6 黄褐色シルト 粘性なし・しまり弱

3 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物ブロック少量 粘性なし・しまり弱

4 10YR 5/8 黄褐色シルト 炭化物ブロック極少量含む 粘性なし・しまり弱



3号住カマド (a-a'・b-b'・c-c')

1 10YR 4/4 褐色シルト 焼土粒含む 粘性弱・しまり弱

1' 10YR 4/4 褐色シルト 炭化物・焼土粒含む 粘性弱・しまり弱

2 5YR 4/4 にぶい赤褐色焼土

3 5YR 5/4 にぶい赤褐色焼土 砂質

第9図 3・6号竖穴住居跡

4号竪穴住居跡

遺構（第10図／写真図版6）

[位置・重複関係] 5 Kグリッドに位置している。検出面はⅢ層黄褐色土で、炭化物と焼土粒がまばらに分布する範囲として確認した。

[規模・平面形] 南⇔北辺約360cmのほぼ隅丸方形を呈すると思われる。西側はほとんど調査区域外にかかる。

[覆土] 残存部の埋土は3層に細分される。にぶい黄褐色シルトで構成され、炭化物を少量含む。

[壁] 壁高の残存値は10～32cm前後である。

[床面] 東側中央部に103×165cmの炭化物の分布範囲を認める。全体的に平坦で、床面はそれほど締まらない。

[カマド] 検出した範囲では確認できなかった。

[柱穴・ピット] 検出した範囲では確認できなかった。

遺物（第11図／写真図版11）

すべて床面からで、土師器の坏片1点、甕片2点が出土している。

5号竪穴住居跡

遺構（第10図／写真図版7）

[位置・重複関係] 5 Lグリッドに位置している。検出面はⅣ層黄褐色土で、本調査前に行った試掘トレンチで大半が削平され、微かな炭化物と焼土粒の分布範囲として確認した。プランの想定は極めて困難であった。

[規模・平面形] 東辺244cm、西辺（270）cm、南辺284cm、北辺262cmのほぼ隅丸方形を呈すると思われる。ほぼ全体が削平をうけている。

[覆土] 埋土最下位しか残存していない。残存部の埋土は、炭化物ブロックを極少量含む汚れた黄褐色シルトで構成される。

[壁] 壁高の残存値は17～24cm前後である。

[床面] 平坦である。

[カマド] 焼土ブロックを含む黄褐色シルトの分布範囲が認められた。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

遺物（第11図／写真図版11）

全部で5点の遺物が出土している。カマドからは土師器の甕片が1点出土した。床面からは土師器の坏片が2点と土師器の甕片が2点出土した。

6号竪穴住居跡

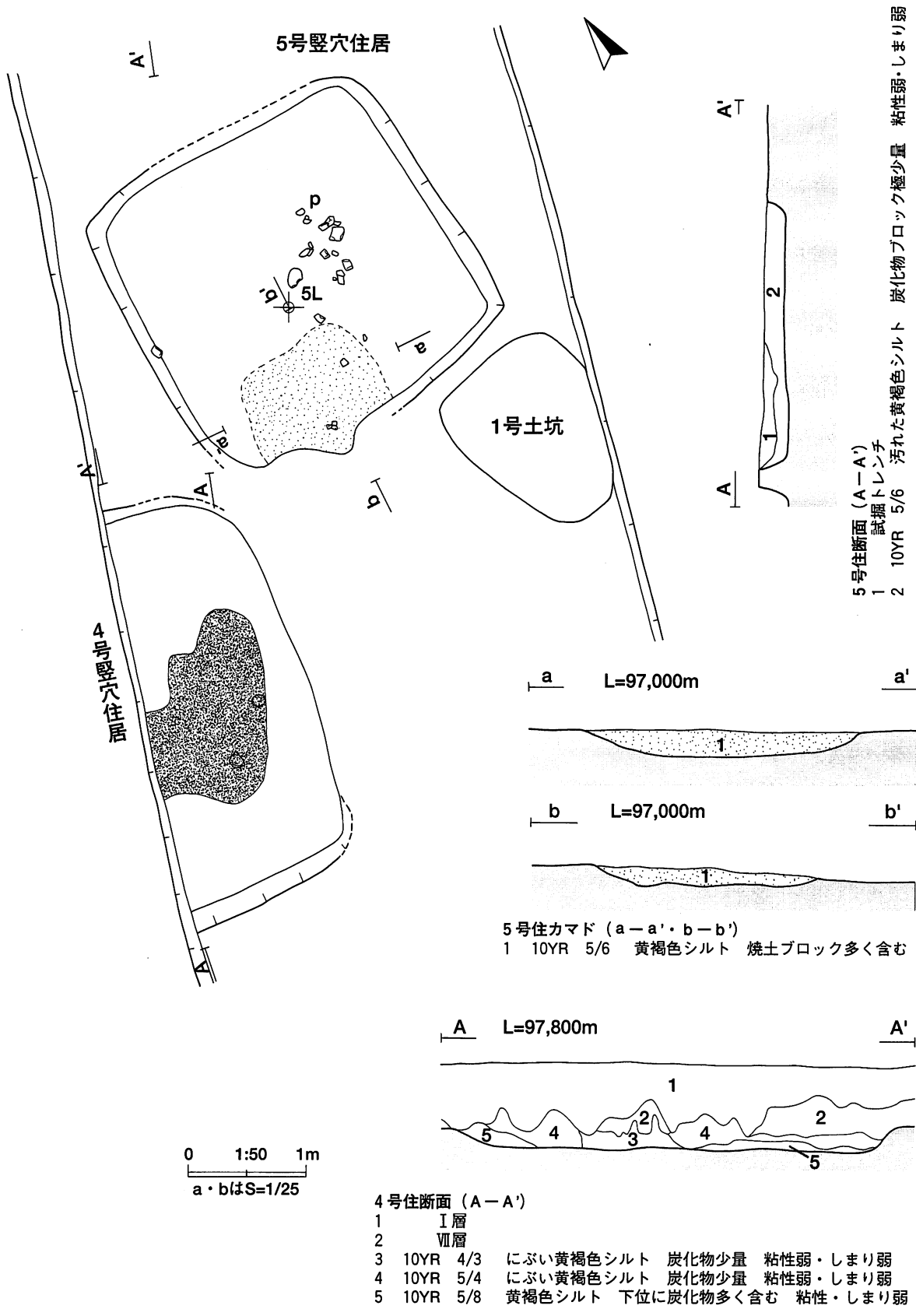
遺構（第9図／写真図版12）

[位置・重複関係] 7 Lグリッドに位置している。検出面はⅦ層下位にぶい黄褐色シルトで、3号竪穴住居跡の精査終了後、西側に延びる炭化物混じりの黄褐色シルトとして確認した。

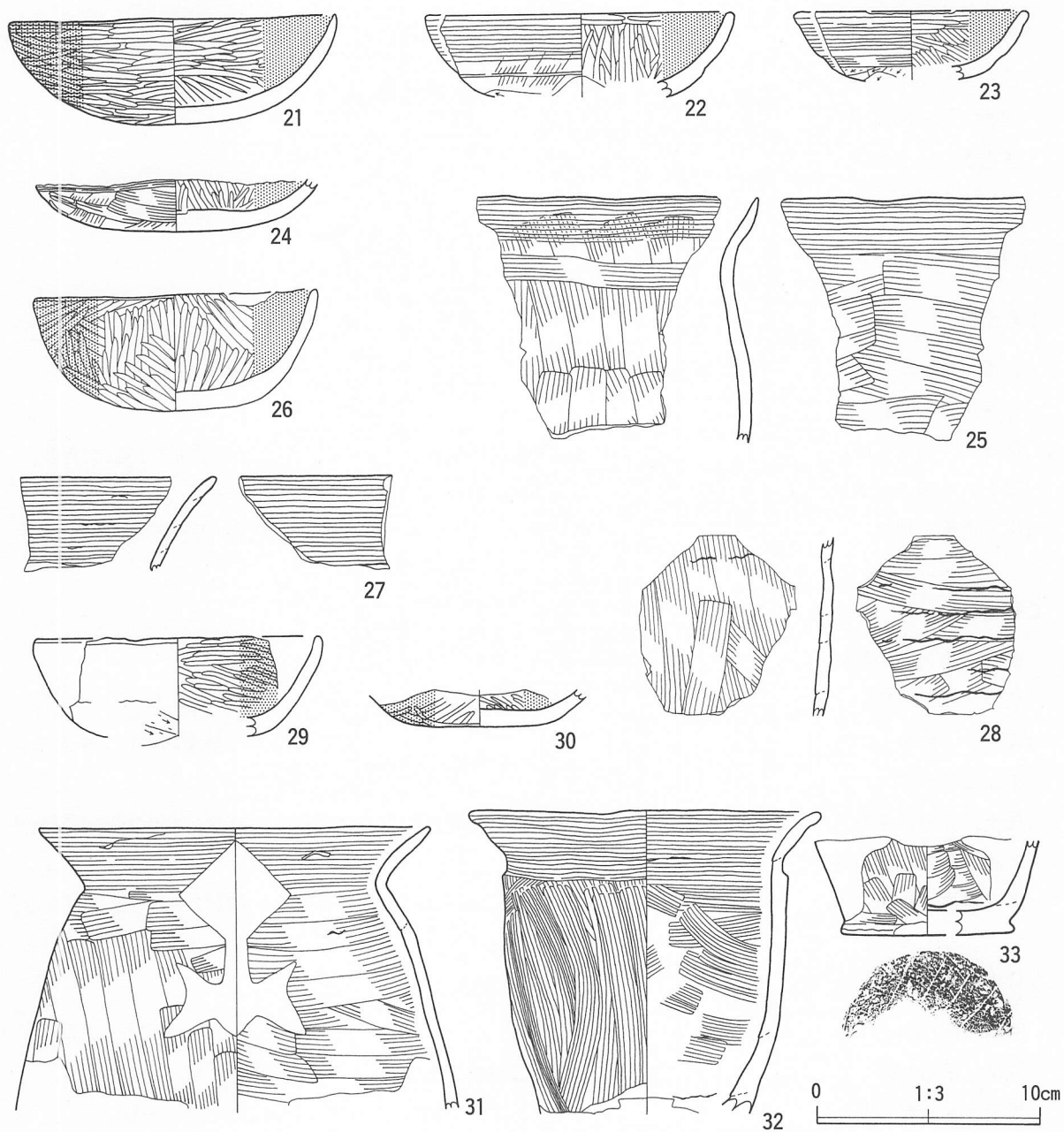
[規模・平面形] ほとんどが調査区域外にかかっているため、北辺、南辺の計測値は残存値である。全体の形状は不明である。

[覆土] 炭化物ブロックを少量含む、黄褐色シルト主体で構成される。

[壁] 壁高の残存値は23～37cmである。



第10図 4・5号竖穴住居跡



No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
21	3住カマド支脚?	土師器	坏	A I b 1	ミガキ	ミガキ	14.8	丸底	4.8	内外面黒色処理
22	3住覆土	土師器	坏	A III a 1	ナデ+ヨコナデ	ミガキ	(13.9)	—	— 3.8	内面黒色処理
23	3住覆土	土師器	坏	A III a 1	ケズリ+ヨコナデ	ミガキ	(10.5)	—	— 3.1	内面黒色処理
24	3住覆土	土師器	坏	A II a	ナデ+ミガキ+ヨコナデ	ミガキ	—	丸底	— 2.3	内面黒色処理
25	3住床面	土師器	甕		ナデ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	—	—	— 10.8	
26	4住床面	土師器	坏	A II b 1	ミガキ	ミガキ	16.7	5.0	5.3	内外面黒色処理
27	4住床面	土師器	甕		ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	— 3.2	
28	4住床面	土師器	甕		ハケメ	ハケメ	—	—	— 8.0	
29	5住床面	土師器	坏	A I b 2	ケズリ+ヨコナデ?	ミガキ	(12.9)	—	— 4.4	内面黒色処理

第11図 3・4・5号住出土遺物

[床面] 平坦である。貼り床は施されていない。床面はとくに締まらない。

[カマド] 検出した範囲では確認できなかった。

[柱穴・ピット] 検出した範囲では確認できなかった。

遺物 (第14図/写真図版12)

埋土から、土師器の坏片2点が出土している。

〔2〕土 坑

1号土坑

遺構 (第12図/写真図版7)

[位置・重複関係] 5Lグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径115×160cm・底部径90×142cmの楕円形を呈する。深さは最深部で15cmである。

[覆土] 単層で、炭化物ブロックをごく少量含む褐色砂で構成される。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は覆土の状況から判断して、古代の可能性が高い。

2号土坑

遺構 (第12図・写真図版7)

[位置・重複関係] 24Mグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径125×190cm、底部径105×170cmの楕円形を呈する。深さは最深部で12cmを測る。
床面には幅広の炭化材が多量に認められる。

[覆土] 5層に細分され、炭化物・焼土ブロックを含む黄褐色シルト主体で構成される。底面付近に現地性とみられる焼土の薄層が形成される。

[出土遺物・時期] 底面から土師器片が少量出土している。時期は出土した遺物から古代であると考えられる。

3号土坑

遺構 (第13図・写真図版8)

[位置・重複関係] 21Lグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径62×67cm・底部径35×38cmの円形を呈する。深さは最深部で14cmを測る。

[覆土] 4層に細分され、炭化物を含む黄褐色シルト主体で構成される。底面付近で現地性とみられる焼土の薄層をわずかに認める。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は検出面や覆土の状況などから判断して古代である可能性が高い。

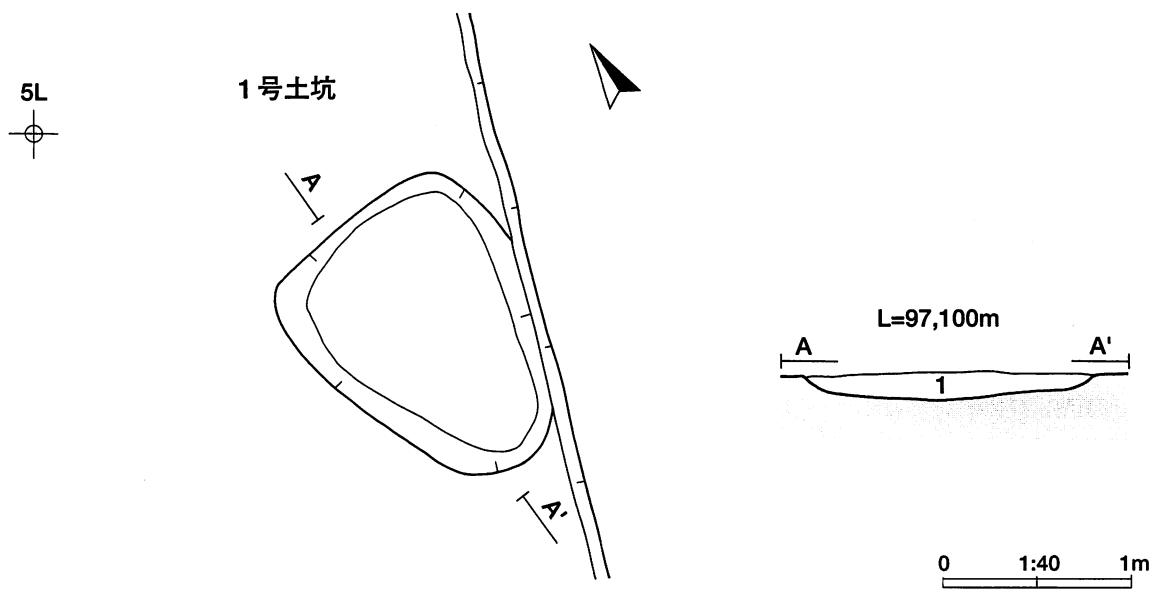
4号土坑

遺構 (第13図・写真図版8)

[位置・重複関係] 21Lグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径70×75cm・底部径40×45cmの円形を呈する。深さは最深部で10cmを測る。

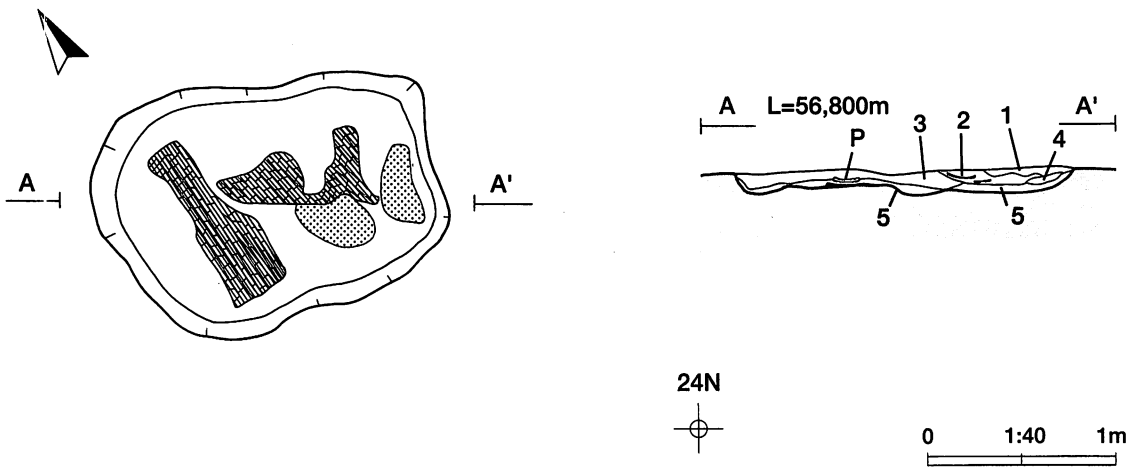
[覆土] 4層に細分され、褐色～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。覆土中位に、現地性とみられる極



1号土坑

1 10YR 4/6 褐色砂 炭化物ブロックをごく少量含む 粘性なし・しまり中

2号土坑



2号土坑

- 1 10YR 4/2 灰黄褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入 粘性中・しまり中
- 2 10YR 4/4 褐色シルト 炭化材・焼土小ブロック混入 粘性中・しまり中
- 3 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物小ブロック含む 粘性中・しまり中
- 4 5 YR 7/8 橙シルト焼土
- 5 5 YR 3/3 極暗褐色シルト 炭化物・焼土ブロック含む

第12図 1・2号土坑

赤褐色シルト焼土が形成される。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は検出面や覆土の状況などから判断して古代である可能性が高い。

5号土坑

遺構 (第13図・写真図版8)

[位置・重複関係] 22Lグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径170×210cm・底部径128×168cmの円形を呈する。深さは最深部で15cmを測る。

[覆土] 炭化物を含む暗褐色シルトの単層である。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は検出面や覆土の状況などから判断して古代である可能性が高い。

6号土坑

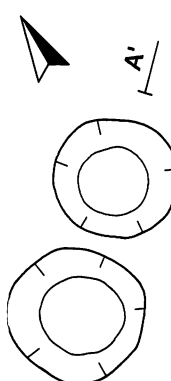
遺構 (第13図・写真図版8)

[位置・重複関係] 5Kグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

[規模・平面形] 開口部径110×225cm・底部径50×148cmの楕円形を呈する。深さは最深部で55cmを測る。

[覆土] 3層に細分され、灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。上位に炭化物ブロックを認める。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は検出面や覆土の状況などから判断して古代である可能性が高い。

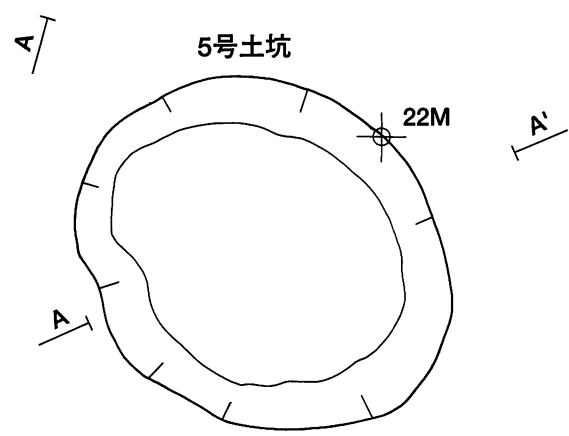


3号土坑

4号土坑

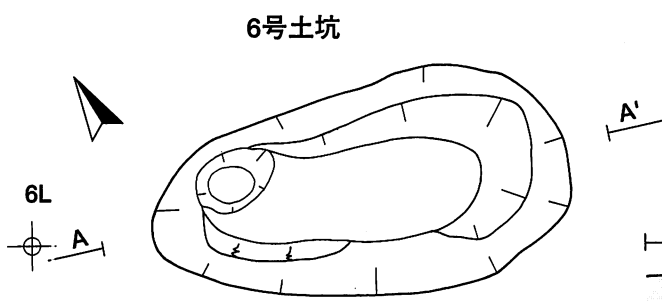
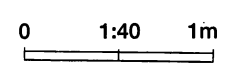
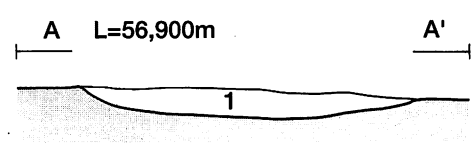
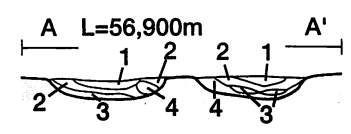
- 3号土坑
- | | | | | | |
|---|------|-----|-------------------|--------|-----------|
| 1 | 10YR | 5/6 | 黄褐色シルト | 炭化物粒少量 | 粘性なし・しまり弱 |
| 2 | 10YR | 5/6 | 黄褐色シルト | 炭化物粒多量 | 粘性なし・しまり弱 |
| 3 | 5 YR | 3/3 | 暗赤褐色シルト焼土 | | 粘性なし・しまり弱 |
| 4 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐色と赤褐色シルトの混合土 | | 粘性なし・しまり弱 |

- 4号土坑
- | | | | | | |
|---|------|-----|-----------|--|-----------|
| 1 | 10YR | 4/4 | 褐色シルト | | 粘性なし・しまり弱 |
| 2 | 5 YR | 3/3 | 暗赤褐色シルト焼土 | | 粘性なし・しまり弱 |
| 3 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐色シルト | | 粘性なし・しまり弱 |
| 4 | 10YR | 5/4 | にぶい黄褐色砂 | | 粘性なし・しまり弱 |

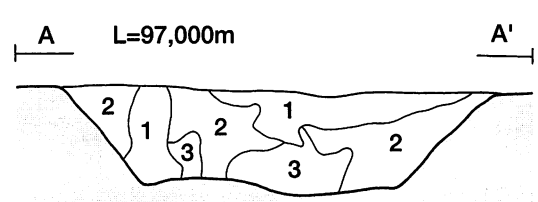


5号土坑

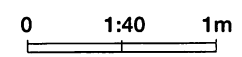
- 5号土坑
- | | | | | | |
|---|------|-----|--------|-----------|----------|
| 1 | 10YR | 3/4 | 暗褐色シルト | 炭化物ブロック含む | 粘性中・しまり中 |
|---|------|-----|--------|-----------|----------|



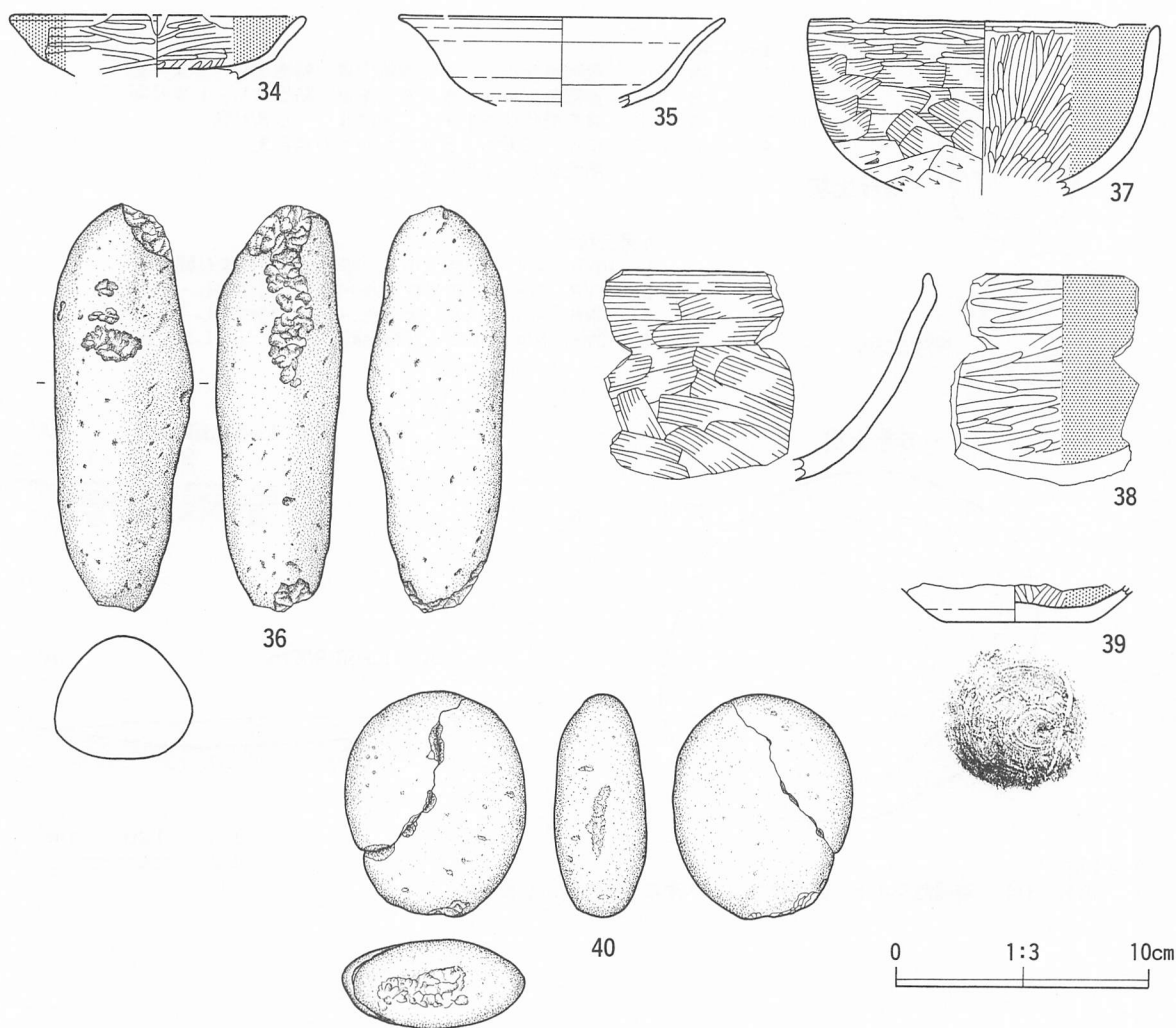
6号土坑



- 6号土坑
- | | | | | | |
|---|------|-----|-----------|-----------|----------|
| 1 | 10YR | 4/2 | 灰黄褐色シルト | 炭化物ブロック含む | 粘性中・しまり中 |
| 2 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐色シルト | | 粘性中・しまり中 |
| 3 | 10YR | 6/4 | にぶい黄橙シルト | | 粘性中・しまり中 |



第13図 3～6号土坑

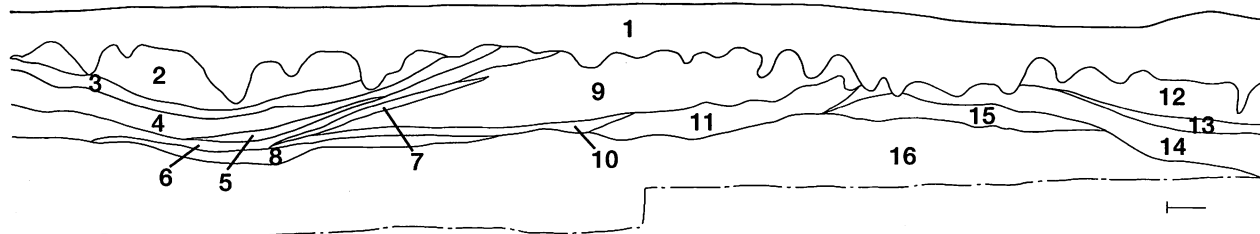


No	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量 (cm)			備考
							口径	底径	器厚	
30	5住床面	土師器	坏		ミガキ	ミガキ	—	丸底	-1.65	内外面黒色処理
31	5住カマド	土師器	甕		ナデ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	17.4	—	-12.5	
32	5住床面	土師器	甕		ハケメ+ヨコナデ	ハケメ+ヨコナデ	(15.9)	—	-13.6	
33	5住床面	土師器	甕		ナデ	ハケメ	—	7.6	-4.3	
34	6住覆土	土師器	坏	A _{III} a ₁	ナデ+ヨコナデ	ミガキ	(11.8)	—	-2.5	内外面黒色処理
35	6住覆土	土師器	坏	B _I b _?	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.9)	—	-3.6	
37	24N II	土師器	坏	A _I b	ナデ+ケズリ+ミ ガキ	ミガキ	(13.7)	—	-6.9	内面黒色処理
38	24N II	土師器	坏	A _I b ₁	ナデ	ミガキ	—	—	-8.3	内面黒色処理
39	21K II	土師器	坏	B _I a	ロクロナデ	ミガキ	—	5.8	-1.5	内面黒色処理

No	出土地点	器種	石質	産地	残存状態	計測値 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
36	6住覆土	敲石	安山岩	奥羽山脈	完形	16.1	5.5	4.9	519.08	端部・側縁部に敲打痕顕著
40	5 K II	敲石	安山岩	奥羽山脈	完形	9.0	7.0	3.6	307.46	上・下端部及び右側縁に敲打痕顕著

第14図 6号竪穴住居跡・遺構外出土遺物

A L=98,000m

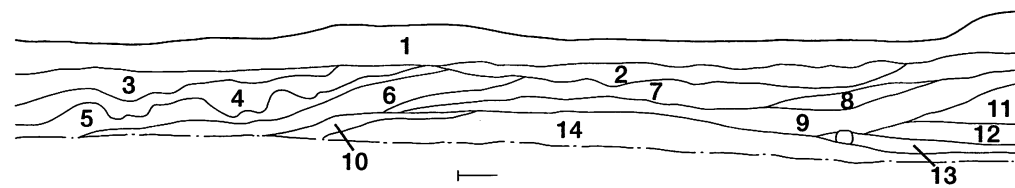


水田部基本土層 (SW-NE)

- 1 10YR 4/4 褐色砂
- 2 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂
- 3 10YR 5/6 黄褐色砂
- 4 10YR 3/4 暗褐色砂
- 5 10YR 3/1 黒褐色粗砂
- 6 10YR 4/1 褐灰色粗砂
- 7 10YR 4/2 灰黄褐色粗砂
- 8 10YR 6/1 灰黄褐色粗砂と黒褐色粗砂のごく細かいラミナ

- 9 10YR 6/4 にぶい黄橙粗砂
- 10 10YR 4/6 褐色砂
- 11 10YR 5/8 黄褐色砂
- 12 10YR 6/6 明黄褐色砂
- 13 10YR 6/3 にぶい黄橙砂
- 14 10YR 3/3 暗褐色シルトと黄褐色砂のラミナ
- 15 10YR 3/2 黒褐色砂と黄褐色砂のラミナ
- 16 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂と明黄褐色砂のごく細かいラミナ
- 17 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂

B L=98,000m



水田部基本土層 (SE-NW)

- 1 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (耕作土)
- 2 N 4/0 灰 (床土)
- 2' 10YR 4/2 灰黄褐色粘土質土 黒褐色砂とのラミナ
- 3 10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物ブロック少量
- 4 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物ブロック少量
- 5 10YR 6/4 にぶい黄橙粘土
- 6 10YR 4/4 褐色粘土

- 7 10YR 4/2 灰黄褐色砂
- 8 10YR 4/2 灰黄褐色砂 褐灰砂とのラミナ
- 9 10YR 4/2 灰黄褐色砂 黒褐色砂とのラミナ
- 10 10YR 4/1 褐灰砂 2~3cm大の礫多数 (砂礫層)
- 11 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂 にぶい黄褐色粘土とのラミナ
- 12 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂 黒褐色砂とのラミナ
- 13 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂 黒褐色粗砂とのラミナ
- 14 10YR 5/4 にぶい黄褐色粗砂 黒褐色粗砂とのラミナ

0 1:60 1m

〔3〕 遺構外出土遺物

遺構外からは小コンテナ1箱分の遺物が出土した。掲載したのは全部で4点である。内訳は土師器坏3点、石器1点（敲石）である。37～38はロクロ不使用の土師器坏で、共に内面ミガキ+黒色処理される。38は口唇部がわずかに内側へ屈曲し、ヨコナデ調整される。39はロクロ成形された土師器坏で底部の切り離し技法は回転糸切りである。体部内面はミガキ+黒色処理される。40は敲石で、上・下端部及び右側縁に顕著な敲打痕が認められる。

分類

遺物は、遺構内外から大コンテナで3.5箱分出土している。このうちここでは出土総数の9割以上を占める土師器について整理し、まとめたい。なお、須恵器の出土はない。遺物は遺構内からコンテナ2.5箱分、遺構外からコンテナ1箱分が出土している。ここでは一括して分類を行った。

分類に当たっては器種を主要な識別形式とし、これに調整技法を付加するかたちで行った。器種には坏・坏形ミニチュア土器・甕がある。

土師器

今回の調査で出土した土師器のうち、図示したものは31個体である。そのうち坏は16点、坏形ミニチュア土器1点、甕14点である。坏の一部を除くほとんどは破片資料で、全体の器形の特徴などがわかるものは少ない。細分は可能なものについて行い、不可能なものについては各器種の特徴を述べるにとどめた。

[坏] 坏の製作に際してはロクロを使用しないものと、ロクロを使用するものとに大別される。ロクロ不使用のものは、底部の形態が丸～平底風を呈し、体部に弱い段や稜を持つ。ロクロ使用のものは、回転糸切り後手持ちヘラケズリによる再調整が行われるものと、再調整が行われないもの、ロクロ痕以外の調整を持たないものに大別が可能である。以下、体部内面の調整技法をもとにして細分を行った。

A群：製作に際してロクロを使用しないもの

I：丸底を呈するもの	} 底部	a：弱い段や稜をもつもの	} 体部
II：平底風を呈するもの		b：段や稜をもたないもの	
III：その他（欠損など）			
1：外反するもの	} 口縁		
2：内湾するもの			

B群：製作に際してロクロを使用するもの

I類：底部切り離し技法が回転糸切りで再調整が施されないもの

II類：回転糸切り後手持ちヘラケズリにより再調整が行われるもの

III類：再調整や器面の磨耗・剥落などにより底部切り離し技法が不明のもの

a：内面にミガキ・黒色処理が施されるもの

b：ロクロ痕以外の調整を持たないもの

[坏形ミニチュア土器] 1点が出土した。手づくねで成形され、体部は内外面ともにナデ調整される。

[甕] 甕の製作に際してロクロを使用するものはない。

製作に際してはロクロを使用せず、口縁部はヨコナデ、体部はケズリ・ナデ・ハケメ調整、一部にミガキ調整される。

3. まとめ

遺構

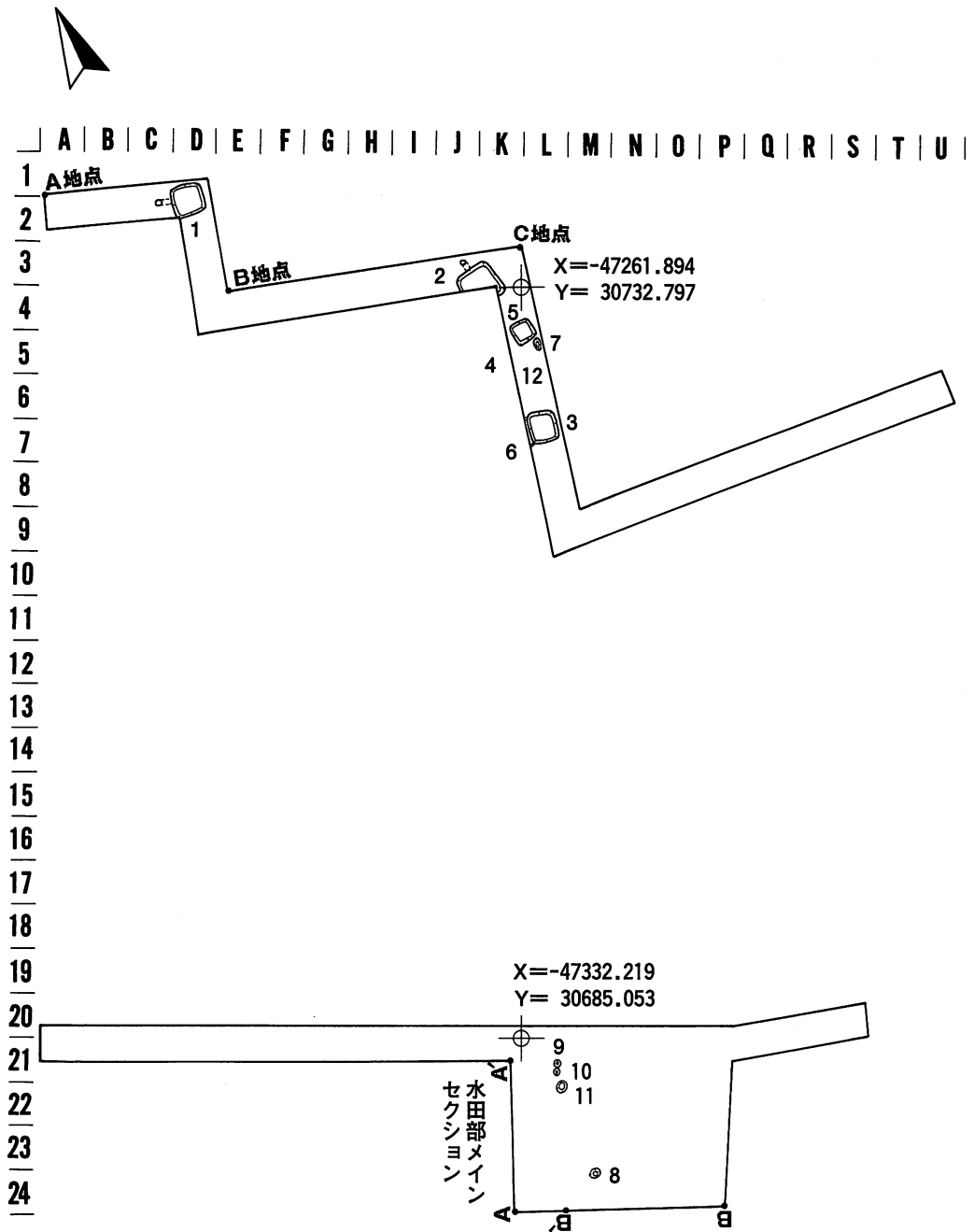
今回の調査で沼田遺跡は、確認された遺構や出土した遺物により、8世紀代に営まれた奈良時代の集落跡の一部であることが明らかとなった。

遺跡は北上川左岸に形成された沖積平野の微高地上に立地している。この場所は昭和30年代に北上川の堤防が築かれるまでは洪水の常襲地区であり、メインレンチの断面観察からも、水成堆積砂礫層のうねりが確認された。現況の水田は、同じく昭和30年代に行われた大規模な造成工事の際につくられたもので、この時点で周辺の地形は大きく改変されている。今回の調査区で見つかった遺構はかろうじて痕跡をとどめる程度のもが多く、西長岡長谷田遺跡同様にプランの想定が困難であった。

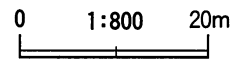
住居跡は6棟検出された。重複するものが存在することから2時期以上の変遷があるものと思われる。カマドの位置はおおむね北～西方向にもつものと思われるがカマドの有無が不明のもの、焼土だけしか残っていないものなど不明な点が多く、詳細を明らかにできなかった。

土坑については6基検出されたが、単独の検出であり、出土遺物もないことからその詳細は不明であるが、埋土の状態が住居と似ることから、これと同時期である可能性がある。

竪穴住居跡は調査区北側で、土坑は調査区南側で多く検出される傾向が認められたが、調査区の南東側を結んだエリアは遺構・遺物とも全く確認することができなかった。これは調査区の南東を結んだエリアが自然堤防の凹地にあたり、立地の影響が反映された結果と思われる。



- | | |
|------------|----------|
| 1. 1号竖穴住居跡 | 7. 1号土坑 |
| 2. 2号竖穴住居跡 | 8. 2号土坑 |
| 3. 3号竖穴住居跡 | 9. 3号土坑 |
| 4. 4号竖穴住居跡 | 10. 4号土坑 |
| 5. 5号竖穴住居跡 | 11. 5号土坑 |
| 6. 6号竖穴住居跡 | 12. 6号土坑 |



第16図 遺構配置図

写真図版

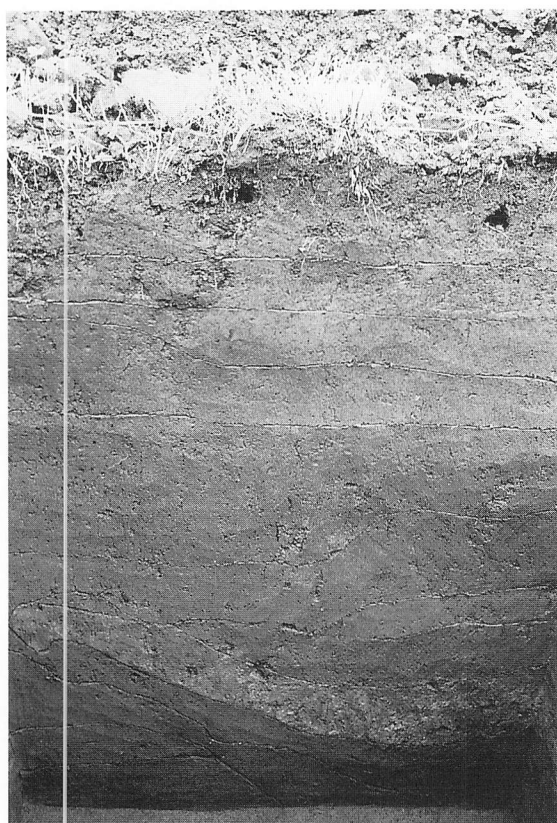


遺跡遠景 (SW→)



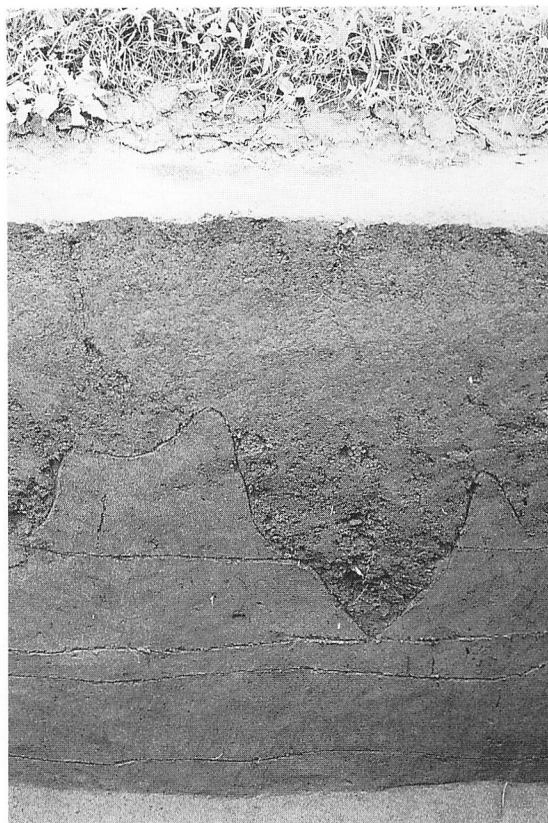
調査区全景 (SW→)

写真図版1 空中写真

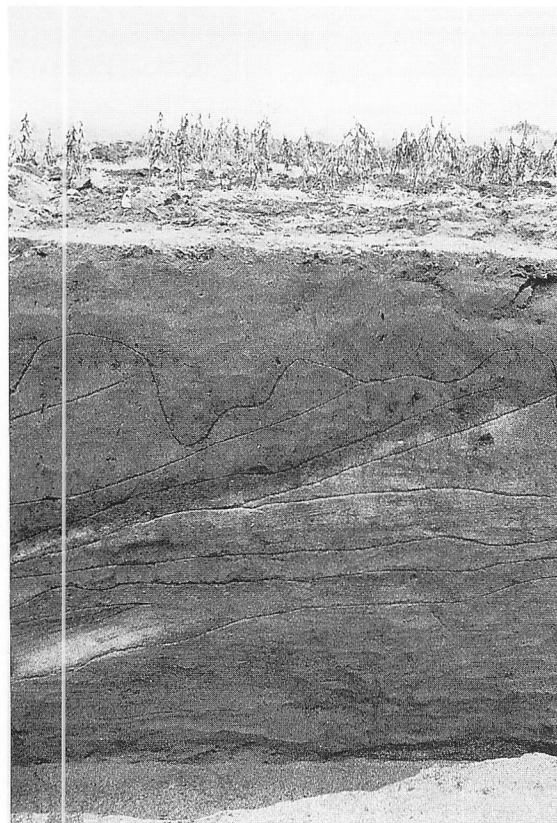


北側調査区

平坦部①



平坦部②



南側調査区

水田部①



水田部②

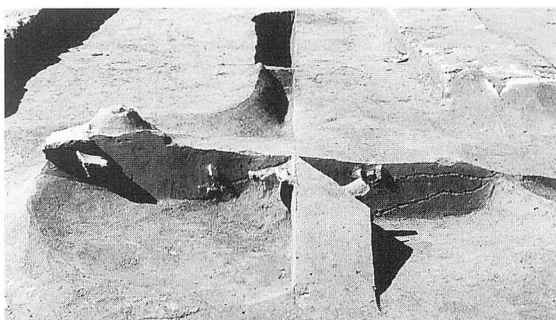
写真図版 2 土層断面



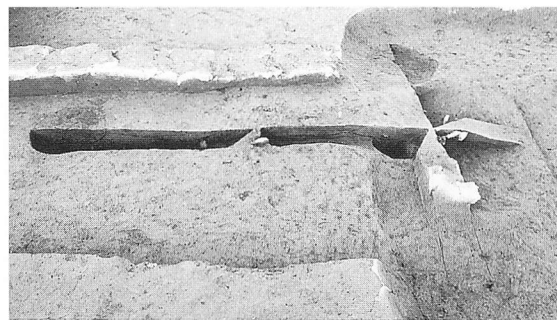
1号豎穴住居跡平面



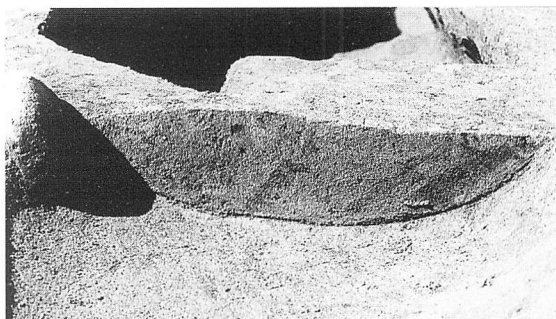
断面



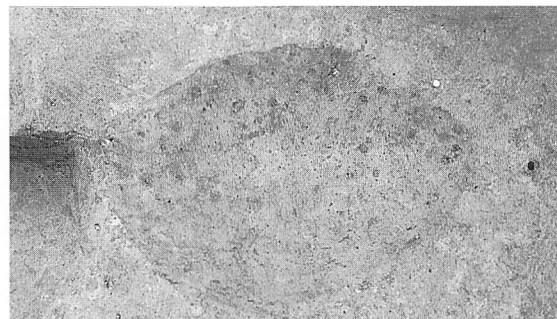
カマド燃焼部断面 (SE→)



カマド煙道部断面 (SW→)



煙道基部断面

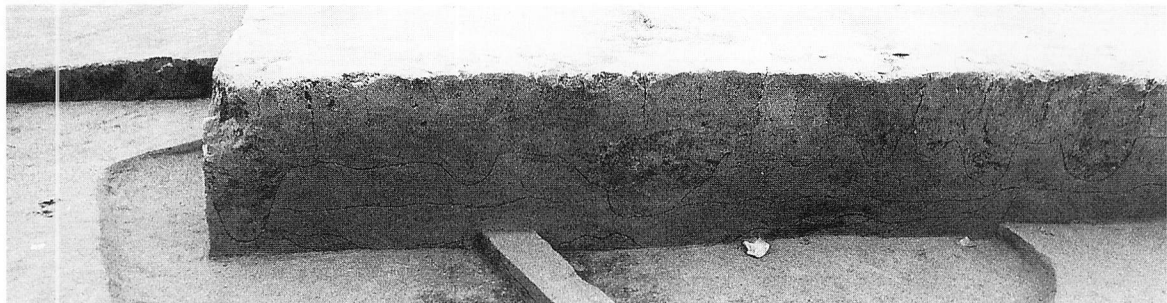


P1 平面

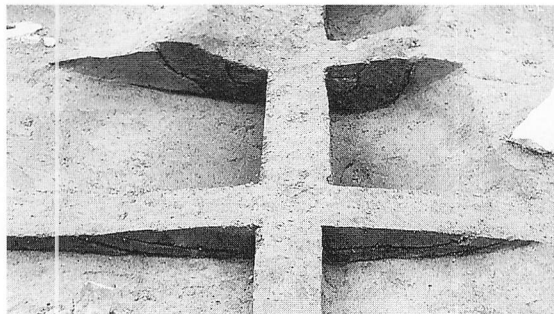
写真図版3 1号豎穴住居跡



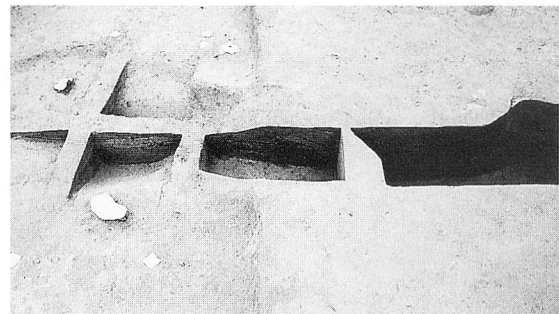
2号竖穴住居跡平面



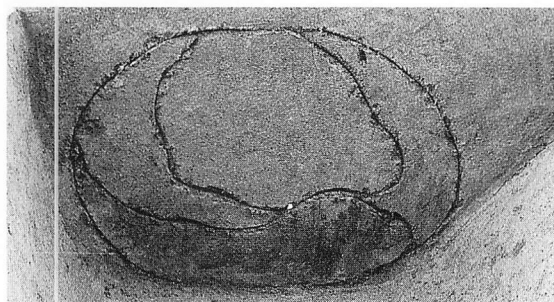
断面



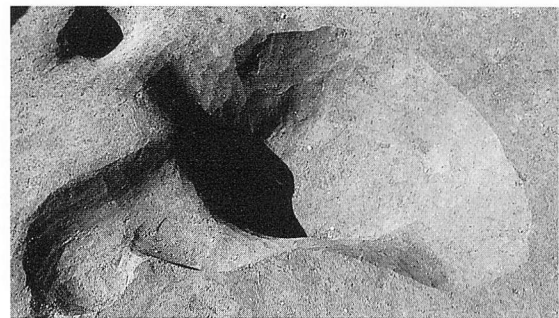
カマド燃烧部断面 (S→)



カマド煙道部断面 (E→)



煙道基部断面

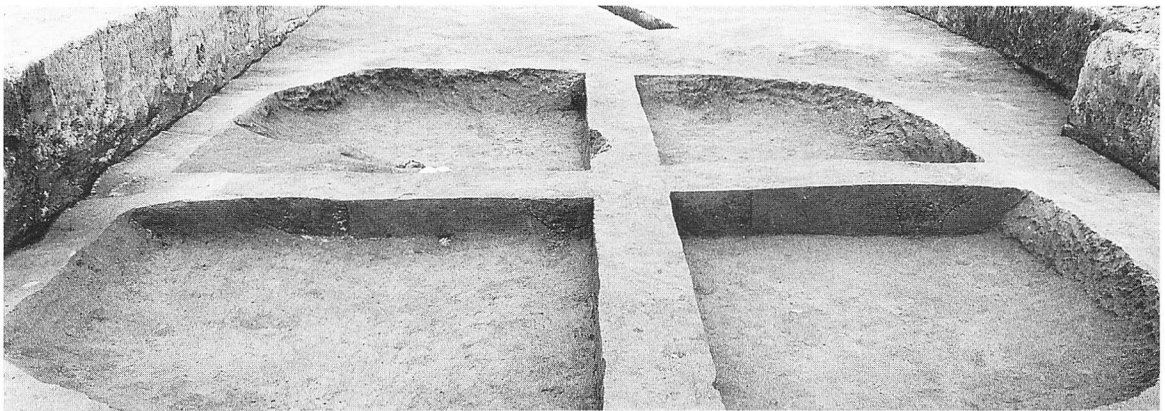


P1 平面

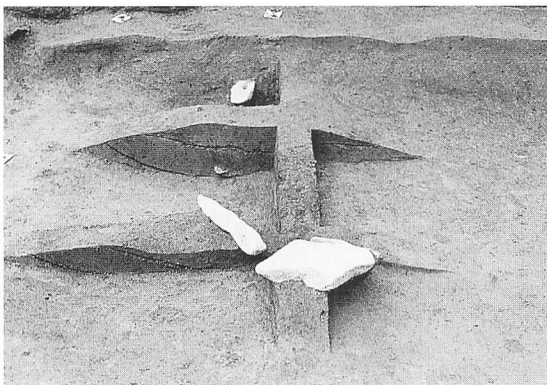
写真図版 4 2号竖穴住居跡



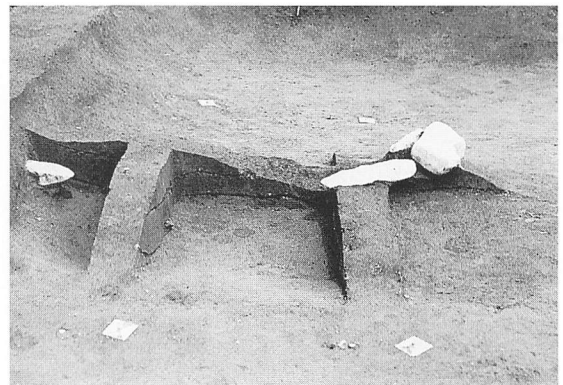
3号竪穴住居跡平面



断面



カマド燃烧部断面 (E→)



カマド燃烧部断面 (S→)

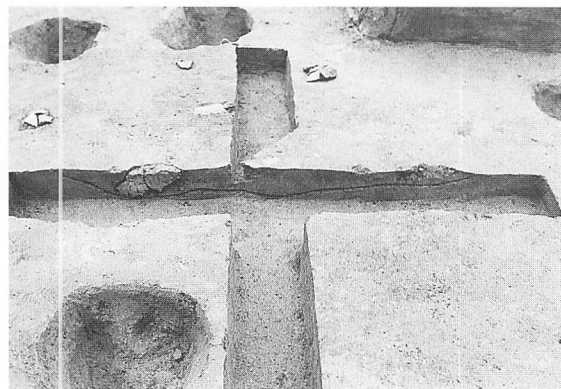
写真図版 5 3号竪穴住居跡



4号竖穴住居跡平面



断面

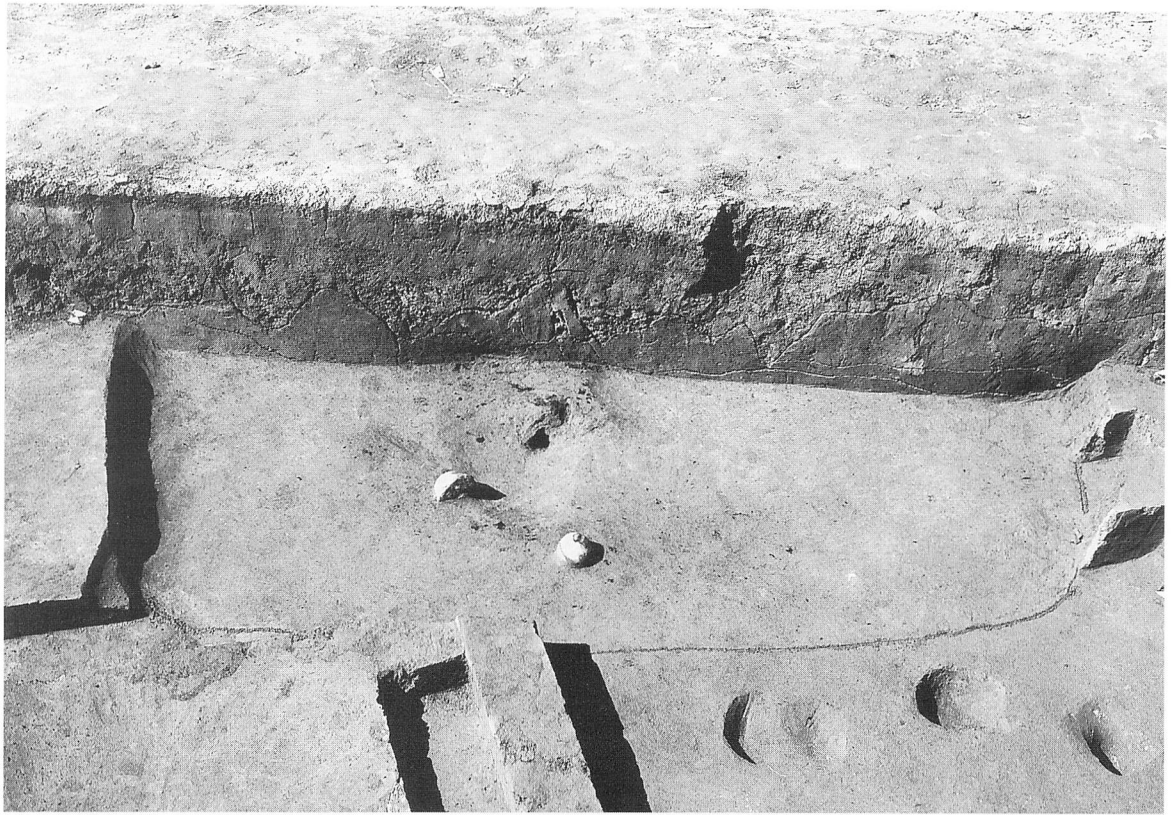


カマド燃烧部断面 (N→)

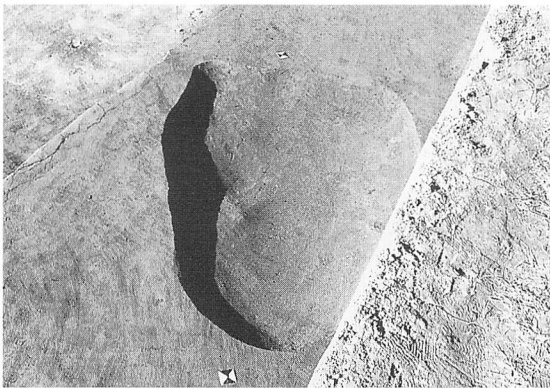


作業風景

写真図版 6 4号竖穴住居跡

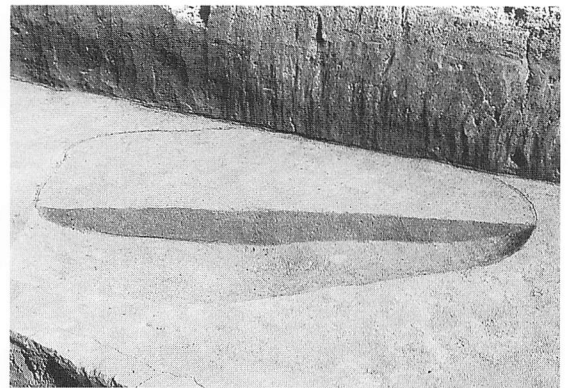


5号竖穴住居跡平面



1号土坑

平面

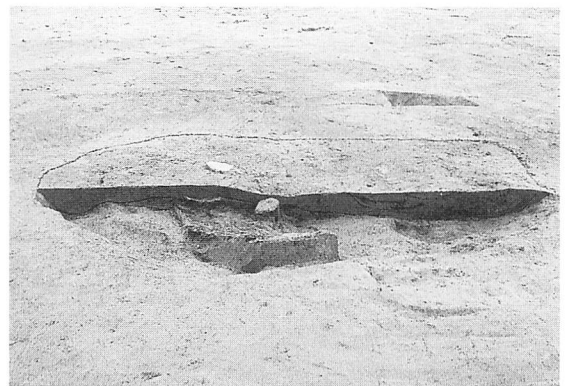


断面



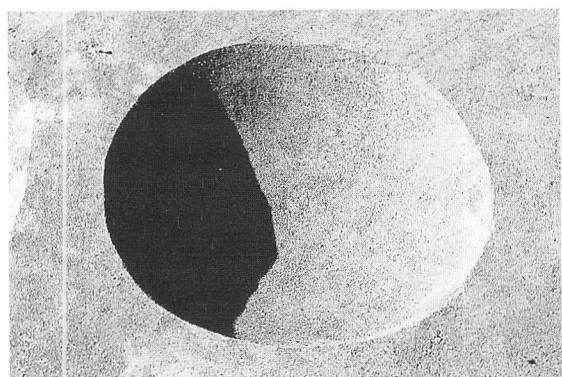
2号土坑

平面



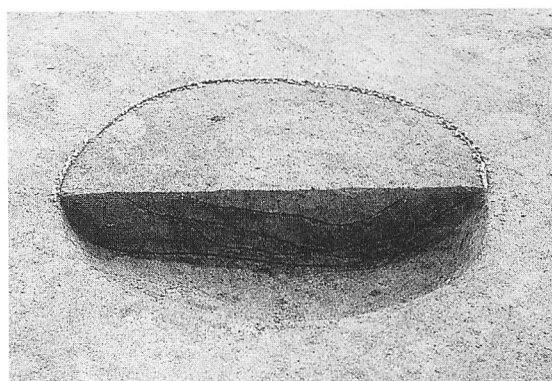
断面

写真図版7 5号竖穴住居跡・1～2号土坑

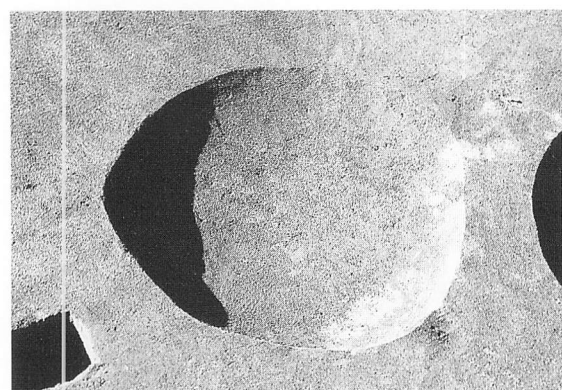


3号土坑

平面

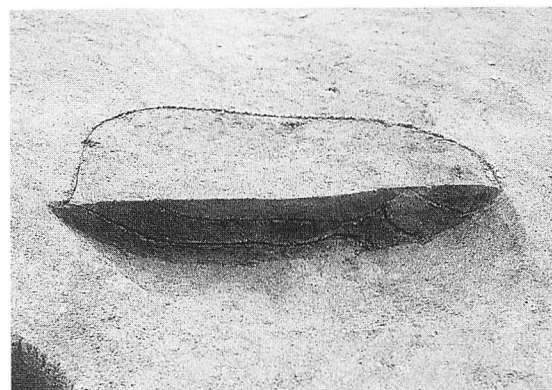


断面

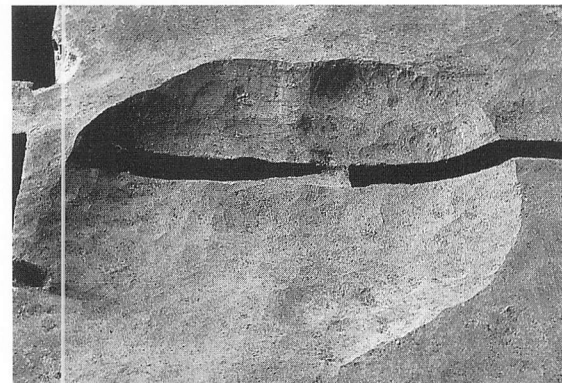


4号土坑

平面

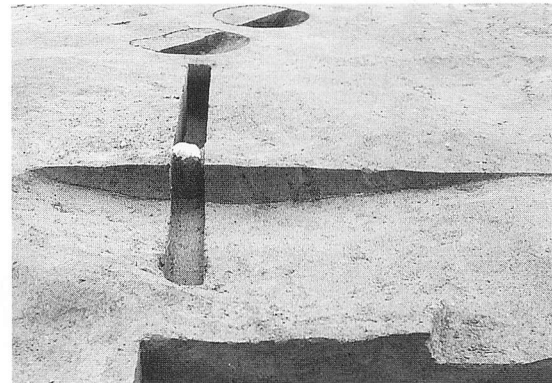


断面



5号土坑

平面



断面



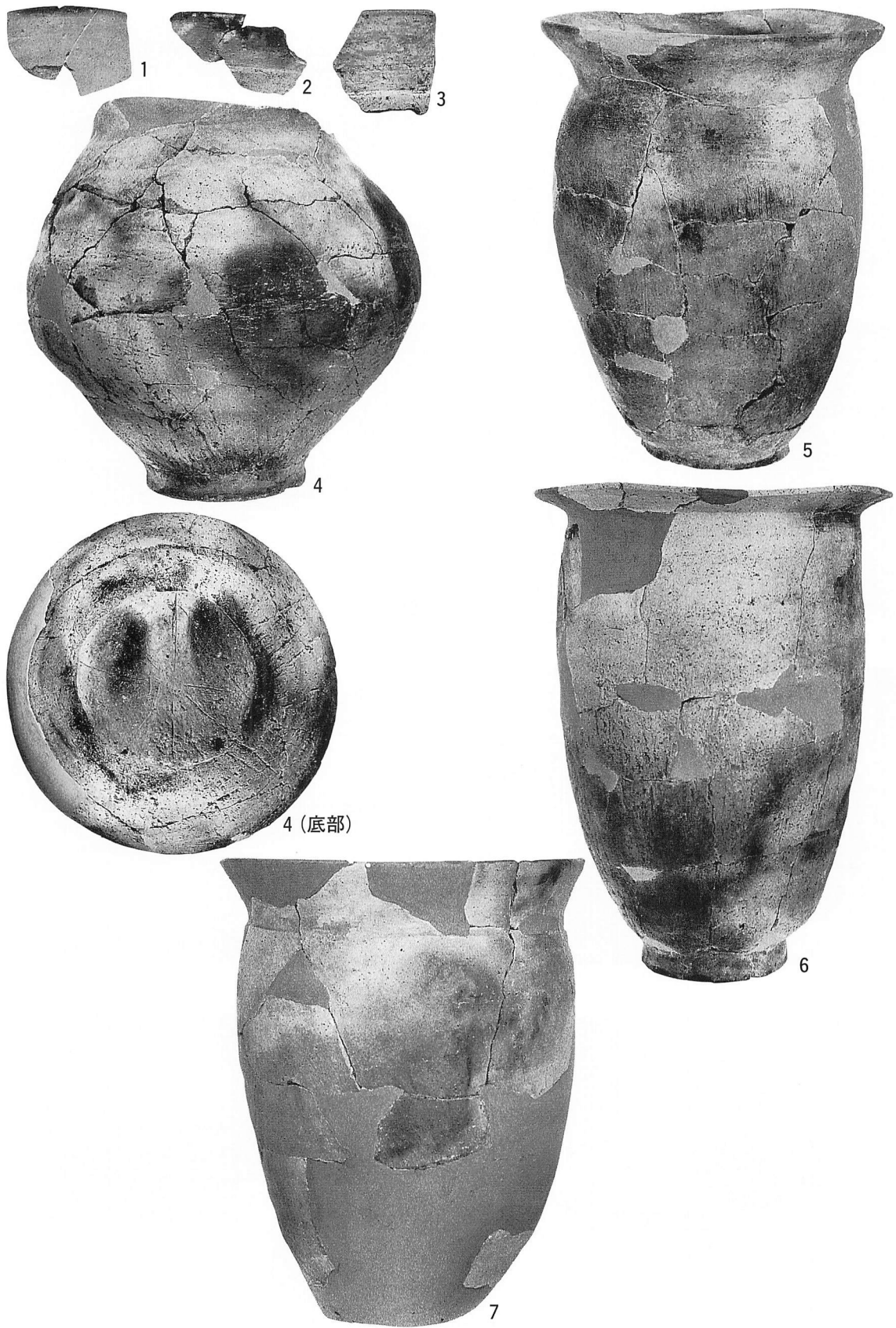
6号土坑

平面

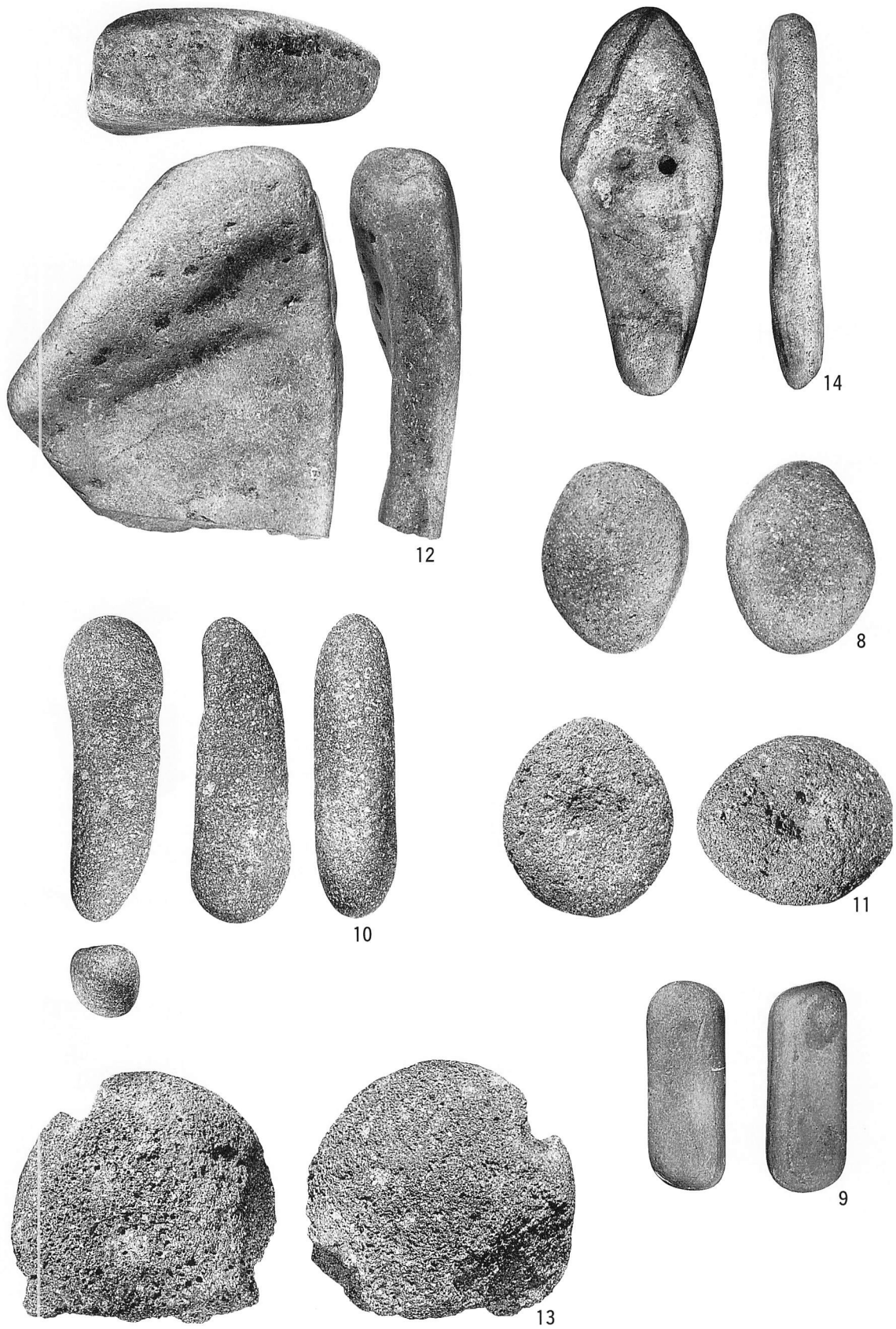


断面

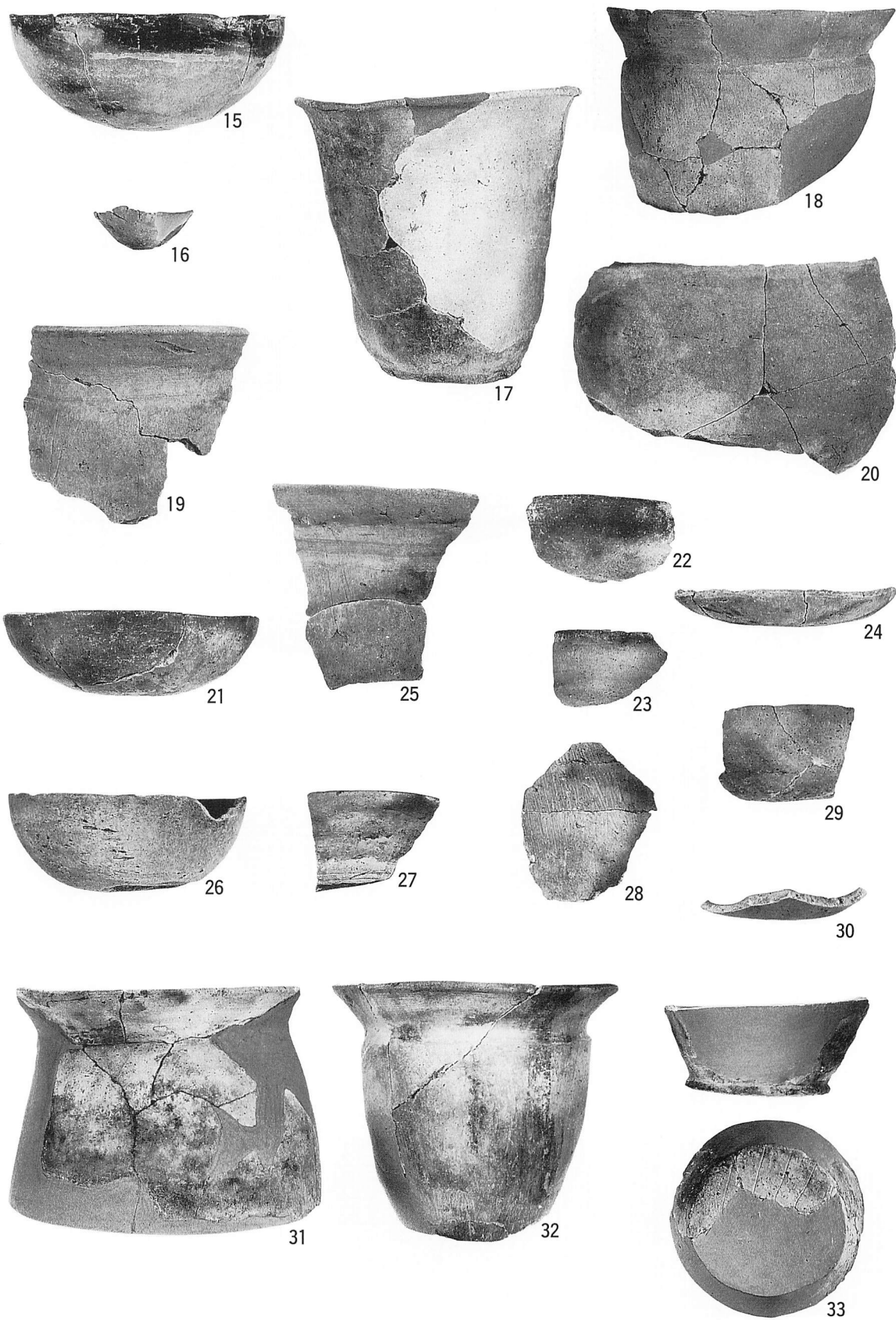
写真图版 8 3~6号土坑



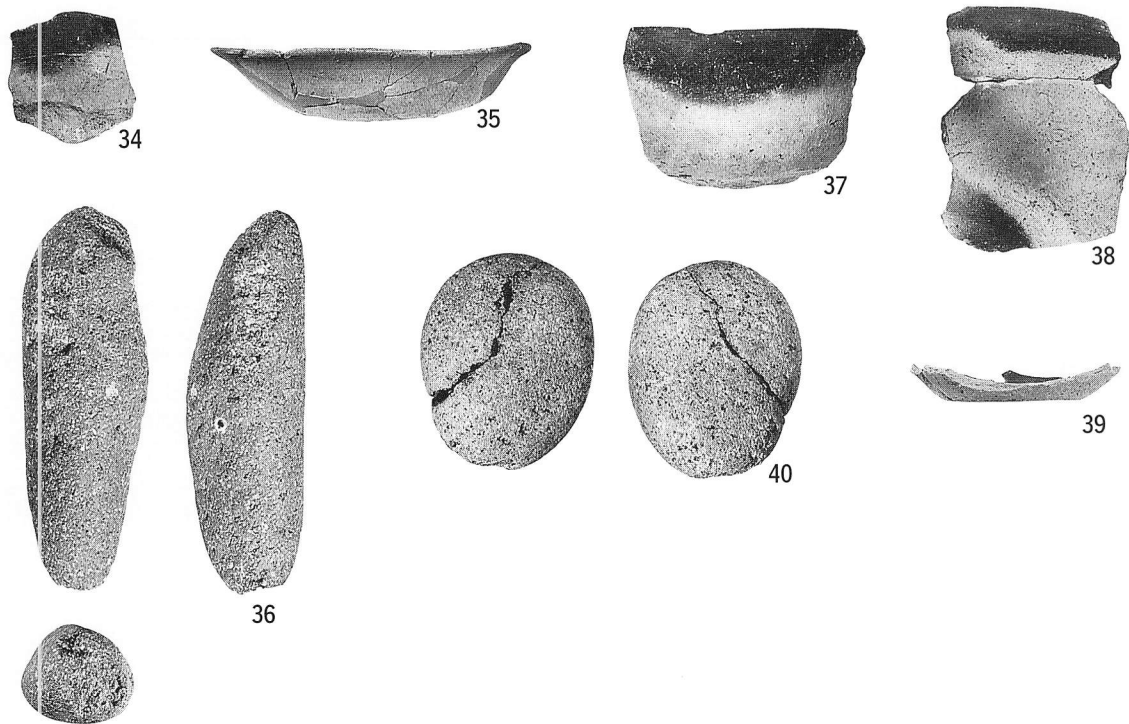
写真図版 9 1号竖穴住居跡出土遺物①



写真图版10 1号竖穴住居跡出土遺物②



写真图版11 2·3·4·5号竖穴住居跡出土遺物



写真図版12 6号竪穴住居跡・遺構外出土遺物

沼田報告書抄録

ふりがな	ぬまたいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	沼田遺跡発掘調査報告書							
副書名	ほ場整備事業長岡地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第361集							
編著者名	中村直美 丸山浩治							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沼田遺跡	いわてけんしわぐん 岩手県紫波郡 しわちういぬほえもり 紫波町犬吠森 あざぬまた 字沼田24ほか	03321	LE57-2272	39° 34' 25"	141° 11' 27"	平成11年 9月1日～ 10月25日	900m ²	ほ場整備 事業
所収遺構名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
沼田遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代		竪穴住居跡 土坑		土師器 須恵器		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第361集

西長岡長谷田遺跡・沼田遺跡発掘調査報告書

印刷 平成13年 2月21日

発行 平成13年 2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL 019 (638) 9001

FAX 019 (638) 8563

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

TEL 0191 (46) 4161

FAX 0191 (46) 4165